

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第157集

若  
宮  
遺  
跡

泉佐野市

# 若 宮 遺 跡

南海本線（泉佐野市）連続立体化事業（その5）に伴う発掘調査報告書

二〇〇七年三月

財団法人  
大阪府文化財センター

2007年3月

財団法人 大阪府文化財センター

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第157集

泉佐野市

# 若宮遺跡

南海本線（泉佐野市）連続立体化事業（その5）に伴う発掘調査報告書

2007年3月

財団法人 大阪府文化財センター



# 序 文

泉佐野市は大阪府の南部、和泉の国のやや南に位置し、西に大阪湾、東に和泉山脈を望む地域です。和泉国は北よりに百舌鳥古墳群・陶邑窯跡群・和泉国府などが設けられ、古代より発展しました。その一方、南よりの泉佐野は漁撈・農耕を中心に栄え、佐野漁港はかつての繁栄を今に伝えます。

佐野川河口に発展した佐野浦は中世の古記録に登場し、魚介や農産物などは佐野市場で定期市が開かれ、市の様子は藤原定家の歌にも詠まれています。さらに、千利休も佐野の塩魚問屋を管理していたことが遺産目録に記されています。

中世末、佐野漁民は秀吉の唐入りを先導したり、海上輸送に協力し、家康の大坂の陣に際しては、玉造蔵庫の武器などを移送しました。武装船団としても知られます。その後、江戸幕府から対馬・房総沖などにイワシ漁の船団を出漁させることを許可され、全国規模で漁業を営んだといえます。漁獲されたイワシは金肥として流通、農業技術の発展と食糧増産に大きく貢献しました。

また、近世後半から近代にかけて、干イワシ・和泉木綿・黒砂糖などが紀州街道・高野街道を通過してひろく流通したことも記録に残り、食野家など、街道沿いに回船問屋などの豪商が成長し、賑わいをみせました。

調査が行われた若宮遺跡は調査区の西北に所在した若宮神社に由来し、佐野町屋の東側辺縁部にあたります。この地は明治になって、南海本線が敷設され、駅舎が整備されました。調査は古い駅舎と軌道を取り除き、新たな駅舎と軌道の整備に伴って実施されました。調査の結果、中世の遺構・遺物の広がりとその後の町屋の痕跡が確認され、かつての佐野の繁栄を垣間見ることができるものでした。

最後に、調査は南海電気鉄道株式会社をはじめ、大阪府教育委員会・泉佐野市教育委員会ほか、関係各位の方々の多大なご指導とご協力をえることができました。謝意を表します。今後とも文化財の保護に一層ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 19 年 3 月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野 正好

## 例 言

1. 本書は大阪府泉佐野市上町3丁目地内に所在する若宮遺跡06-1の発掘調査報告書である。
2. 本調査は南海電気鉄道株式会社から財団法人大阪府文化財センターが平成18年5月1日～平成19年3月30日の間委託を受け、平成18年5月1日から平成18年7月31日にかけて調査を行い、平成18年8月1日～平成19年3月30日まで遺物整理を行い、平成18年度に本書の刊行をもってすべての事業を完了した。
3. 発掘調査の体制は以下に示すとおりである。  
調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、南部調査事務所長 大野 薫、調査第一係長 岡本敏行、主任技師 立花正治 [写真]、担当技師 西川寿勝、専門調査員 奈良拓弥
4. 本書の作成にあつて各担当者がそれぞれ執筆し、文責を目次に示した。編集は西川が行い、一部は奈良、渡辺晴香（調査補助員）、佐藤友翔（調査補助員）による。
5. 遺構写真撮影は現地で西川・奈良が行った。遺物写真撮影は南部調査事務所で担当した。
6. 本調査に伴う基準点測量は株式会社ウエスコに委託した。
7. 本調査に係わる実測図面・写真・遺物などのすべては、財団法人大阪府文化財センターで保管している。広く活用されたい。

## 凡 例

1. 遺構実測図の基準高は、すべて東京湾平均海水位（T.P.）を用いている。
2. 遺構図の座標は国土座標軸（世界測地系）を使用し、第VI座標系に準拠する。
3. 方位はすべて座標北（磁北より東へ $6^{\circ} 50'$ 、真北より西へ $0^{\circ} 16'$ ）を示している。
4. 現地調査や遺物整理は、財団法人大阪府文化財センター2003『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』に準拠して行った。
5. 本書で使用した土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』2005年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
6. 遺構番号は、検出順に通し番号を付けている。そのため、必ずしも時代順にはなっていない。
7. 写真の縮尺は任意である。
8. 遺物番号は、通し番号とした。遺物図面の縮尺は、基本的に土器類は3分の1とし、それ以外は各遺物の大きさに応じて適宜縮尺を変更した。

# 目 次

序文

例言

凡例

目次

第 1 章 位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

a 地理的環境（西川）

b 歴史的環境（西川）

第 2 章 調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

a 地区設定（西川）

b 基本層序（西川）

第 3 章 調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

a 遺構（奈良）

b 遺物 土師質土器・瓦質土器（渡辺）

磁器（渡辺）

陶器（渡辺）

石製品（奈良）

漁具（奈良）

瓦（佐藤）

その他の遺物（西川）

第 4 章 まとめ（西川・奈良・渡辺）・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

出土遺物対照表（渡辺）

遺物実測図版

写真図版

報告書抄録

英文要旨（溝田）

## 挿図目次

図1	遺跡周辺の地質図	1	図7	2区遺構平面図	10
図2	遺跡分布図	2	図8	3区遺構平面図	11
図3	遺跡地区割図	6	図9	4区遺構平面図	14
図4	調査区配置図	8	図10	5・6区遺構平面図	15
図5	標準土層柱状図	8	図11	遺構平面・断面図	16
図6	1・2区遺構平面図	9	図12	春日神社と近世に寄進された石塔	30

## 表目次

表1	若宮遺跡調査一覧	28	表3	出土遺物対照表(2)	32
表2	出土遺物対照表(1)	31			

## 遺物実測図版目次

図版表紙 肥前磁器宝文八角皿

図1	土師質土器・瓦質土器(1)	図14	陶器(2)
図2	土師質土器・瓦質土器(2)	図15	陶器(3)
図3	土師質土器(3)・軟質施釉陶器	図16	陶器(4)
図4	磁器(1)	図17	陶器(5)
図5	磁器(2)	図18	陶器(6)
図6	磁器(3)	図19	陶器(7)
図7	磁器(4)	図20	陶器(8)
図8	磁器(5)	図21	陶器(9)
図9	磁器(6)	図22	石製品(1)
図10	磁器(7)	図23	石製品(2)・漁具
図11	磁器(8)	図24	瓦(1)
図12	磁器(9)	図25	瓦(2)
図13	陶器(1)	図26	瓦(3)

## 写真図版目次

図版表紙 泉佐野駅ホームと調査区

図版1	1区・2区全景	図版5	中国製磁器・中世国産土器
図版2	3区・4区全景	図版6	土師質土器・瓦質土器
図版3	5区・6区全景	図版7	漁具・石製品
図版4	2区遺構	図版8	国産陶磁器・瓦

# 第1章 位置と環境

## a 地理的環境 (図1)

若宮遺跡は大阪府西南部の和泉丘陵にひろがる洪積段丘上に立地する。和泉丘陵はその南に連なる和泉山脈からひろがる。和泉山脈は大阪府と和歌山県の境を東西に走り、紀見峠から紀淡海峡まで延長約40kmに渡る。地形的にはさらにその西に淡路島、四国の讃岐山脈へと連なる。概して、南側が急峻で北側はなだらかな丘陵を形成する。若宮遺跡周辺はこの丘陵が海岸近くまで張り出し、沖積層との境に接する。地質では和泉砂岩を主体とするが、花崗岩など風化の進んだ握りこぶし大の円礫を多く含む洪積段丘(中位段丘)が上面を構成、表層はよく締まった黄橙色の粘土が覆う。表層部は河川による浸食で、南東から北西にむかう谷と支丘が数多く形成されている。若宮遺跡周辺では北から見出川、佐野川、樫井川などが南東から北西に流れ、大阪湾に注ぐ。

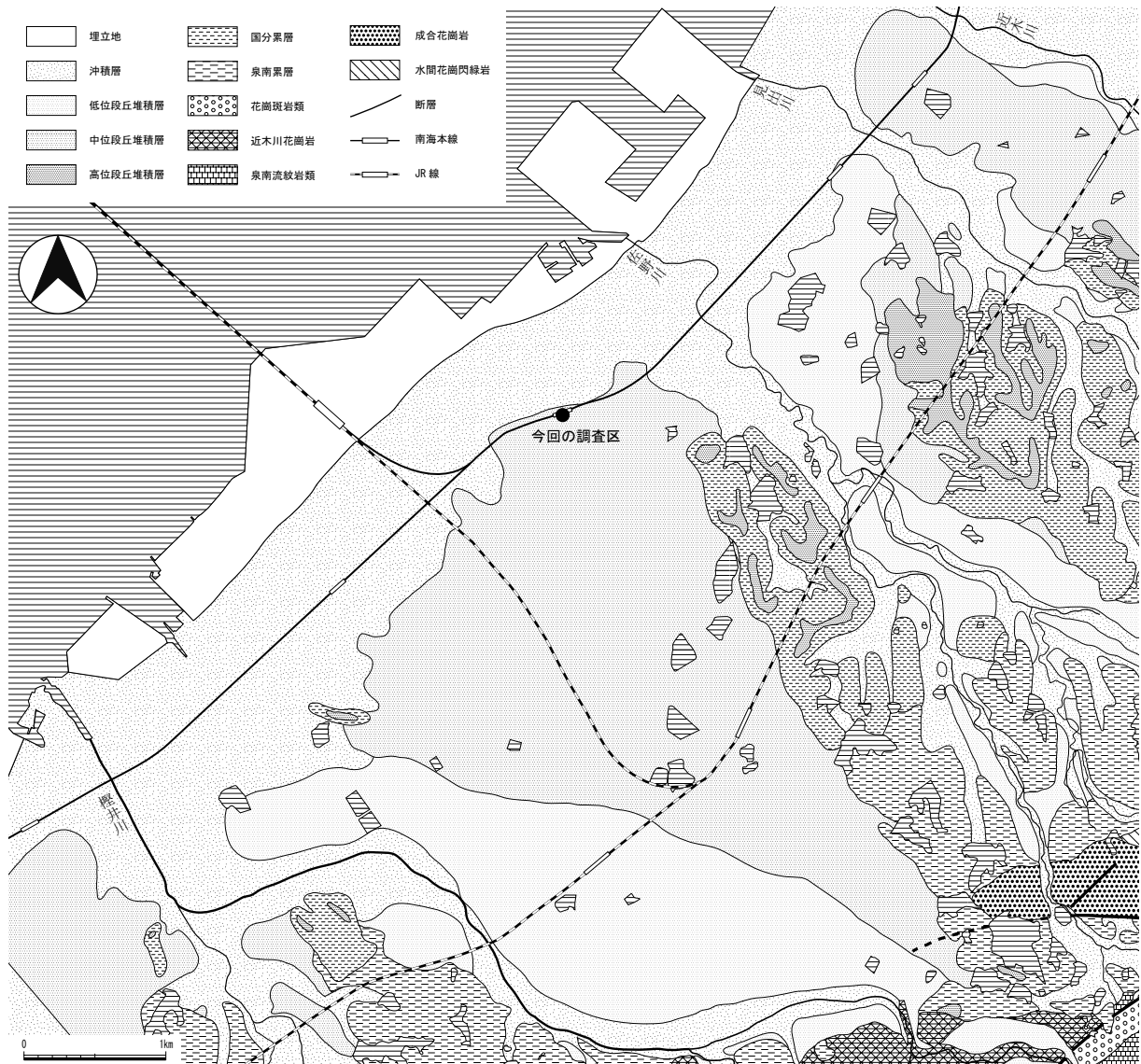


図1 遺跡周辺の地質図 (1/500,000 市原・市川・山田 1986 をもとに加筆)





洪積段丘は海岸部で段差をなし、その北西に約1 km程度海岸部へ張り出す沖積平野を形成する。段丘との境はかつての海岸線が隆起し、海成層が露出したものと考えられている。この層の上面には幾筋もの小河川が段丘を構成する礫や粘土などを再堆積させ、小さな扇状地をいくつも形成している。本遺跡もこのような扇状地堆積物が段丘を覆った微高地に位置する。しかし、周辺は宅地化が進んでおり、堆積の年代や起源などの詳細を観察できなくなりつつある。樫井川右岸ではこの沖積地に海岸線に沿った条里区割りが現在も明瞭に残されている。

最後に、その西側の海岸線は長細く弓なりに海岸砂丘が形成され、比較的遠浅で、かつては松林であったという。しかし、近世以降の漂砂浸食によって、海岸線が後退し、泉佐野付近では20 m程度、砂浜が失われたという。戦後は高度経済成長とともに、埋め立てが進行し、近年では関西国際空港に関連して、海岸線は大きく前進、浜辺の状況は一変している。

## b 歴史的環境（図2）

若宮遺跡は泉佐野市街地の店舗建替などに伴う発掘調査で昭和62年に判明した中世から近世にかけての遺跡である。これまでの調査では中世後半の掘立柱建物や区画溝・墓域の広がり確認され、その上面に江戸時代の町屋の広がり判明している。詳細は次章以降にゆずる。

泉佐野市域では若宮遺跡をはじめ、海岸の低地部に遺跡が密集する。近年の開発に伴う発掘調査もこの部分に偏ることは否めない。とくに、関西国際空港に関連する道路開発や都市基盤整備によって、泉佐野市の平野部で多くの成果が蓄積された。

調査成果は以上のように平野部開発地域にかたよるものの、泉佐野地域の歴史的環境をひも解きたい。まず、旧石器・縄文時代は湊遺跡・三軒屋遺跡・郷之芝遺跡・長滝遺跡などで散在的に打製石器が確認されている。平野部の遺跡からの調査成果に偏り、遺構に伴う資料はなく、この時期の人々の平野部・海岸部への定着は薄かったことのみうかがえる。後の時代の土地改変でこの時期の遺構が削平されたことを勘案しても、遺跡の広がる主体は標高の高い丘陵から山腹に予想できる。

弥生・古墳時代についても、海岸近くの低湿地に水田開発が進行した状況はみられず、縄文時代から継続する船岡山遺跡・三軒屋遺跡で石庖丁や農具が確認されている程度である。この時期になると平野部の湊遺跡・松原遺跡・上町東遺跡などでも蛸壺・土錘などの漁具とともに、製塩土器が数多く確認されるようになる。藻塩を使った製塩作業は夏から秋の農繁期に重なるため、農村での兼業はできないと考えられていた。漁村において、製塩の兼業が行われたのか、製塩を本業とする集団の萌芽が見られたのか、興味をもたれる。

このような製塩活動も古代以降は下火である。伝統的集落としての三軒屋遺跡・湊遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓群や古墳時代中期・後期の小古墳が営まれつづけるが、有力者の台頭は見受けられない。飛鳥・奈良時代も三軒屋遺跡・湊遺跡では集落が継続して行われるが、古代寺院の造営は明瞭でない。

奈良時代後半以降、中央の求心力が薄れると、この地も荘園化が進んだらしい。平安時代になって、市内に遺構の広がりが増加することもこれを裏付ける顕著な特徴である。中でも、五摂家のひとつとして知られる九条家の日根野荘園は絵図などが残されており、研究が進展している。最もさかのぼる古記録は鎌倉時代の建長二（1250）年であるが平安時代には立荘されていたと推測されている。しかし、泉佐野には佐野荘・鶴原荘・長滝荘など、鎌倉時代まで記録に登場しない荘園がいくつかある。

市内の遺跡状況をみる限り、国衙領の減少と荘園の増加によって、古代的な集村から中世的な散村化

が看取できるのではないだろうか。平野部では条里地割りも確認されており、これがいつごろまでさかのぼるのか判然としないが、新たな集落と耕地の展開が想定できる。また、上之郷遺跡では屋敷地から緑釉陶器が発見され、新興勢力の台頭や都市民との交流もうかがえる。中世になるとこの傾向は顕著になり、檀波羅密寺や願成就寺など、拠点となる禅宗寺院が散在、土地開発も平野部から丘陵の深部まで広がるようだ。

中世も後半となる南北朝期には土豪・氏族の活動が顕著になる。南朝方の岸和田氏や上郷氏は和泉山脈の槇尾山などを拠点とし、淡輪・日根野・粕井（榿井）氏など古くから京都と結びついた氏族は北朝につくが、その立場は一貫したものではなかった。

対立が続く過程で、橋本氏が日根野氏から奪った槌丸城（土丸城）を拠点に反抗していたことが記録されている（1353～1379年）。上町遺跡では中小の土豪の屋敷地群と考えられる区画溝に囲まれた建物群が広域にみつかっている。在地に根ざした小勢力の勃興が遺跡の動向からも垣間見られる。さらに、上町遺跡からは製作途中の櫛や輸入陶磁器・荷札木簡などが発見され、この地での商・工業活動も推測されている。同様の区画溝は若宮遺跡に隣接する上町東遺跡でも確認されており、井戸内から多数の櫛がみつかるなど、場所を変えて中世から近世に引き継がれるようだ。

荘園制とともに勃興した中小の土豪は南北朝の動乱や応仁の乱などで離合集散し、発展と衰退を繰り返したと考えられる。これらの戦乱では泉州の大寺も兵火にあい、檀波羅密寺も応仁の乱で焼失したという。

中世末になっても戦乱は続き、根来・石山合戦（1577年）では信長との講和によって、石山本願寺の頭如が貝塚御坊に、信長の本陣が置かれた佐野には城が築かれ津田氏が警備を固めている。信長の後を引き継いだ秀吉は柴田との跡目争いの最中に腹心の中村一氏を岸和田城に入れて、本格的に根来・雑賀を征伐している（1583年）。

このような戦乱で日根野の慈眼院（願成就寺）、大井関神社、貝塚道場などが焼失したことに反し、佐野の市場は賑わい、佐野は大郷として発展した。国衆や根来衆が佐野を放火することもあったが（1504年）、こうした間にも市が開かれたという。市は近郊の漁民や農民が主体となり、次第に商人が産物を持ち込むようになったと考えられている。中世末には堺商人の活動も記録され、その一人千利休は塩魚問屋の支配権をもっていた。

佐野漁民がいつごろから活動し始めたのかは定かでないが、信長の根来攻めの時（1577年）には根来に与し、浜を固めて海上支援したという記録がある。秀吉の唐入り（1592～1598年）のときには水先案内を勤め、物資の運搬を担ったという記録もある。また、家康の大坂の陣（1614年）の時には玉造蔵庫の武器などをひそかに運び出す。武装集団として知られる。

その見返りとして、秀吉は五島列島沖での操業を安堵、江戸幕府からは房総沖での操業も安堵されている。対馬には天正年間（1573～1592年）に没した佐野漁民の墓石が残る。

近年まで大阪湾岸はイワシ漁が盛んであったが、江戸時代の記録によると紀州街道沿いに干イワシ・和泉木綿・黒砂糖などが交易されていたという。近世、干イワシは金肥として食糧増産や農業改革に重視された。

## 第2章 調査方法

### a 地区設定

今回の調査区は南海本線連続立体化事業に伴うものである。関西国際空港へのアクセス手段として、鉄道・道路などの建設や拡充は空港建設とともに進められ、現在も続けられている。これらに先立つ埋蔵文化財の調査は泉佐野市教育委員会・大阪府教育委員会を中心に検討・実施されてきた。そして、関西国際空港開港までの大規模調査は（財）大阪府埋蔵文化財協会が集約的に行い、その後の調査は本センターにも引き継がれている。その経緯は本書シリーズの『湊遺跡他』・『湊遺跡他』Ⅱに詳述されている。

今回の調査は『湊遺跡他』Ⅱで報告されているⅠ調査区（Ⅰ2～5区）・Ⅱ調査区（Ⅱ4区）の南東に隣接する部分で、若宮遺跡内にあたる（以下、「前回調査」）。

調査区名は和歌山側から1区（幅6×長11m）・2区（6×33m）・3区（10×33m）・4区（5×33m）・5区（2×36m）・6区（1×36m）とした（図4）。

現地調査は前回調査によって判明した遺構深度と広がりをもとに、開発部分の残りすべてについて本調査を実施、記録保存とした。その結果、今回の調査では前回調査で判明した遺構のつながりを確認するとともに、上面の水田段差や畦畔の広がりを明確にした。

大阪府教育委員会・大阪府文化財センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できるよう、大阪府発行10000分の1地形図を基準として4段階の区分を実施している。第Ⅰ区画は南西隅を基準として縦軸をA～O、横軸を0～8に区画する。調査地域はC3区内にある。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準として16等分したもので縦（南北）1500m、横（東西）2000mの範囲である。調査地域は9区内にある。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を1～20、横軸をA～Oに区分したものである。

第Ⅳ区画は第Ⅳ区画を10m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸をa～j、横軸を1～10に区分したものである。例えば、今回の調査1区はC3-9-9G-1aなどと表記される（図3）。

特筆すべきこととして、平成15年度から座標値が国際基準に基づく新座標（世界測地系）に変更されたことである。これまでの調査で示されている旧座標（日本測地系）は南に約350m、東に約300mずれる。これにともなって座標値から導かれた地区割の表記も変更となる。本書の座標値は新座標による表記である。

これまでの調査では検出された遺構が基本的に航空測量で図化されてきた。しかし、今回の調査地は駅舎・高層ビル・鉄道軌道に近接しており、航空測量が不適当だった。したがって、遺構写真はクレーンによって行い、遺構の図化は調査区内に任意の4級基準点を10ヶ所以上設定し、20分の1で行った。

これらの基準点は測量委託によって座標値を得た。測量は調査標定点と合わせ3級基準点を設置し、そこから調査区内に4級基準点を設けて行った。遺構・遺物が多数検出された場合は基準点からグリッドを設定する予定であったが、調査区が細長く、方位に対し大きくふれをもつこと、遺物が散在的だったこと、などから綿密なグリッド設定はしなかった。

なお、受託事業は南海本線連続立体化事業（その5）として実施したが調査の継続の結果、工事請負と航空測量委託は（その6）で実施している。

## b 基本層序

全調査区で層序を確認し、基本層序を設定した（図5）。

地表下には南海本線軌道に伴う厚い盛土がある。この盛土は明治30（1897）年の堺～佐野間の南海本線敷設工事に伴う客土に起因すると考える。しかし、ところどころ、戦後の遺物が含まれる部分があり、何度かの改変があったと考えられる。盛土直下は褐灰色の旧耕作土がほぼ全域で確認された。旧耕作土層としたこの層には中・近世の陶磁器や瓦が包含されており、鉄道敷設直前までの耕作を示す層と考える。

旧耕作土層直下は水田耕作などともなう床土と考える砂混じりシルト層がある。ほとんどの調査区で層厚0.1m程度しか残されておらず、大半は削平されたと考えられる。この層も中・近世の遺物包含層である。また、3区北東部において、旧耕作土層と基盤層との間に褐灰色粘土層が部分的にみられた。整地層、あるいは床土の再堆積層である。

床土の直下は基盤層となる。和泉山脈に起源する風化礫を多量に含む中位段丘堆積層である。遺構の大半はこの面に切り込まれたものである。その他、5区の北西の基盤層の一部によく締まった黄橙色粘質シルト層がみられた。和泉丘陵の段丘上面に普遍的に見られる基盤の層である。

現地調査は表土下の盛り土を機械掘削で除去し、それ以下の遺物包含層を人力で慎重に掘削しながら、基盤層上面で遺構を検出した。各調査区では旧耕作土層や床土の砂混じりシルト層上面で顕著な遺構は確認できなかった。しかし、基盤層上面ではほぼ全域に遺構が検出された。深く掘削された遺構の下面が残存したものと考える。

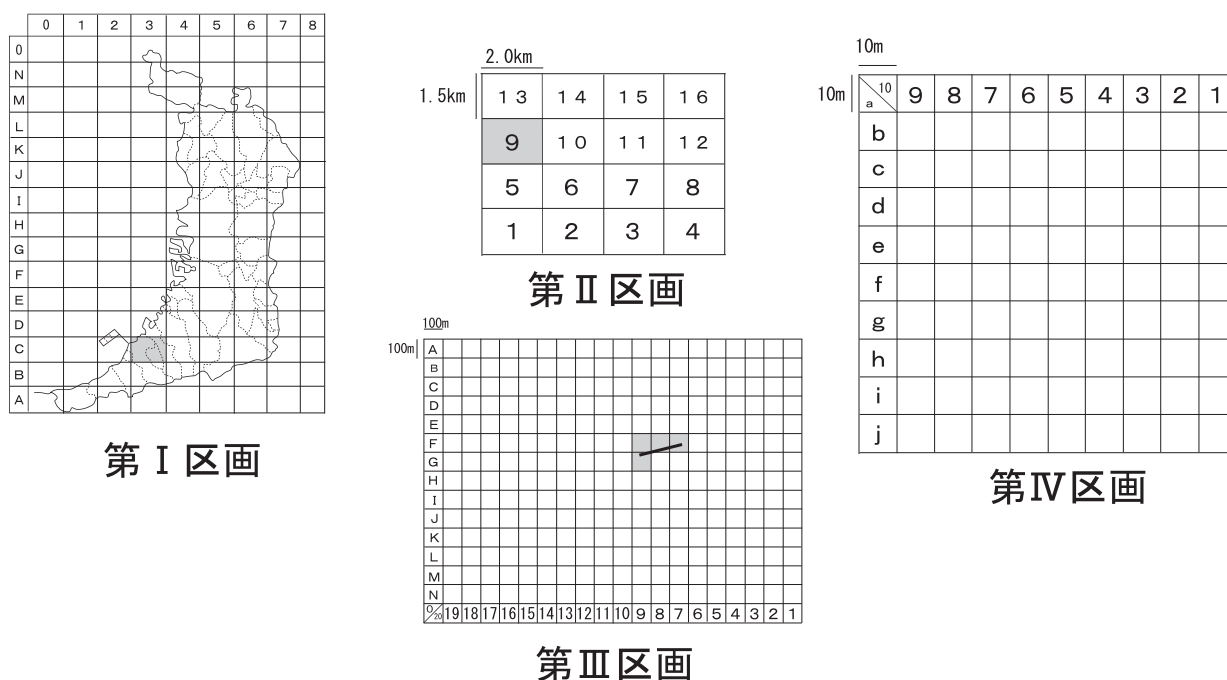


図3 遺跡地区割図

## 第3章 調査成果

### a 遺構

今回の調査区は1区～6区に分かれる。遺構は基盤層に切り込まれ同一面上に中世～近世のものが確認された。一部は整地土層を伴うものの、面的な差異は認められなかった。遺構の上半は後世の耕作化や鉄道敷設に伴う改変で削られており、深く掘り込まれたもののみ明瞭に確認することができた。以下に調査区ごとの詳細を報告する。

**1区（図6・図版1）** 1区では旧耕作土層を掘削した後、基盤層を掘り込む溝・土坑が検出した。

いずれの遺構も浅く、遺物は包含されていなかった。遺構埋土には、旧耕作土層または床土が含まれることから、旧耕作土層と同じ時期と考える。旧耕作土層には中世後期から近世後期にかけての瓦質土器羽釜・肥前磁器・堺焼播鉢・土錘・瓦などが含まれていた。

**2区（図7・図版1・4）** 2区では旧耕作土層を掘削した後、基盤層を掘り込む溝・畦畔・井戸・ピット・土坑が検出した。

02溝は北東から南西にのびる溝で、幅約1.2m、深さ0.1～0.2mを測る。埋土からは瓦質土器（4・6・8・12）と土師質土器の羽釜（7）、播鉢（9）などが出土した。また、結晶片岩の板石1点が含まれていた。この石は周辺に産出せず、紀ノ川流域か吉野川流域からもたらされたものである。遺物は中世のものに限られるが、06畦畔と一体となっており、江戸時代後期以降の水田化の時期まで方向や溝の機能を規制していた可能性がある。前回調査で検出したI4区I2溝、泉佐野市教育委員会の調査で検出された97-1区SD2137と一連の遺構である。

06畦畔は幅約1.4m、高さ約0.3mを測る。基盤層を削りだし、上半は盛土を行う。北東から南西方向に軸をもつが、周辺の条里に沿うものか判然としない。江戸時代後期以降の耕地化にともない畦畔として形成されたものであろう。

05土坑は02溝と06畦畔を切る、直径約2.1m、深さ約0.4mの土坑である。肥前磁器染付碗（73）や肥前陶器京焼風碗（175）など、18世紀後半までの遺物が含まれていた。さらに15世紀代の備前焼播鉢（214）など中世の遺物が含まれているが、02溝に由来するものが混入した可能性が高い。

29井戸は直径約1mの円形を呈する素掘り井戸である。井戸は上層が人為的に埋め戻された様相の礫混じりの茶褐色粘土層で、肥前陶磁器などが含まれる。中層からは中世末頃の瀬戸美濃焼天目碗（174）が出土した。中層以下の埋土は一変して自然堆積による暗青灰色粘土層となる。現地表より約5m掘り下げたが、掘削限界に達したため、底部の詳細は不明である。

2区の旧耕作土層からは瓦質土器羽釜・土師質土器羽釜・瀬戸美濃焼天目碗・肥前磁器・堺焼播鉢・土錘・瓦など、中世後期から近世後期までの遺物が出土した。

**3区（図8・図版2）** 3区では旧耕作土層を掘削した後、基盤層を掘り込む溝・畦畔・井戸・ピット・土坑・落ち込みを検出した。

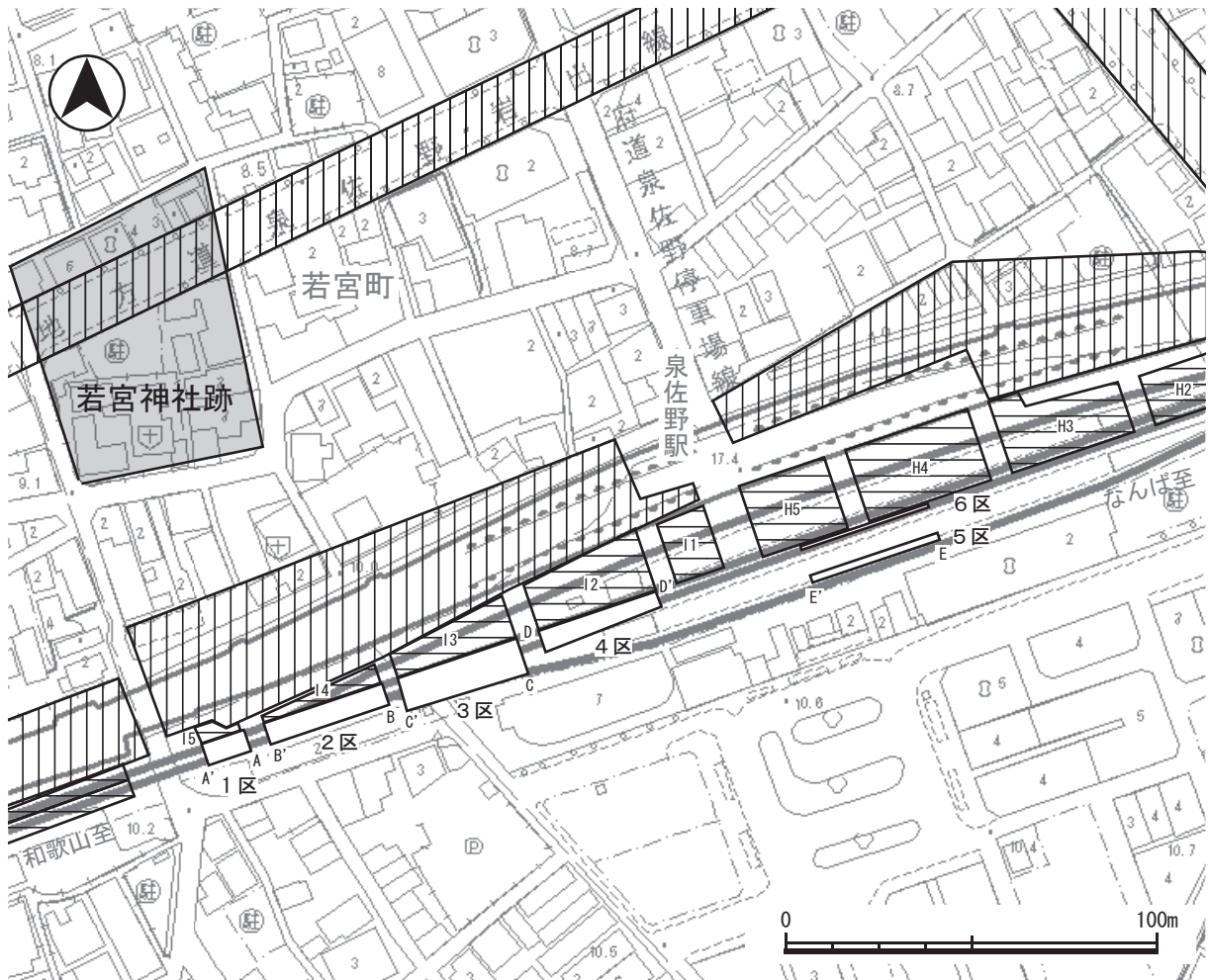


図4 調査区配置図 (1/2,000)

- (財)大阪府文化財センター調査
- 泉佐野市教育委員会調査
- 今回の調査区

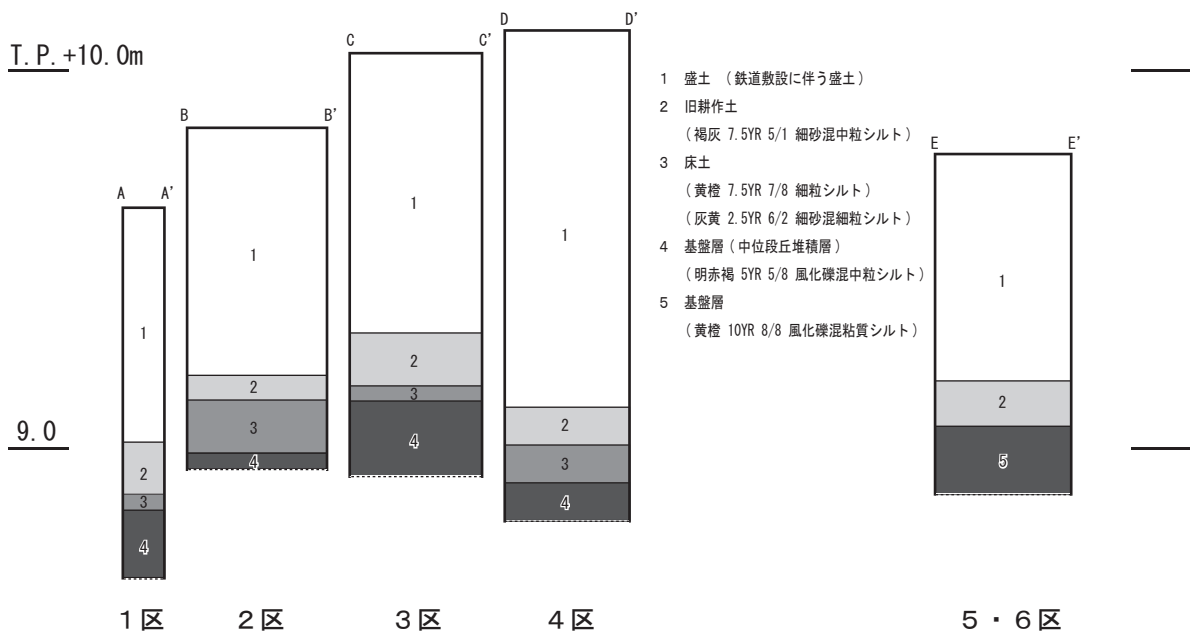


図5 標準土層柱状図 (縦:横 = 1/200:1/2,000)

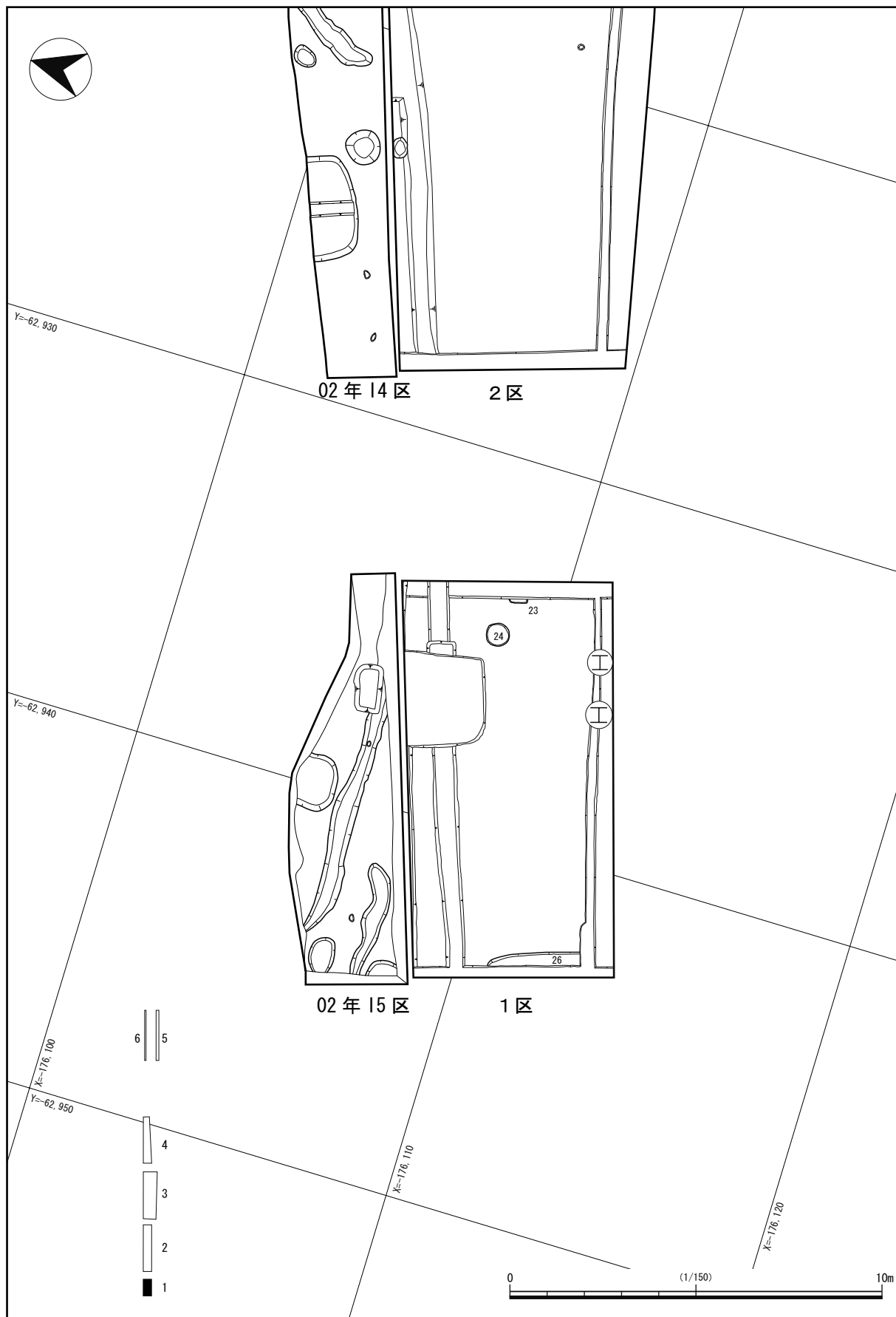


图6 1・2区遺構平面図



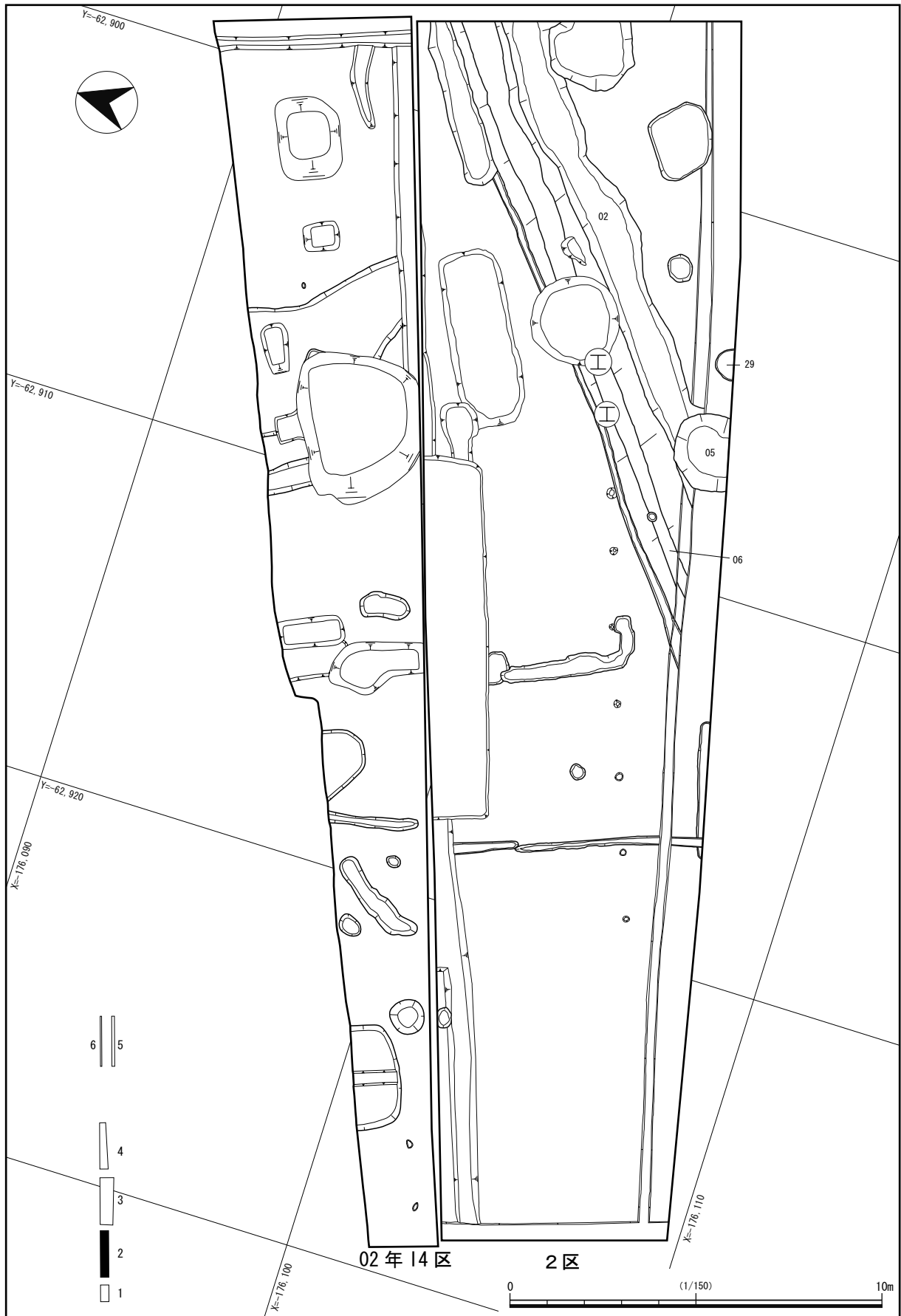


图7 2区遺構平面図

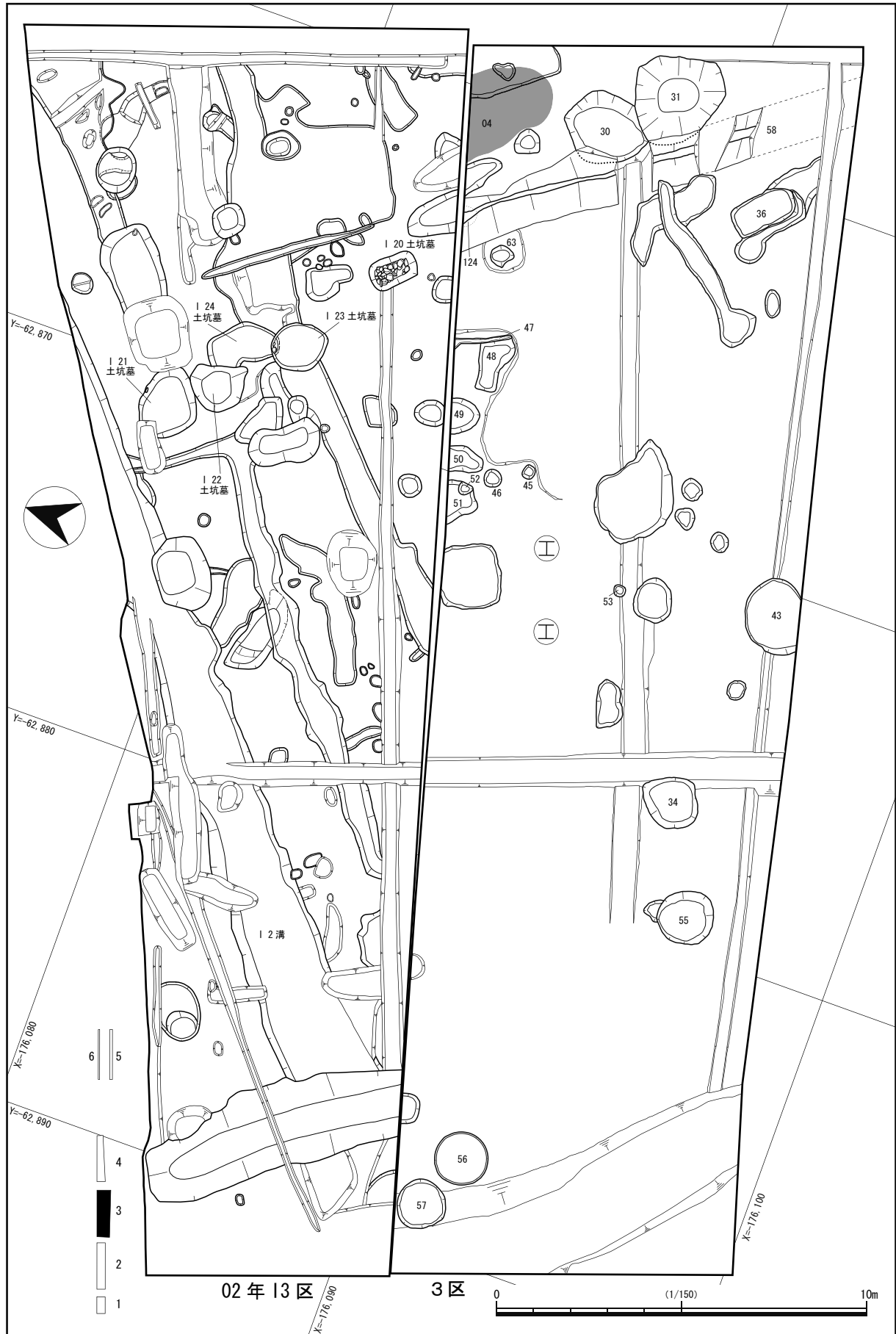


图8 3区遺構平面図

04 土器溜りは基盤層を掘りくぼめることなく、直径約 1.5 m の範囲に遺物が密集する遺構である。旧耕作土層の上面にも遺物があることから、旧耕作土層と同時かやや後行する時期と考えられる。後にゴミ穴が掘り返されたものか、意図的に不燃物が集められたものかもしれない。肥前磁器・陶器・瓦質土器・瓦・硯などの大量の遺物が含まれていた。概して、近世前期から後期までの遺物が混在する。接合関係を示す遺物が 31 井戸上層に含まれていることから、ここの廃棄物に起因するものかもしれない。しかし、遺構の上面は耕作や鉄道造成の攪乱で遺物が移動した可能性もある。

31 井戸は掘方が直径約 2 m ですり鉢状に掘り込まれる（図 11）。上面から約 1.5 m で、直径約 1 m の大きさを垂直に掘削され、3 m 以上の深度となる。井戸の埋土上層は人為的に埋められた様相で、肥前磁器・土師質土器焙烙・瓦・硯・石臼などの遺物が大量に出土した。概して、江戸時代前期から中期にかけての特徴を示すものが多く、このころに井戸は廃絶したと考える。埋土中層以下には遺物がほとんど含まれず、暗青灰色粘土層など、水成堆積の粘土層が充満していた。現地表より約 5 m まで掘り下げたが、掘削限界に達したため底面の状況は不明である。

34 土坑は東半が攪乱によって壊されるが、直径約 1.5 m の円形の土坑である（図 11）。深さは 0.2 m を測る。大型の土師質土器甕（11）の破片が大量に出土することから、甕が据えられていたと考える。その他、中世にさかのぼる瓦（272・291）と瓦質土器が出土している。

55 土坑は 34 土坑の西約 3 m に位置する直径約 1.5 m の土坑である。34 土坑と規模・形態は共通し、やはり土師質土器甕が出土したことから、甕を据えた一連の土坑である可能性がある。

36 土坑は長さ約 2 m、幅約 1 m、深さ 0.25 m を測る隅丸方形の土坑である。瓦質土器甕（13）が出土している。

57 井戸は桶を井戸枠に埋設する（図 11）。桶は直径約 1.2 m で、残存高が約 0.5 m を測る。幅 0.1 m、厚さ 0.02 m の側板を、箍と木釘によって結合する。底板は 7 枚からなり、それぞれを木釘によって接ぎ合わせる。埋土からは、東播系鉢・瓦が出土した。現在の水路によって西半分が削平される。56 井戸は 57 井戸と規模や深さが共通することから、57 井戸に先行する遺構かもしれない（図 11）。両者の埋土には上層の旧耕作土が含まれていた。農業用水溜めの可能性がある。

58 畦畔は幅 1.2 m、高さ 0.3 m を測る。北東から南西に伸び、2 区で検出された 06 畦畔と直行する。同時期のものであろう。底部は基盤層を削り、上半は基盤層に起因する盛土によって形成されている。盛土内からは備前焼鉢（212）肥前磁器片・石臼などが発見された。

58 畦畔の下層に位置する遺構として、30 土坑・124 土坑がある。30 土坑は 31 井戸に切られる直径約 2 m、深さ約 0.5 m の不定形な土坑である。

調査区の北東部分には基盤層上面に薄い整地、あるいは床土の再堆積と考えられる層があり、この層の上面から 47～52 土坑・63 土坑が掘り込まれていることがわかった。02 年 I 3 区ではこの部分に連続する北側で土坑墓群が発見されており、関連がうかがえる。今回の調査では関連する中世の遺物や顕著な遺構の広がり確認することはできなかった。しかし、付近から和泉砂岩製の反花座（257）などが発見されており、整合性を示す。

旧耕作土層からは軟質施釉陶器・肥前磁器・瀬戸美濃焼鉢・瓦などが出土した。

4 区（図 9・図版 2） 4 区では旧耕作土層を掘削した後、基盤層を掘り込む畦畔・溝・井戸・ピット・土坑・落ち込みを検出した。

69 畦畔は南北方向に伸びる畦畔である。畦畔にともなって 81・82 溝が掘削されていることから、この溝に起因する土によって形成されている。盛土内からは肥前磁器・肥前陶器（42・94・179・182・184）・備前焼播鉢（210・215）・土師質土器焙烙（22・25）が出土した。

75 畦畔は南北方向に伸びる畦畔である。基盤層を利用して盛土をおこなっている。畦畔に沿って 60 溝が掘削されている。69 畦畔とは約 20 m の間隔であり、69 畦畔と 3 区の 58 畦畔は約 15 m の間隔である。両側で基盤面の高低差が認められることから西から東に下る地形に沿って築かれたと考える。

74 井戸は 69 畦畔の下層に位置する素掘りの井戸である。井戸上面の埋土には旧耕作土が混ざり、肥前磁器染付碗（33・63・74・89）・瓦質土器火鉢（14）が出土した。中層・下層は明青灰色の小礫混じり粘土層で埋められている。現地表から約 5 m 下まで掘削したが掘削限界に達したため底部を確認することができなかった。

80 井戸・86 井戸・112 井戸・113 井戸は 74 井戸と同様、上面が人為的に埋められ、中・下層は直径約 1 m で垂直に掘削され、水成堆積による埋土である。いずれも掘り底を確認することはできなかった。113 井戸上層からは硯（246）が発見された。

79 土坑は前回調査 I 2 区で北半が確認された不定形な土坑である。埋土は基盤層に含まれる円礫が目立ち、遺物は近世の陶磁器小片が見られたのみである。

107 土坑～111 土坑は 69 畦畔の下層で発見された小規模な穴で遺物は含まれていない。

112 土坑は調査区中央の北端で発見された土坑で、井戸の底かもしれない。肥前陶胎染付碗（170）・肥前陶器鉢（199）などが含まれていた。

旧耕作土層からは、肥前磁器・土錘・瓦などが出土した。

5 区（図 10・図版 3） 5 区の地表下は盛土が厚く、旧耕作土層はほとんど残存していなかった。他の調査区に比べ、遺構・遺物の残存も少ない。畦畔・溝・ピット・土坑を確認した。

87 畦畔・89 畦畔は、並行して北東から南西方向にはしる。2 区の 06 畦畔と軸が共通する。それぞれの畦畔は下半部が基盤層を削り出したもので、前回調査 H 4 区において検出された H 12・H 13 畦畔とも並行する。H 13 畦畔と 89 畦畔との距離は約 17 m を測る。

88 土坑は 87 畦畔・89 畦畔を切る形の方形土坑である。形態は両畦畔に規制されており、埋土は上面の旧耕作土を含む。掘方は長さ 7 m、幅 2.2 m、深さ約 0.9 m である。土師質土器羽釜（3）・肥前磁器広東碗（57）・軒平瓦（299）などが出土した。基盤層は緻密な黄褐色粘質シルト層で小礫などが含まれないことから近世以降の粘土取り穴と考える。

他の遺構はいずれも浅く、遺物も包含されていなかった。埋土が、旧耕作土層または床土であることから、旧耕作土層と同時期のものであろう。旧耕作土層からは江戸時代後期の肥前磁器碗・堺焼播鉢・瓦などが出土した。

6 区（図 10・図版 3） 5 区と同様に表土下に厚い盛土があり、旧耕作土層はほとんど残存していなかった。基盤層上面に溝と土坑を検出したが、遺構埋土からは顕著な遺物が発見されなかった。埋土には旧耕作土層が含まれることから、耕作化に伴う遺構と考えられる。旧耕作土層からは江戸時代後期の肥前磁器碗・皿が出土した。

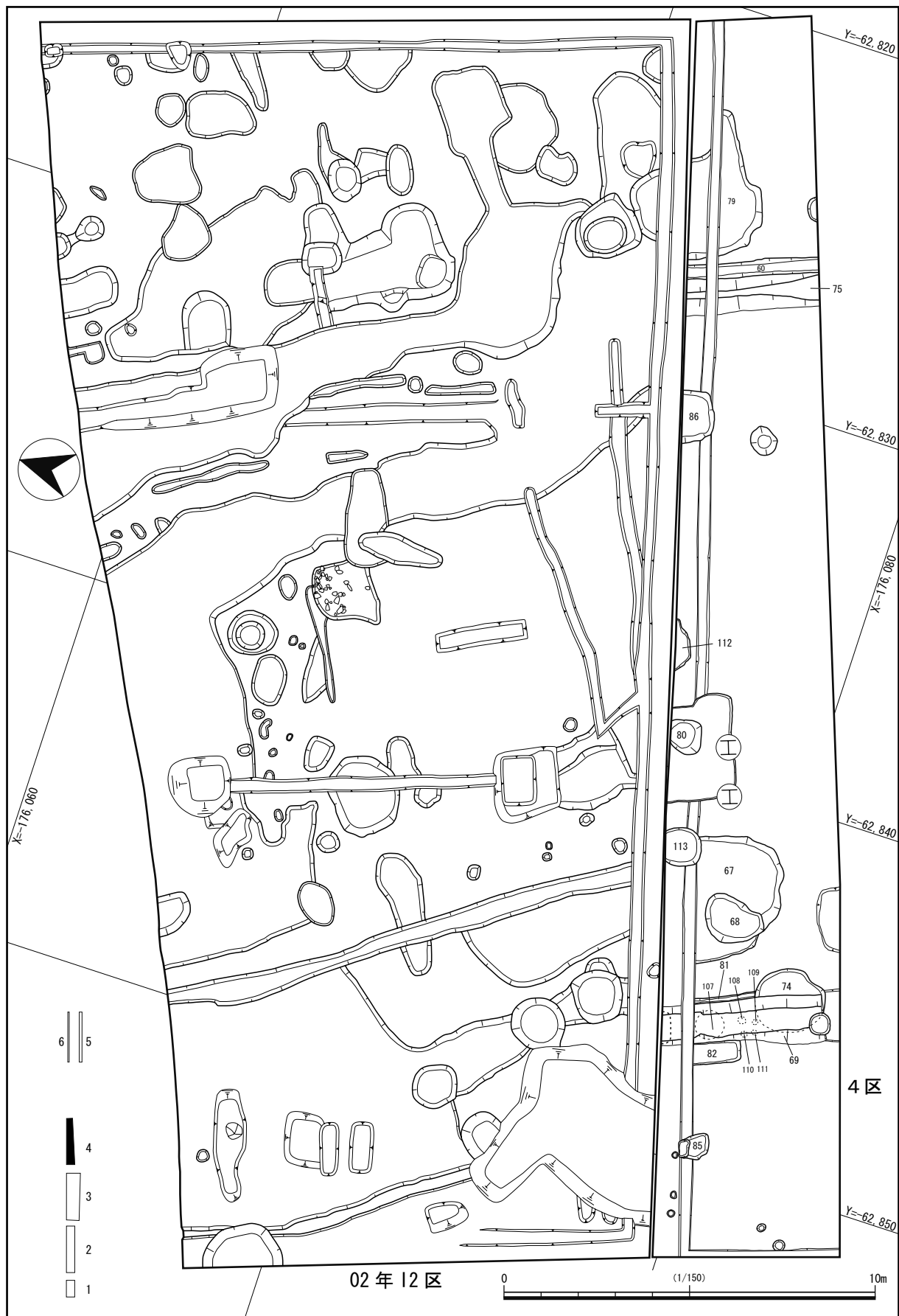


図9 4区遺構平面図

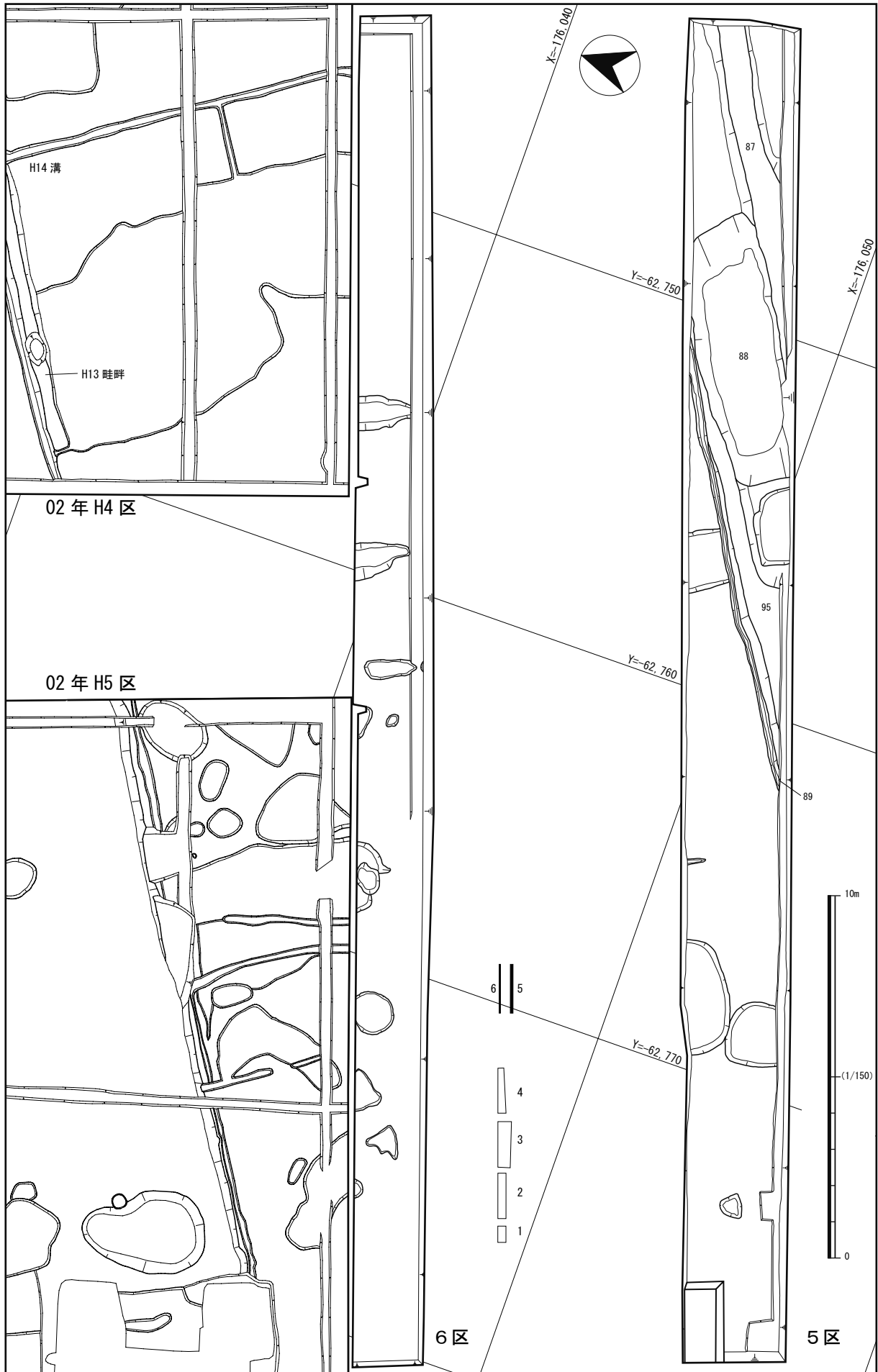
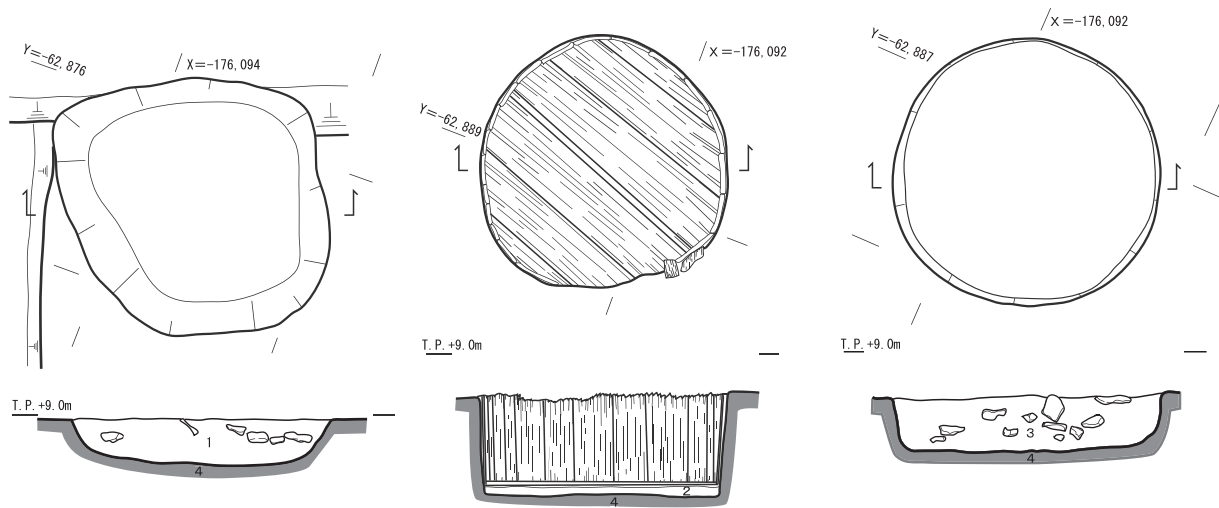


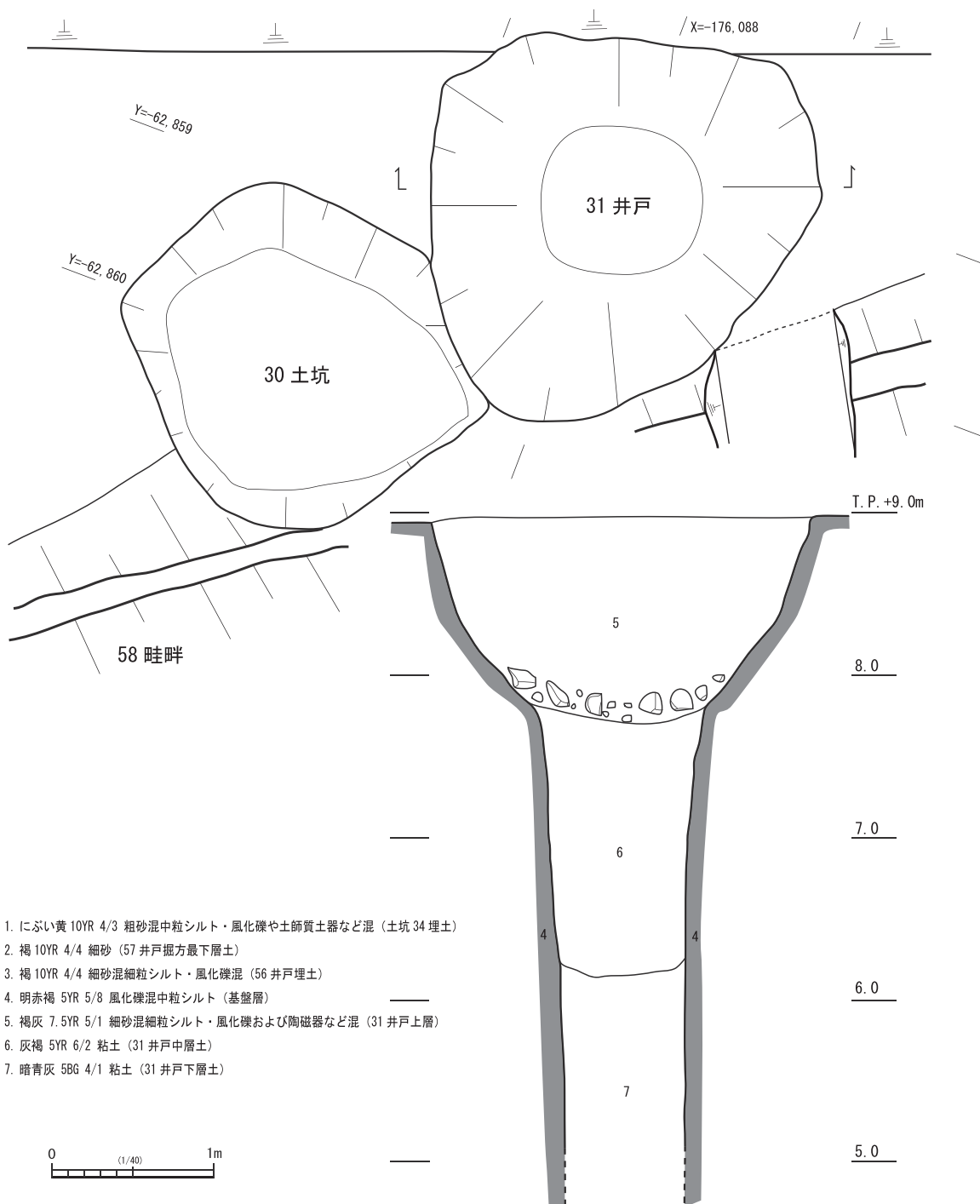
图 10 5·6区遺構平面图



34 土坑

57 井戸

56 井戸



1. にぶい黄 10YR 4/3 粗砂混中粒シルト・風化礫や土師質土器など混 (土坑 34 埋土)
2. 褐 10YR 4/4 細砂 (57 井戸掘方最下層土)
3. 褐 10YR 4/4 細砂混細粒シルト・風化礫混 (56 井戸埋土)
4. 明赤褐 5YR 5/8 風化礫混中粒シルト (基盤層)
5. 褐灰 7.5YR 5/1 細砂混細粒シルト・風化礫および陶磁器など混 (31 井戸上層)
6. 灰褐 5YR 6/2 粘土 (31 井戸中層土)
7. 暗青灰 5BG 4/1 粘土 (31 井戸下層土)

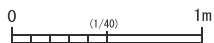


図 11 遺構平面・断面図

## b 遺物

今回の調査では土師質土器・瓦質土器・陶磁器・瓦・石製品など、中世から近世にかけての遺物が出土した。遺物は遺構に伴うものは少なく遺構の記述との重複を避けるため、種類ごとに報告する (a)。

**土師質土器・瓦質土器** 中世の遺物は大半が土師質土器・瓦質土器である。なかでも瓦質土器が多い。近世の遺物には瓦質土器がほとんどみられず、焙烙などの土師質土器が大半を占める。中・近世を通して土師皿がほとんどみつかっていないことは特徴のひとつである。また、近世になると軟質施釉陶器の灯明皿や鉢などが出現する (図版5-b)。

土師質土器は播鉢、羽釜、甕、焙烙、焜炉のほか、風炉、人形、漁具などがある。漁具は別項に報告する。播鉢は内面をハケで仕上げた後に播目を入れる。口縁部はヨコナデし、端部を粗雑に仕上げる。2次的に被熱している。16世紀後半のものだろう (9)。

羽釜は口縁部を直立させるもの (6)、やや内傾するもの (3) がある。口縁部が内傾する羽釜は口縁部をナデ仕上げの後に口縁部外面に二条の沈線をいれる。段が形骸化したものである (3)。口縁部が直立する羽釜は口縁部端部を平らにし、口縁部外面に三条の沈線をいれる。鏝の端部は上方を向く (6)。いずれも小片である。

甕は口縁部断面が台形、体部内面はハケメが残り、外面は平行タタキが施される。口縁部はナデで仕上げる。口径がわかる一点は 48.0 cm (10)、もう一点は 49.2 cm を測る (11)。17世紀代のものである。

焙烙は口縁部の形状と調整技法の特徴で三つに大別できる (図版6-a)。一つめは口縁部を内傾させる丸い体部で、口縁部外面にくびれをつくる。体部と底部の境界はナデ仕上げし、底部は未調整である (23)。二つめは口縁部を直立させ、体部と底部の境界は未調整のものである (22)。三つめは口縁部を直立させ、体部と底部の境界をへら削りするものである。へら削りは底部まで及ぶ。体部はナデ仕上げせず、ハケメが残る (24~27)。把手の残るものは一箇所貫通する孔をあける。(27)。三つめの焙烙は摂津や河内での出土量は少なく、和泉に多く出土する傾向にある。

焜炉は体部に煙り出しの穴があり、口縁部から体部にかけて吹きこぼれの痕が残る (16)。江戸後期にはこのような焜炉類が急激に増加する。

瓦質土器には鉢、羽釜、甕、火鉢がある。

鉢は器厚が薄く、口縁部外面付近に突帯を巡らせる。口径 16.8 cm を測る (1)。

羽釜は口縁部の形状と調整技法によって三つに大別できる。一つめは口縁部が内傾し、外面はナデ仕上げの後に二条の沈線をいれる (5)。形態と技法は土師質土器羽釜 (3) に共通する。二つめは口縁部が内傾し、口縁部端部は平坦である。口縁部内面はハケ仕上げ、口縁部外面はナデ仕上げする。口縁部外面に三条の沈線をいれ、鏝の上に小さな穿孔のあるものもある (4)。鏝の端部は上方につまむ (2)・(4)・(8)。三つめは口縁部を直立させ、鏝は真横にのびる。内面はハケ仕上げする (7)。

甕は口縁部端部を外側に折り曲げたものと (12)、口縁部がたち上がり、玉縁口縁が崩れたものがある (13)。体部外面は口縁部直下まで平行タタキ痕がある。内面はハケメが残り、口縁部はナデ仕上げする。口径 27.0 cm を測り、16世紀代まで降るものだろうか (13)。

火鉢は形態が著しく異なる。高台状の脚をもつ一点は、体部に型押しによる文様がみられる。体部の施文部分には型離れに使われた遊離材のキラ粉が付着する (17)。円筒形の体部をもつ火鉢は、高い脚



により上げ底になる。その脚はヘラで削って、透かし文様を施す。体部内面には煤が付着する(14)。方形の火鉢は底部を含め五枚の粘土板を貼り合わせて形成される(図版6-b)。口縁端部は使用による損傷が激しい。脚がなく、直接畳の上には置いて使用するのではないだろう(15)。中世後期に主流であった瓦質土器類は近世に入ると極少量しか出土しなくなる。しかし、19世紀には中世の瓦質土器に装飾が施されていたように、装飾が施された火鉢・焜炉類や羽釜などが復活する(14)・(17)。

軟質施釉陶器は皿、鉢、灯明皿、土鍋などがみつかった(図版6-a)。

皿にはぶい橙色の胎土で全面に釉薬をかける。素地に白化粧土は塗らない。焼成後に釉の上から直接墨描きで文様が描かれる。高台は貼り付けである(20)。

鉢は浅黄橙色の素地に明赤褐色の塗土をし、その上に釉薬をかける。高台は貼り付けである。破損箇所を朱漆で補修する(21)。

灯明皿は橙色の素地で、内面から外面の口縁部直下まで釉薬をかける。底部に右回転糸切り痕が残る。いずれもほぼ同じ形態で、口径8.0cm、器高1.5cm前後を測る。18世紀後半～19世紀代のものである(18・19)。

**磁器** 磁器は大半が肥前磁器で、その他少量の中国製、瀬戸美濃焼、京焼系などがある。中国製はいずれも小片で青磁・白磁・青花である。青磁は13世紀頃の龍泉窯系青磁碗などが四点発見されている。その時期の遺構があったとは考えにくく、伝世品だろう。青花は碗・皿がある。肥前磁器成立直前の中世末～近世初頭に製作され、もたらされたものだろう(図版5-a)。以下、産地の明記をしない磁器は肥前産を示す。

全体を通して肥前磁器は近世前期のものが概して少なく、中期～後期のものが主である。また、幕末からそれ以降のものも少ない。本遺跡の遺構の形成過程がうかがえる。器種は碗が多く、皿・鉢・壺・瓶などがある。

碗は肥前磁器が主で近世後期になると、瀬戸美濃焼や京焼系の端反碗が一定量含まれる。

小碗は小杯・猪口・酒盃などとよばれるものである。端反形のもの全て瀬戸美濃焼磁器で、それ以外のものは肥前磁器である。白磁小碗は薄く丁寧な作りである(28)。肥前磁器梅松葉文小碗もまた薄手で、文様も丁寧に描かれる。口径6.5cm、器高3.0cm、高台径3.0cmを測る(33)(図版8)。染付小碗はくらわんか手の碗を小型にしたもので、文様も粗雑である(34～36)。肥前磁器色絵小碗は、赤・黒・緑で文様を描くが、釉の剥落が激しい(37)。瀬戸美濃焼端反碗は、幕末から明治にかけてのものである(29～32)。そのうちのひとつは内面見込みに屋号のような文様が上絵の青で描かれる(29)。いわゆる染身体文と呼ばれる文様を描いた碗は、口縁部に銹釉が施される。文様を描くのに天然呉須ではなく、明治元年に日本にもたらされたとされるコバルトが使用されていることから、近代以降のものである(32)。

高台無釉の碗には青磁天目形碗、染付碗がある(41・42・48)。体部中央を折る形をした青磁天目形碗は、外面と内面の口縁部直下まで青磁釉をかけ、その下から見込みまでは透明釉をかけ分ける。高台は無釉で17世紀中頃のものである(41)。染付碗のうち一重網目文を描く碗は高台内の削りが粗く、いわゆる兜巾状になる(48)。また、同じ一重網目文を描く碗には、地に接する部分である高台畳付けのみ無釉の碗もある。口径9.8cm、器高7.9cm、高台径4.4cmを測る。(49)。

色絵碗は濁し手と呼ばれる乳白色の胎土に、赤・青・緑・黒の釉などで絵付けをすることを特徴とす

る柿右衛門様式の碗である。経年により色が剥げ落ちている。細く華奢な高台をもち、17世紀後半のものである(38・39)。

文様を描かない白磁碗は器壁が薄く、高台はU字状に丁寧に仕上げる。高台径4.0cmを測り、17世紀後半のものである(40)。

高台内に中国の焼き物に使われた銘と同じものが描かれる碗がある。「宣明年製」銘をもつ碗の底部はやや厚いが高台径は広く、17世紀後半のものである(43)。「大明年製」銘の碗は高台径が広く、高台の高さは低い。体部にはスタンプを押す要領で描かれたコンニャク印判を用いて鳳凰文を描く。17世紀末～18世紀初頭のものである(45)。

梅樹文碗は同形・同様の碗が数個体みついている(46)・(47)。見込みの二重圏線内に文様が、高台内にも二重方形が描かれる。高台径が大きく、17世紀後半のものである。

松樹文碗は梅樹文碗と同様に高台径が大きい(44)。しかし、高台内側の削りは丸く滑らかである。17世紀後半のものである。

青磁染付碗は腰が張る形態で、体部の器壁は厚い。見込みの二重圏線内に染付で菊花を描く。18世紀後半のものである(54)。

筒形の碗は体部外面に笹文(55)、瓔珞文(50)、垣文(51)などを描く。笹文碗は見込みの二重圏線内に手描き五弁花文を描く。口径8.8cm、器高6.0cm、高台径4.4cmを測る(55)。18世紀後半のものである。

高台径が小さく、体部が斜めに開口した形のいわゆる小広東碗は見込みに吉祥文様が描かれる(53)・(56)。七宝繫ぎ文碗は口径10.0cm、器高5.1cm、高台径3.1cmを測る(56)。これに後出する形態の広東碗は柳文を描き、18世紀末から19世紀初頭のものである(57)。

いわゆる半球碗は繪拒文が描かれる。高台径3.4cmを測り、18世紀代のものである(52)。

くらわんか手と呼ばれる粗製の碗は出土数をもっとも多い(58～85・89)。ただし、この一群は18世紀～19世紀代までと製作年代幅がひろい。施文の大半は梅枝文、雪輪草花文、折松葉文である。そのうち古手のものは高台径が小さく、高台内に圏線や簡略化された「大明年製」の銘を描くものが多い。これらの碗に後出する碗は内面の見込み部分に蛇の目釉剥ぎをするものが多くなり、概して器壁が厚く、扁平である。

口縁端部が外側に屈曲する端反碗も数多くみついている(86・88・90～93)。端反碗が流行する19世紀には磁器の瀬戸美濃焼(86)や京焼系磁器も普遍化する。概して、文様は粗雑に描かれ、見込みに形骸化した文様を描くものが目立つ。

蓋付碗は18世紀後半以降に流行するが、発見された蓋の大半は端反碗に伴うもので、19世紀代に降る(149・150・152～154)。端反碗蓋は端反碗と同様、瀬戸美濃焼が含まれる(153・154)。端反碗以外の碗蓋には丁寧に文様を描くものがみられる(148・151・155)。松鶴文を描く碗蓋は内側に松竹梅文、つまみ内には「大明年製」銘を描く(155)。18世紀後半のものである。また、蓋付碗の流行と併行し、文様や施文方法などに清朝磁器の影響がみられるようになる。例えば、吉祥文様である蝙蝠文(152・154)や桃文(152)、氷烈文(149)、線描きの文様(150)などは清朝磁器に多く用いられる。

段重などの蓋物の蓋は大小発見されている(145～147)。帯状のつまみが付く蓋はコンニャク印判で紅葉を文様にする(145)。小型の蓋は高台状に削りだしたかえりをもち、急須などの蓋になる可能性がある。上面には染付が施される(144)。

皿も大半は肥前磁器（94～102・104～110・119～124）で、少量の瀬戸美濃焼（103）が混じる。大皿・中皿・小皿があり、大半は直径12cm前後の中皿である。

口径に対して高台径が小さく、初期伊万里の典型とされる皿は高台内に日の字を描くもの（94）や、内面の見込み部分に簡略化された梅枝文を描くものがある（119）。梅枝文皿は高台畳付に多量のハナレ砂が付着し、口径13.2cm、器高2.6cm、高台径5.0cmを測る。

呉須を霧状に吹き付ける吹き墨の技法もまた、初期伊万里の特徴として広く知られるが、今回みつかった吹き墨鹿文端反皿は器形などから、17世紀中頃に降るものだろう（95）。口径12.0cm、器高2.8cm、高台径6.0cmを測る。

17世紀後半から出現する技法である墨弾き技法で施文された皿もある（101・120）。墨弾き技法とは、墨の上から呉須を塗ると、墨の部分の呉須が弾かれ白抜きの文様になることを利用した技法である。捻文を描いた皿は外面に圏線がめぐり、厚手の皿である（120）。

この捻文皿と同様に外面に圏線がめぐる皿は見込みに手描き五弁花文、高台内に一重圏線を描く（96）。17世紀末～18世紀初頭のものである。

高台内に窯道具の円錐ピン痕を残す皿がある（98・100）。宝唐草文皿の高台内には一重圏線内に二重角渦福が描かれ、円錐ピン痕が四箇所残る（98）。高台を丁寧に三角形に削った皿は高台内に一重圏線を描く。胎土は清練され呉須の発色もよい上手の皿である（100）。17世紀後半のものである。

芙蓉手皿はもともと中世末より中国で大量に作られた様式の皿である。肥前でも輸出用に中国製芙蓉手皿を模倣するようになる。芙蓉手文は17世紀後半の輸出全盛期に多く使われたが、近世後期まで使用される文様である。芙蓉手輪花皿はやや深めの皿で、丁寧に文様が描かれる（97）。それに対し、硬直した文様を描く芙蓉手皿もある（99）。

蛇の目凹型高台は高台内中央を円形に彫り窪めた中のみ釉薬をかけ、その周囲を無釉にした高台である（109・122・123）。この蛇の目凹型高台をもつ皿は蛸唐草文（123）・雪輪笹文（109）などを描く。文様がない白磁もある（122）。蛸唐草文の皿は高台が低く、見込みに松竹梅文、高台内に二重角渦福が描かれる。大きさ、文様などが共通する皿が数個体分みつまっている（123）。白磁皿は菊花形で、19世紀前半に多く出土する（122）。

皿にもくらかわんか手と呼ばれる一群がある（105～110・121）。いずれも簡略化された文様を描き、大半のものにコンニャク印判による五弁花文がみられる。見込み部分に蛇の目釉剥ぎを施す皿もある（108・121）。瓔珞文を描いた皿はやや小振りの皿で、口径10.5cm、器高2.1cm、高台径5.8cmを測る（105）。

山水文輪花皿は江戸後期に大量に作られた粗製の皿の一つである（104）。口径11.4cm、器高3.5cm、高台径6.4cmを測る。

手塩皿と呼ばれる小型の皿は見込みに笹文を描く。口径8.5cm、器高1.8cm、高台径4.4cmを測る（102）。

高い高台をもつ大皿は内面に秋草文、外面に唐草文を描く。口径20.4cm、器高5.2cm、高台径11.0cmを測る（124）。

宝文八角皿は見込みに蕉葉と巻物、体部に雪輪文を描き、呉須の色は暗い。焼継ぎの痕がみられ、形態・文様から19世紀代のものである。口径14.7cm、器高3.1cm、高台径7.2cmを測る（300）。

瀬戸美濃焼の皿は少ない。白磁寿文皿は内面見込みに型打ちの寿文を施す（103）。幕末頃のものである。口径9.7cm、器高2.0cm、高台径5.1cmを測る。

鉢はいずれも肥前磁器で、大きさ・形態・文様ともに様々である。

柳文鉢はそば猪口と呼ばれ、低い高台をもち、高台径 5.0 cm を測る (131)。白磁鉢 (130) は柳文鉢と同じ器形の小型品である。口径 4.9 cm、器高 3.4 cm、高台径 3.0 cm を測る。

白磁鉢の一つに二重口縁のものがある。体部はそば猪口形で直線的に開き、口縁部を一回り外側に湾曲して開く。口径 9.8 cm、器高 5.6 cm、高台径 4.2 cm を測る。17 世紀後半～18 世紀初頭のものである (132)。

華唐草文鉢は腰の張った碗形で体部外面は華唐草文、立ち上がり部は高台を華芯に見立てた連弁文を施す。見込みには簡略化した松竹梅文が描かれ、18 世紀後半のものである。口径 11.8 cm、器高 5.9 cm、高台径 4.0 cm を測る (133)。この鉢には漆継ぎの痕がある。今回の調査では近世後期の陶磁器に焼継ぎ・漆継ぎ痕が同量程度みついている。

松竹梅文端反鉢は外面に松竹梅文、見込みに手描き五弁花文、高台内に二重角渦福を丁寧に描く。口径 11.8 cm、器高 6.4 cm、高台径 4.6 cm を測る (134) (図版 8)。

宝文端反鉢は内面体部に格子文、見込みに宝(蕉葉)文を描く。蛇の目凹型高台をもち、チャツを置いた痕がみられる。焼継ぎ痕が残り、口径 14.0 cm、器高 6.1 cm、高台径 7.2 cm を測る (135)。

唐草文輪花鉢は外面に宝唐草文、内面に鳳凰と唐草文を描く。高台内に「富貴長春」銘がある。蛇の目凹型高台で、漆継ぎ痕が残る。口径 15.7 cm、器高 7.0 cm、高台径 10.0 cm を測る (136) (図版 8)。

青磁染付鉢は大型で口縁部内面に華唐草文を描き、外面は青磁釉をかけ、無文である。18 世紀後半のものである (137)。

食膳具以外の貯蔵具や調度具などの大半もまた肥前磁器である。

白磁紅皿は型打ち成形で、器壁を薄く作るもの (125) と厚く作るもの (126～129) がある。厚手にくらべ薄手の紅皿は古い傾向にある。口径 4.5 cm、器高 1.5 cm 前後を測る。

肥前磁器瓶には大小あり、大型の青磁 (118) と小型の染付 (111～114・116) がある。青磁瓶はくびれ部に凹線がめぐり、左右に形骸化した耳を貼り付ける (118)。鶴首をもつもの (111)、体部下半が張り出したもの (112) は唐草文様が描かれる。

肥前磁器の小型壺には油壺 (115・117) と蓋付壺 (142) がある。蓋付壺は白磁で頸部が短く、端部は直に立ち上がる。口径 4.4 cm、器高 7.8 cm、高台径 4.2 cm を測る (142)。

肥前磁器仏飯具は底部のみ無釉で、浅く削りだす (140・141)。仏飯具の文様はコンニャク印判で鶴の丸文を描くものがある (138)。明治期に降るものもみついている。

肥前磁器香炉には青磁と染付がある。青磁香炉は底部脇に形骸化した脚部を三箇所貼り付ける。筒形で口縁部を内に折り返す形のものである (139)。染付香炉は広口の扁平で体部に楼閣山水文を描き、玉縁状の口縁がつく (143)。

**陶器** 陶器は食膳具に肥前陶器が多く、その他、瀬戸美濃焼、京焼、京焼系、備前焼、丹波焼、信楽焼、堺焼、萩焼、丹波焼、常滑焼など全国各地の産地の焼き物がみついている。出土遺物の大半は磁器と同様に近世の遺物である。中世のものには常滑焼や備前焼などがある。

食膳具は肥前磁器が普及する前後の近世前期の肥前陶器が目立つ。そして、近世後期のものは京焼系陶器をはじめとした様々な産地・器種がみられ、多様化する関西の様相をよく示している。

碗は肥前陶器が大半を占め、他に瀬戸美濃焼、萩焼、京焼系陶器などがある。

肥前陶器碗の内で古い様相を示す、高台を粗く削りだした碗には灰釉碗 (156～158)・鉛釉をかけた碗がある (159・163)。高台内の削りが深く、体部外面のヘラ削りも丁寧な、新しい様相を示す碗もあ

る (159)。いずれも 17 世紀前半のものである。

肥前陶器呉器手碗は陶器碗中もっとも多く出土した (160～162)。ほかの同時期の碗の高台が無釉であるのに対し、高台畳付を除き、前面に透明釉をかけているのが特徴である。全形がわかるものは口径 9.3 cm、器高 6.9 cm、高台径 3.8 cm を測る (162)。17 世紀後半のものである。

呉器手碗について銅緑釉をかけた碗が多くみつまっている。高台無釉で、外面に銅緑釉、内面に透明釉と釉薬をかけ分ける (165)・(166)。内野山北窯などに類例が知られ、同じ形態で透明釉を全面にかけた碗もある (164)。そのうちのひとつには体部外面の露胎部に墨書がある (166)。墨書は消費地で記号として記されたと考えるが意味は明瞭でない。「三上や」・「三上四」・「三連つに」・「三部也」などの読み下し案がある (b)。

肥前陶器碗には外面に文様を描くものがある。文様の描き方も様々で、筆の動きを利用して文様を描く刷毛目文、京焼を意識した京焼風陶器、陶器質の素地に磁器の装飾方法である染付を施した陶胎染付などがみられる。刷毛目文碗はにぶい赤褐色の素地に白泥釉で刷毛目文を施す (169)。呉須で建物などを描いた京焼風碗は、腰部を膨らませる珍しい形をする (167)。高台部の残る京焼風碗は高台内の削りは浅く、篆書体の刻印を押す (168)。陶胎染付碗は呉須で文様を描き、高台畳付は無釉である (170)。いずれも 17 世紀後半から 18 世紀初頭のものである。

萩焼の碗はピラ掛け碗 (171) と藁灰釉碗がある (172)。ピラ掛けとは、黒釉と長石釉をささらで振りかける技法をいう。ピラ掛け碗 (171) は内面に藁灰釉をかけ、外面にピラ掛けを施す。高台は、渦巻状にわざと粘土を削り残した渦巻高台をもつ。

瀬戸美濃焼天目碗は二点みつかった。削り出した高台の碗は下地釉薬としての鬼板をかけずに鉄釉のみをかける。体部は丸みを帯び、内面にはロクロ目が強く残る。形態よりこの碗は瀬戸美濃焼の中での中世から近世へ、大窯から登り窯への移行期にあたる。16 世紀末～17 世紀初頭のものである (174)。もう一点は胎土が磁器質で、こちらも鉄釉をかけるのみである。口縁部はやや内傾する (173)。

陶器皿は碗と同様に肥前陶器が大半を占め (179～184)、瀬戸美濃焼 (185・186) などが少量含まれる。

肥前陶器皿には窯で焼成する際の窯詰め方法によって胎土目積みのもの・砂目積みのものにわけることができる。胎土目積み皿は高台を丁寧に削りだし、灰釉をかける (179・180)。ひとつは見込みに四箇所胎土目の痕が残る (179)。砂目積み皿はいずれも内面と外面の口縁部から立ち上がり部にかけて灰釉がかかり、高台は粗く削りだす (181～184)。溝縁皿は見込みに四箇所の目跡があり、口縁部には砂目積みの際についた他製品の口縁部片が付着する (183)。また、砂目積み皿には鉄絵をもつものがあり、鉄釉で圏線を描く。磁器の模倣と考える。見込み・高台内に三箇所の砂目痕が残る (184)。胎土目積み皿は 17 世紀初頭、砂目積み皿は 17 世紀前半～中頃のものである。

瀬戸美濃焼の皿は折縁皿 (185) と太白手皿 (186) がある。折縁皿は体部内面を縦方向に削り、菊花状に仕上げる。見込みの釉を丸く剥ぎ、高台内と見込みに窯道具である輪ドチをおいた痕が残る。口径 10.9 cm、器高 2.5 cm、高台径 5.4 cm を測る (185) (図版 8)。太白手とは陶器質の胎土に呉須で文様を描く、陶胎染付のことである。太白手染付皿は高台内の中央を浅く一段削る。口縁端部が打ちかかれたように欠損しており、欠損部に煤が付着することから、灰落としに転用されていた可能性がある。口径 13.8 cm、器高 3.8 cm、高台径 6.5 cm を測り、19 世紀代のものである (186)。

平碗には京焼 (167)、京焼系 (168・169)、肥前京焼風陶器 (166) がみつまっている。京焼系・肥前京焼風陶器は京焼の模倣品である。京焼の平碗は見込みに細い筆使いで鉄絵が描かれる。17 世紀末～

18世紀初頭のものである(167)。二点の京焼系平碗は色絵碗である。葉を描いたものは緑・茶・黒色(168)、梅を描いたものは緑・青色を使って太い筆使いである(169)。肥前京焼風陶器の平碗は見込みに錆絵で山水文を描く。高台内には「柴」の刻印が押され、17世紀末～18世紀初頭のものである(166)。同じ刻印の碗は泉佐野市教育委員会による若宮遺跡97-1区の調査でも発見されている。

鉢も肥前産陶器が大半を占める。肥前陶器鉢には灰釉・青磁釉・染付・刷毛目・三島手などのものがある。灰釉の鉢は体部外面の下半に粗いへら削り痕を明瞭に残す。片口をもつ可能性があり、17世紀前半のものである(190)。陶胎染付の鉢は陶器質の胎土に呉須で文様を描く(189)。陶胎染付同様、本来は磁胎にかける釉薬である青磁釉をかけた鉢もある。高台のみ無釉である(188)。刷毛目文端反鉢は焼成時の重ね積みのために、見込みを環状に剥ぐ蛇の目釉剥ぎを行い、高台畳付けにアルミナをぬっている。高台は高く、無釉である。18世紀代のものである(192)(図版8)。三島手とは、線彫りや印を押した中に白泥を塗りこめる象嵌の技法のことである。三島手鉢は大型がある(191・199)。見込みには砂胎土目の痕が八箇所残る。口径33.0cm、器高12.9cm、高台径11.4cmを測る(199)。17世紀末～18世紀前半のものである。

京焼系陶胎染付鉢は外面下半部をへら削りで仕上げる。外面上半部から内面にかけて白化粧をし、その上に呉須で文様を描き、透明釉をかける(196)。

刷毛目文銅緑釉鉢は白泥釉で刷毛目文を施した上に銅緑釉をかける。内面に鉄釉を薄くぬり、口縁部は内外に折り曲げる。食膳具としての鉢ではなく、水鉢などに使用したのだろう。17世紀後半～18世紀初頭のものである(187)。

片口をもつ鉢は肥前陶器・瀬戸美濃焼・京焼系のものがある。いずれも片口部は欠損する。肥前陶器刷毛目文片口鉢は内面と外面上半部は刷毛目文、外面下半部には薄く鉄釉を塗る(207)。京焼系陶器灰釉片口鉢は口縁部を内外に折り曲げる(193・194)。瀬戸美濃焼灰釉片口鉢は口縁端部を内側に折り曲げる(195)。内面から体部中程まで灰釉をかけ、底部は無釉で、見込みには目痕が残る。内面と外面の体部中程まで灰釉をかけ、外面はへら削りを施す(197・198)。

堺焼鉢は多数みつまっている(221・223・224)。体部は直立気味に開き、内外面共にロクロ目が強く残る。堺焼播鉢と焼きや胎土は共通するが、見込みに重ね焼きの痕跡を示す焼台の痕はない。口径19.6～22.6cm、器高7.5～8.9cm、底径13.8～16.8cmを測る。鉢の形態だが、仕上げは粗く釉薬もないことから、食膳具ではないだろう。

土鍋・土瓶などの調理具は京焼系陶器が多数みつまっている。

京焼錆絵土瓶は体部が球形で、外面には錆絵で栗樹らしい琳派風の文様が描かれる。18世紀前半～中頃のものである。把手を固定する環状の突起は残るものの、木製、あるいは金属製の把手は失われている。溜め口のつく形態だろう(209)。

土瓶蓋は外面に鉄釉をかけ、つまみが菊花形のもの(200)、白濁釉の上に緑釉を流すもの(201)、灰釉のもの(204)、トビカンナとよばれる、ロクロ回転による遠心力でカンナが跳ね上げられる時につく痕を利用して文様を施し、黄釉をかけたもの(205)などがある。18世紀末～19世紀代のものである。

土鍋類の蓋にも様々な装飾がみられる。灰釉(208)のもの、トビカンナをかけ、イッチンと呼ばれる、盛り上がった釉薬で文様や文字を描くもの(202)、トビカンナをかけて鉄釉・白泥釉・緑釉などで文様を描くもの(203・206)などがある。

播鉢は備前焼・丹波焼・堺焼・肥前陶器がみつまっている。堺焼播鉢の流通経路にあるにもかかわらず

ず、近世を通して備前や肥前産の播鉢が一定量発見される特徴は堺環濠都市遺跡と共通する。

備前焼播鉢は中世後期～近世後期の幅広い年代のものがみつまっている。もっとも古い様相を示す播鉢は内面全体に黄ゴマとよばれる灰被りがみられる。九本単位の播目を粗に施す。15世紀後半のものである(214)(図版8)。逆に、新しい様相を示す播鉢は体部が薄く、口縁端部を外側に折り返す。18世紀後半のものである(213)。

堺焼播鉢はもっとも多くみつかった(217～220・222)。口縁部外縁帯の顎が下がるもの(217・218)と、口縁部内側の段がゆるく、口縁部の断面形が方形になるものがある(220)。前者が18世紀代、後者が19世紀に入るものである。

丹波焼播鉢は江戸時代前～中期のものがみつまっている(225・227～233)。播目はすべて櫛搔きで施される。播目をへらで一本引きする古い様相を示す播鉢はない。

肥前陶器播鉢は体部が薄く、口縁部に鉄釉をかける。播目は櫛搔きで、17世紀後半のものである(226)。極少量出土した。

肥前陶器灰釉火入れは浅く削った底部をもつ。全面に灰釉をかけ、高台畳付のみ釉を剥ぐ。17世紀前半～中頃のものである(238)。

瓶・壺・甕類の大半は焼締陶器である。丹波焼が主で、備前焼・大谷焼・信楽焼・堺焼などがみられた。

堺焼壺は小型で器壁が厚く、外面は鉄釉をかけ、内面は無釉である。厚い玉縁状の口縁で、形態からお歯黒壺と推測できる(234)。このような播鉢以外の堺焼製品が多く出土することは生産地に近い土地柄をあらわす。

丹波焼徳利は外面に塗り土をして焼いたもの(235)、塗り土の上に筒描きで屋号や数字を記し、内面に鉄釉をかけるもの(237)、鉄釉をかけたもの(236)がある。筒描きと鉄釉の徳利は近世後期以降に流通が普遍化する通い徳利だろう(235・237)。

信楽焼壺は精緻な胎土で高台の外側際を丁寧にへら削りする。見込みには目痕が残る(239)。円筒形の壺は内外面共に釉薬をかけず、自然な風合いを生かした壺である。肩部はへら削りし、その上方に凹線がめぐる。大粒の長石が胎土に多く含まれ、信楽焼の特徴を示す。内面には粘土紐の痕跡が明瞭に残る(240)。

大谷焼の甕は頸部を直立気味にし、口縁部を外側に折る。内外面共に鉄釉をかける。19世紀代のものである(241)。

甕には土師質土器・信楽焼・大谷焼・丹波焼・備前焼・常滑焼のものがある。多くは丹波焼である(242～244)。体部外面に塗り土をして鉄釉を流しかけ、内面には鉄釉を施した甕もある。体部内面に粘土帯の接合痕を確認できる(242)。また、塗り土を内外面に施した甕は肩部外面に規則的な横ナデで凹凸をつけて装飾とする(244)。

**石製品** 石製品には硯・火打石・砥石・石臼・墓碑の一部である空輪と反花座がある。硯・火打石・砥石は近世のもの、石臼は中世末から近世にかけてのもの、墓碑は中世後期に製作されたものと考えられる。

硯は三点発見されている。一つは凝灰岩製で陸と縁が残る小型品である(245)。二つ目は全体の4分の1程度が残存する粘板岩製で(246)、刻銘などはないが、滋賀県高島市安雲川町の「高島石」と推測する。陸と海の境の一部が残る(247)。特徴的な茶縞模様の凝灰岩製で、愛媛県伊予市で産出する石の可能性が高い。

火打石は小片で一点みつけた。打ち欠いて形状を整え、辺縁を鋭くする。辺縁には無数の擦痕がある(248)。自然面はなく小片であることから、廃棄されたものであろう。緑青色のチャートで徳島県阿南市大田井で産出する石材と推測する。

砥石は二点発見されている。一つは両小口面に自然面を残す中研ぎ用である(249)。二面は平滑でそのうち一面のみ明瞭な使用痕が残る。材質は砂岩である。もう一つは、凝灰岩製で裏面に自然面を残す(250)。側面・小口面・表面に使用痕が残る。仕上げ砥であろう。

石臼は和泉砂岩製の下臼で四点発見されている。目は8分画に復元することができ(251・252)、主溝と副溝の間にも目が施されるものがある(252)。一点(253)は中心に芯棒孔が貫通し、8分画4溝に復元できる。他の一点(254)は他の臼に比べえぐりが深く、ふくみも大きい。二本の主溝が認められるが、区画幅が一定でないことから分画数は不明である。石臼はいずれも人為的に半裁されており、建物の礎石などに転用され廃棄された可能性がある。

和泉砂岩製の墓碑の一部が三点発見されている。五輪塔、あるいは宝篋印塔の宝珠である(255)。下部を欠損し、人為的に打ち割られている。頂部端はやや尖り気味で、下半は丸みを帯び、正面に梵字が刻まれる。五輪塔の空輪は、表面は粗く仕上げられ、頂端部を欠損する(256)。四方に梵字が刻まれている。

反花座は一辺約28cm、高さ約10cmを測る。側面と四隅に蓮弁が肉厚彫りされる(257)。前回調査や泉佐野市教育委員会の調査でも五輪塔と宝篋印塔の一部が出土しており関連がうかがえる。付近に中世ごろの墓域か寺院があった可能性が高い。

**漁具** 漁具には管状土錘と蛸壺がある。管状土錘は長さ3～4cm、幅約1cmの小型品と(258～266)、幅3cm以上の大型品がある。大型品には、自然釉がかかった陶質(267)と土師質(268)がある。いずれの土錘も焼き締りがよく窯で焼成したと考える。小型品の胎土にはほとんど砂礫を含まず、大型品は1mm大の石英、長石を多く含む。

蛸壺は素焼きの円筒形である。体部の破片は外面がナデ、口縁部付近に横ナデによって縄をかける段がつけられる。内面は布目と布シワを残す(269)。底部の破片は二点発見されている。外面はナデで内面は布シワが放射状に残り、中央が窪む(270・271)。円柱状の内型に布袋を被せ、成形された痕跡と考える。いずれも土師質で胎土に1mm以下のチャート、石英、長石が多量に含まれる。これまでの調査でも管状土錘や蛸壺は散在的に発見されており、近世のものとする。

**瓦** 瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦などがある。瓦は各調査区からみつきり、大半は旧耕作土層に散在していた。コンテナに五箱以上を確認している。

軒丸瓦は瓦当部と丸瓦部の厚さ、巴文の巻き方向と連珠の数や粒の大きさ・間隔の狭広・連珠文と巴文の間を画する圏線の有無、筈から取り外す際に使われるハナレ砂やキラ粉の有無などにより、五大別することができる。

I類からIV類は巴文で、V類は蓮華や桔梗などの植物文と思われる。I・II類は丸瓦部の断面が厚い。I類の丸瓦部はコビキA痕、II類の丸瓦部はコビキB痕がみられる。III類からV類は丸瓦部の断面が薄い。III類は瓦当にハナレ砂痕が残る、瓦当文様の珠文が小さく数が多い。ハナレ砂と珠文の特徴はI類・II類が共通する。IV類は瓦当にキラ粉の痕跡が残る、珠文が大きく数が少ない。V類はIV類と同様にキラ



粉による型離れの技法で、巴文以外の文様である。

I類は二点発見されている。瓦当部の厚みが最も大きいものは2.7cmを測り(272)(図版8)、丸瓦部の厚みは2.5cmでⅢ類からV類に比べ1cmほど厚い(279)。全形がわかるものはないが、他の類より大型品と考える。丸瓦部凸面をヘラナデし、凹面にコビキA痕が残る(279)。I類の瓦は前回調査H3区のH2溝より出土した軒丸瓦と酷似する。H2溝からは14世紀後半～15世紀前半の遺物のみ発見されている。その中に「檀波羅蜜寺」銘が刻印された平瓦も出土しており、中世にさかのぼる瓦と考える。これに対応する厚手の丸瓦・平瓦も見つかっており、他の類と峻別できる。

Ⅱ類は一点のみである。厚みはI類と同じだが製作技法にコビキB痕が明瞭に残る。全形は不明だが、やや小型の瓦である。Ⅱ～V類にみられるコビキB痕は近世初頭以降の瓦に多くみられる粘土塊の裁断痕跡で、I類に後続する型式と考える。また、大半がコビキB痕が残る丸瓦である(280)(図版8)。

Ⅲ類は七点ある。瓦当部の厚みが0.7～1.5cm・丸瓦部の厚みが1.5～1.8cmとI類・Ⅱ類よりも薄い。丸瓦部は凸面がヘラナデで仕上げられ、凹面はコビキB痕が明瞭に残るものもある(276・281)。珠文の直径は0.7cmから0.9cmとI・Ⅱ類と同じく小振りで、珠文の間隔は1.0～1.7cmと広い。また、圏線が施されているものもある(277)。焼きがあまりものも目立つ(281)。

Ⅲ類もI類同様ハナレ砂を有する(273～278・281)。

Ⅳ類は六点ある。瓦当部・丸瓦部の厚さは第Ⅲ類と大差はない。丸瓦部は凸面がヘラナデ仕上げで、凹面にコビキB痕と布目が見られるものもある(287・288)。珠文は直径が1.0～1.4cmと大きく扁平で、珠文の間隔が0.2～0.6cmと狭い特徴がある。焼成は概して良く黒紫色で、2次焼成を受け赤褐色のものもある(287)。

V類は一点のみで瓦当文様の全形は不明である。瓦当文様は家紋に見られる下り藤文の可能性もあるが、一点のみの出土で家紋瓦の可能性は低い(285)。近隣のこれまでの調査でも発見されていない。

丸瓦は凸面をヘラナデで仕上げ、凹面はコビキAと吊り紐痕を残すものと(291)、凸面は共通するもののコビキB痕を残すものがある(292・293)。内面に棒状の工具でタタキ締め痕跡が明瞭なものもみられる(293)。凹面の面取りはヘラ状工具で粗く施される。長辺のわかる丸瓦は21.7cmで、小型である(292)。

軒平瓦は六点である。瓦当文様は橘唐草文と(296・299)、唐草文がある(294・295・297・298)。瓦当と平瓦の接合面にカキ目を入れるものもある(294・296・298・299)。顎のとりつきは顎凸面の幅が狭く、顎凸面と顎裏面は屈曲し、顎裏面と平瓦面は鈍角になる。顎裏面はヨコナデで仕上げる(294～299)。瓦当にはハナレ砂(294)・キラ粉(295・296・299)が残るものがある。いずれも平瓦部の断面が薄手で近世のものとする。ハナレ砂の痕跡が残る軒平瓦は軒丸瓦Ⅱ・Ⅲ類に対応し、キラ粉の痕跡が残る軒平瓦はⅣ・V類に対応すると考える。

軒棧瓦の平瓦当文様は橘唐草文である。瓦当部との接合面にカキ目がみられ、瓦当面の上縁には面取りが行われる。瓦当部にはキラ粉が残る(286)。軒棧瓦の丸瓦当部の破片は珠文を持たない巴文である(290)。小型瓦で近世後期以降の民家に伴うものだろう。

道具瓦は全形のわかるものがなく、短冊形のもの、段をなすものなど、メンド瓦と思われる瓦片、複数の釘穴を穿孔する瓦などがある。いずれも薄手で近世のものとする。

**その他の遺物** 今回の調査区からは土器類、石製品、瓦磚類のほか、木器・漆器・金属器と貝殻など

の自然遺物がみられた。木器は板状の小型品で、井戸の中・下層などから発見された。加工痕は明瞭だが、用途・時期は特定できない。焼けた痕跡があるものもある。

漆器は漆碗、あるいは小皿などの食膳具と考える。やはり井戸の上層から発見されている。木質部は失われ、漆膜のみ残存した。黒漆・赤漆、赤の上に黒を重ね塗りしたものもある。唐草文などの文様の一部もあった。

金属器は鉄製で小型の棒状、釘やかすがいなどの破片と考えるが、時期などは特定できない。

自然遺物には巻貝・二枚貝がある(c)。いずれも旧耕作土層中に散在的に発見され、風化が著しい。出土した貝類はアカニシとイタボガキからなり、他にウチムラサキの可能性のある破片が一点含まれる。いずれも鹹水性で、大坂城城下町遺跡や堺環濠都市遺跡など、府内の近世遺跡から一般的に出土する食用種である。アカニシには身を取り出す際の、刃物によるとみられる抉りや孔が観察されることから、自然死したものではなく、食物残滓であると推定される。イタボガキは右殻ばかりで、1区と2区で二点ずつ、3区で一点発見された。アカニシは2区で二点、3区で二点発見された。そのうちの二点は殻口部に調理痕とみられる深い抉りがあり、2区から発見された他の一点は調理痕とみられる殻口部の浅い抉りと、体層部に孔が認められた。1区からみつかったウチムラサキの可能性を示す一点は小片で、標本参照は行っていない。

- (a) 本文の番号は遺物実測図版の遺物番号に対応する。遺物実測図版は手測量の実測図を Adobe Systems Incorporated の画像処理ソフトである Adobe Illustrator C S 2 で浄書し、Adobe Photoshop C S 2 で加工した遺物画像を合成したものである。以上は本文とともに Adobe Indesign C S 2 で編集・レイアウトした。OS は Windows XP である。挿図と遺物実測図版は西川・奈良・渡辺・佐藤・諸伏彩菜恵（調査補助員）・溝田紀子（調査補助員）による。
- (b) 墨書土器は堺古文書研究会の方々にご意見をいただいた。
- (c) 貝類の同定は池田研（大阪府文化財センター）による。

## 参考文献

- 石部正志・八木 透監修 2006『新修 泉佐野市史』第9・10巻 考古編・民俗編 泉佐野市史編さん委員会  
 出田和久監修 1999『新修 泉佐野市史』第13巻 絵図地図編 泉佐野市史編さん委員会  
 市原 実・市川浩一郎・山田直利 1986『岸和田地域の地質』地質調査所  
 大橋康二 1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー 55 ニューサイエンス社  
 垣内光次郎 1994「江州高嶋硯の生産」『江戸遺跡研究会第7回大会 江戸の生産遺跡』  
 北野隆亮 2000「畿内とその周辺地域における火打石の流通—和歌山県平野及び奈良盆地出土資料の分析から—」  
 『和歌山地方史研究』三八号  
 柴田 実編纂 1958『泉佐野市史』泉佐野市役所  
 富田博之 2001『若宮・上町東遺跡』泉佐野市教育委員会  
 中村淳磯 2003『湊遺跡他』(財)大阪府文化財センター調査報告第87集 財団法人大阪府文化財センター  
 檜崎彰一ほか監修 1993『瀬戸市史 陶磁器篇 四』瀬戸市史編纂委員会  
 乗岡 実 2005「備前」『中世窯業の諸相 生産技術の展開と編年』資料集  
 三輪茂雄 1978「臼」『ものと人間の文化史』25 法政大学  
 村上富喜子・後藤信義・佐伯博光 2004『湊遺跡他II』(財)大阪府文化財センター調査報告第111集 財団法人大阪府文化財センター  
 森田克行 1986「屋瓦」『撰津高槻城本丸跡調査報告書』高槻市教育委員会

表1 若宮遺跡調査一覧

調査年次	調査主体	主な遺構	主な遺物	参考文献
87-1区	泉佐野市教育委員会	近世(溝・土坑・井戸)	近世(陶磁器・徳利・土鍾・瓦)	『若宮遺跡発掘調査報告書 -87-1区の調査-』1987 泉佐野市教育委員会
89-1区	泉佐野市教育委員会	中世(土坑・溝) 近世(土坑・井戸)	中世(土師器・瓦器) 近世(陶磁器・土人形・石製品・木桶・瓦)	『若宮遺跡II -89-1区の調査-』1990 泉佐野市教育委員会
89-2・4・6区	泉佐野市教育委員会	近世(土坑・溝・井戸)	近世(陶磁器・土師質土器・土鍾・石製品・瓦)	『若宮遺跡 89-2区の調査 89-4区の調査 89-6区の調査』1990 泉佐野市教育委員会
90-10区	泉佐野市教育委員会	なし	近世(陶磁器・土鍾)	『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成2年度』1991 泉佐野市教育委員会
90-9区	泉佐野市教育委員会	なし	近世(陶磁器・土鍾など)	『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成2年度』1991 泉佐野市教育委員会
91-2区	泉佐野市教育委員会	石列	近世(陶磁器・木櫃・瓦)	『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成3年度』1992 泉佐野市教育委員会
91-11区	泉佐野市教育委員会	なし	近世(陶磁器)	『若宮遺跡 -91-11区の調査-』1992 泉佐野市教育委員会
94-1区	泉佐野市教育委員会	なし	近世(陶磁器)	『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成6年度』1995 泉佐野市教育委員会
95-1区	泉佐野市教育委員会	中世(土坑墓・溝・井戸・池跡) 近世(溝)	中世(土師器・瓦質土器) 近世(陶磁器・土師質土器・蜻壺・土鍾・瓦)	『若宮・上町東遺跡』2001 泉佐野市教育委員会
96-1区	泉佐野市教育委員会	近世(溝・井戸)	近世(陶磁器・土師質土器・曲物)	『若宮・上町東遺跡』2001 泉佐野市教育委員会
96-3区	泉佐野市教育委員会	中世(土坑・溝・井戸) 近世(溝)	中世(土師器・瓦質土器・中国磁器) 近世(磁器)	『若宮・上町東遺跡』2001 泉佐野市教育委員会
96-4区	泉佐野市教育委員会	中世(掘立柱建物・土坑墓・溝・池跡) 近世(土坑・井戸)	中世(土師器・瓦器・瓦質土器) 近世(陶磁器・土管・蜻壺・土鍾)	『若宮遺跡 -96-4区の調査-』1997 泉佐野市教育委員会
97-1区	泉佐野市教育委員会	中世(溝) 近世(土坑・溝・井戸) 近代(溝・桶)	中世(瓦質土器・石製品・瓦) 近世(陶磁器・瓦) 近代(壺)	『若宮・上町東遺跡』2001 泉佐野市教育委員会
97-2区	泉佐野市教育委員会	中世(溝)	なし	『若宮・上町東遺跡』2001 泉佐野市教育委員会
98-1区	泉佐野市教育委員会	近代(土坑)	なし	『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成10年度』1999 泉佐野市教育委員会
98-2区	泉佐野市教育委員会	中世(溝) 近世(溝)	中世(瓦器・瓦質土器・瓦) 近世(瓦質土器・陶磁器・蜻壺・土鍾・緑泥片岩・瓦)	『若宮・上町東遺跡』2001 泉佐野市教育委員会
98-3区	泉佐野市教育委員会	なし	近世(陶磁器・土鍾・瓦)	『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成10年度』1999 泉佐野市教育委員会
00-1区	泉佐野市教育委員会	なし	近世(陶磁器)	『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成12年度』2001 泉佐野市教育委員会
01-1区	泉佐野市教育委員会	近世(土坑)	近世(炮烙・焼壺壺)	『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成13年度』2002 泉佐野市教育委員会
02-1区	泉佐野市教育委員会	土坑	なし	『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成14年度』2003 泉佐野市教育委員会
2002	(財)大阪府文化財センター	中世(井戸) 近代(池跡・貯蔵穴)	中世(瓦質土器・陶磁器・瓦)	『泉佐野市湊・旭町・大宮町所在 湊遺跡他II(財)大阪府文化財センター調査報告書 第87集 2003 財団法人 大阪府文化財センター』
2003	(財)大阪府文化財センター	中世(土坑墓・区画溝・井戸)	中世(土師器・瓦質土器・石製品・瓦) 近世(陶磁器・土師質土器)	『泉佐野市湊・旭町・大宮町・若宮町・大西町所在 湊遺跡他II(財)大阪府文化財センター調査報告書 第111集 2004 財団法人 大阪府文化財センター』

## 第4章 まとめ

今回の調査では中世後期～近世にいたる遺構・遺物が発見された。これまでの泉佐野市教育委員会・大阪府文化財センターによる近接地の調査を追認する成果となった。以下に時期ごとに成果を列挙する。

中世の遺構は後期～末にかけてのもので、溝と土坑がある。溝はこれまでの調査で確認されている区画溝群と軸や規模などが共通しており、屋敷地を区画する溝であると推定できる。土坑は整地土層下、畦畔などの遺構下面に散在するものであるが、大半は遺物を伴わず、判然としない。遺物は土師質土器・瓦質土器があり、大半は瓦質土器羽釜である。

遺跡は中世後期以後、近世を通じて連綿と生活の痕跡が確認できる。遺構の切り合いなどは明瞭でないものの各時期の陶磁器が出土した。したがって、中世後期以降連綿と生活が続けられた集落遺跡であることがわかる。

その一方、中世後期以前の生活痕は確認できず、土地利用は判然としない。以上は、現在の町村の原形が中世後期にさかのぼるといふ泉州・河内地域の一般的様相に符合する。

遺構の大半は肥前磁器が伴う時期である。泉州地域では17世紀後半に肥前磁器が普遍化する。周辺の調査と合わせ、町屋の発展はこの時期以降と考える。

中世末の遺構は限定することはできないが、1500年代後半～1600年代頃まで流通していた中国製青花、唐津焼碗・皿、瀬戸・美濃焼碗・皿、備前焼播鉢・丹波焼播鉢などが各調査区で確認されている。

近世の消長は最も多く発見された肥前磁器・肥前陶器の出土量で示すことができるだろう。すなわち、1600年代の江戸時代前期は少なく、中期から後期に頂点を迎え、幕末から近代にかけて少なくなる。また、いわゆるくらわんか手と呼ばれる雑器が主流で、高価な茶器や饗膳具はなく、花瓶・香炉・鉢植え・化粧道具など、陶磁器に普遍化される趣味の調度も少ない。あわせて、江戸後期の陶磁器に焼継ぎや漆継ぎの補修品が数多く発見された。以上より、居住者の階層がうかがえる。

幕末以降の生活痕跡が少なくなることに対応し、この頃より調査地周辺が水田化されていたことを確認できた。水田は明治30年代以降に南海本線の線路や駅舎が敷設され、現在に至る新たな土地利用がわかっている。これは遺構・遺物に生活痕跡がなくなることとも符合する。江戸後期以降の水田化の実態は明瞭でないものの、この頃の絵図が現存しており、調査区周辺が水田だったことが記されている。

その他、中世にさかのぼる青磁・石製品・瓦がみつまっている。青磁は中世前期までさかのぼり、伝世したものだろう。石製品は五輪塔などの破片があり、近世になって転用されたと考える。中世の瓦とあわせ、付近の寺院からもたらされたと推定されている。以前の調査では「檀波羅密寺」銘の瓦が数多く発見されている。また、この寺が応仁の乱によって焼失したという記事を参考にすれば、瓦・石製品の転用はそれ以降と考えられ、集落の移動も檀波羅密寺門前に発展した集落などが移動したものかもしれない。

さて、調査区の西南には若宮遺跡の由来となった若宮神社が紀州街道にむかって西向きに鎮座していた。現在の若宮町は神社廃絶後に付けられた名称である。調査地はちょうど神社跡地の後背にあたる。若宮は奈良市の春日大社から近隣の春日神社とともに分祀されたと伝える。明治になって若宮神社など付近の神社は春日神社に合祀され、廃絶する(図12)。

紀州街道を挟んで若宮神社跡の北西に位置する春日神社は信長の根来攻めの頃に消失したと伝える。

現在は近世以降の石塔や手水鉢などが数多く残されており、商人や網元など、町衆の寄進により繁栄していたことがわかる。これらの石製品は大半が淡紅色の長石が混じっている御影石（花崗岩）で、地元の和泉砂岩製のものほとんどない。大坂方面から船で運ばれてきたものと考えられる。

対応するように、江戸時代初期より佐野町屋は急速な発展をみせ、大坂の陣のころ（1615年）には350戸あまりだったものが、近世前期の正徳三（1713）年には1666戸、人口8597人という記録がある。泉州では堺について発展していたことを示す史料である。この実態は若宮遺跡の近世初頭から中期にかけての発展にも符合する。これまでの成果で近世の有力者の痕跡は遺構・遺物に確認できていないが、寄進された灯籠や手水鉢などから、有力者の台頭やにぎわいを垣間見ることができる。

かつては華美、贅沢を象徴的に示した春日神社の祭壇ともうでの町衆に対し、「あすは春日のけんち祭り、佐野の女衆の衣裳くらべ」という歌謡のみ伝わっている。



図12 春日神社と近世に寄進された石塔 a 寛文拾三歳（1663） b 元禄五曆（1692）  
c 宝永二歳（1705） d 正徳四年（1714） e 安永八年（1779）

表2 出土遺物对照表(1)

図番号	実測番号	地区	遺構・層	器種	残存率	図番号	実測番号	地区	遺構・層	器種	残存率
1	329	3	04	瓦質土器鉢	3	77	052	3	04	肥前磁器染付碗	3
2	327	2	旧耕作土層	瓦質土器羽釜	3	78	151	3	04	肥前磁器染付碗	3
3	339	5	88	土師質土器羽釜	3	79	036	3	31	肥前磁器染付碗	3
4	323	2	02	瓦質土器羽釜	3	80	028	2	旧耕作土層	肥前磁器染付碗	3
5	242	1	旧耕作土層	瓦質土器羽釜	3	81	096	3	31	肥前磁器染付碗	1
6	307	2	02	瓦質土器羽釜	3	82	053	4	113	肥前磁器染付碗	3
7	342	2	02	土師質土器羽釜	3	83	097	3	31	肥前磁器染付碗	2
8	338	2	02	瓦質土器羽釜	3	84	090	3	31	肥前磁器染付碗	2
9	341	2	02	土師質土器槽鉢	3	85	089	3	31	肥前磁器染付碗	2
10	349	3	36	土師質土器甕	3	86	187	1	機械掘削	瀬戸美濃焼磁器染付碗	3
11	328	3	34	土師質土器甕	3	87	023	2	旧耕作土層	肥前磁器染付碗	2
12	324	2	02	瓦質土器甕	3	88	157	3	04	肥前磁器染付端反碗	2
13	337	3	36	瓦質土器甕	3	89	045	4	74	肥前磁器染付碗	2
14	266	4	74	瓦質土器火鉢	3	90	027	2	旧耕作土層	肥前磁器染付碗	2
15	309	3	31	瓦質土器火鉢	1	91	185	1	機械掘削	肥前磁器染付碗	3
16	333	3	31	土師質土器焔炉	3	92	019	2	旧耕作土層	肥前磁器染付端反碗	2
17	248	2	旧耕作土層	瓦質土器火鉢	3	93	140	3	04	肥前磁器染付碗	3
18	072	3	31	軟質施釉陶器灯明皿	3	94	317	4	69	肥前磁器染付皿	3
19	073	3	31	軟質施釉陶器灯明皿	2	95	145	2	旧耕作土層	肥前磁器染付端反皿	3
20	292	3	04	軟質施釉陶器皿	3	96	134	3	04	肥前磁器染付皿	3
21	118	3	機械掘削	軟質施釉陶器鉢	2	97	110	3	30	肥前磁器染付皿	3
22	306	4	69	土師質土器焙烙	2	98	133	3	04	肥前磁器染付皿	3
23	332	3	31	土師質土器焙烙	3	99	135	3	04	肥前磁器染付皿	3
24	334	3	31	土師質土器焙烙	3	100	197	2	旧耕作土層	肥前磁器染付皿	3
25	305	4	69	土師質土器焙烙	3	101	139	3	04	肥前磁器染付皿	3
26	075	3	04	土師質土器焙烙	3	102	163	3	04	肥前磁器染付皿	3
27	265	4	旧耕作土層	土師質土器焙烙	3	103	199	2	旧耕作土層	瀬戸美濃焼白磁端反皿	3
28	105	3	31	肥前白磁小碗	3	104	195	2	旧耕作土層	肥前磁器染付皿	2
29	153	3	04	瀬戸美濃焼磁器上絵碗	3	105	050	2	旧耕作土層	肥前磁器染付皿	1
30	156	3	04	瀬戸美濃焼白磁碗	2	106	132	3	04	肥前磁器染付皿	2
31	150	3	04	瀬戸美濃焼磁器染付碗	3	107	196	2	機械掘削	肥前磁器染付皿	3
32	183	3	旧耕作土層	瀬戸美濃焼磁器染付端反碗	2	108	109	3	31	肥前磁器染付皿	2
33	046	4	74	肥前磁器染付小杯	2	109	312	3	攪乱	肥前磁器染付皿	3
34	022	3	機械掘削	肥前磁器染付小杯	2	110	232	2	機械掘削	肥前磁器染付皿	3
35	154	3	04	肥前磁器染付小碗	3	111	198	2	旧耕作土層	肥前磁器染付瓶	3
36	070	3	31	肥前磁器染付小碗	3	112	128	3	31	肥前磁器染付瓶	3
37	158	3	04	肥前磁器色絵碗	3	113	125	3	31	肥前磁器染付瓶	3
38	106	3	31	肥前磁器色絵碗	3	114	178	3	04	肥前磁器染付瓶	3
39	102	3	31	肥前磁器色絵碗	3	115	127	3	31	肥前磁器壺	3
40	103	3	31	肥前磁器白磁碗	3	116	122	3	機械掘削	肥前磁器染付瓶	3
41	010	2	機械掘削	肥前磁器青磁天目形碗	3	117	126	3	31	肥前磁器壺	3
42	319	4	69	肥前磁器染付碗	3	118	055	3	旧耕作土層	肥前磁器青磁双耳瓶	3
43	184	3	旧耕作土層	肥前磁器染付碗	3	119	180	3	04	肥前磁器染付皿	2
44	039	4	112	肥前磁器染付碗	3	120	035	4	旧耕作土層	肥前磁器染付皿	3
45	042	4	旧耕作土層	肥前磁器染付碗	3	121	113	3	機械掘削	肥前磁器染付端反皿	2
46	160	3	04	肥前磁器染付碗	3	122	231	2	旧耕作土層	肥前磁器白磁皿	3
47	012	1	旧耕作土層	肥前磁器染付碗	3	123	137	3	04	肥前磁器染付皿	2
48	108	3,4	31,旧耕作土層	肥前磁器染付碗	3	124	148	2	旧耕作土層	肥前磁器染付皿	3
49	094	3	31	肥前磁器染付碗	3	125	165	3	04	肥前磁器白磁紅皿	3
50	168	3	04	肥前磁器染付筒形碗	3	126	001	1	機械掘削	肥前磁器白磁紅皿	3
51	169	3	04	肥前磁器染付筒形碗	3	127	116	3	旧耕作土層	肥前磁器白磁紅皿	3
52	179	3	04	肥前磁器染付碗	3	128	164	3	04	肥前磁器白磁紅皿	2
53	171	3	04	肥前磁器染付小広東碗	3	129	191	2	旧耕作土層	肥前磁器白磁紅皿	2
54	093	3	31	肥前青磁染付碗	3	130	114	3	機械掘削	肥前磁器白磁鉢	2
55	147	2	旧耕作土層	肥前磁器筒形碗	3	131	009	3	旧耕作土層	肥前磁器染付鉢	3
56	017	2	旧耕作土層	肥前磁器染付小広東碗	3	132	313	3	旧耕作土層	肥前磁器白磁鉢	2
57	044	5	88	肥前磁器染付広東碗	3	133	100	3	31	肥前磁器染付鉢	3
58	029	3	機械掘削中	肥前磁器染付碗	3	134	104	3	31	肥前磁器染付端反鉢	2
59	018	2	旧耕作土層	肥前磁器染付碗	3	135	117	3	機械掘削	肥前磁器染付端反鉢	3
60	007	1	旧耕作土層	肥前磁器染付碗	3	136	340	3	31	肥前磁器染付輪花鉢	2
61	130	3	31	肥前磁器染付碗	3	137	142	2	旧耕作土層	肥前青磁染付鉢	3
62	043	4	旧耕作土層	肥前磁器染付碗	3	138	095	3	31	肥前磁器染付仏飯具	3
63	033	4	74	肥前磁器染付碗	2	139	006	2	旧耕作土層	肥前磁器青磁香炉	3
64	088	3	31	肥前磁器染付碗	2	140	174	3	04	肥前磁器染付仏飯具	2
65	092	3	31	肥前磁器染付碗	3	141	120	3	機械掘削	肥前磁器染付仏飯具	2
66	091	3	31	肥前磁器染付碗	3	142	173	3	04	肥前磁器白磁壺	3
67	032	2	旧耕作土層	肥前磁器染付碗	3	143	112	3	機械掘削	肥前磁器染付香炉	3
68	025	2	旧耕作土層	肥前磁器染付碗	3	144	011	1	旧耕作土層	肥前磁器染付蓋	1
69	161	3	04	肥前磁器染付碗	3	145	008	3	旧耕作土層	肥前磁器染付蓋物蓋	3
70	031	4	旧耕作土層	肥前磁器染付碗	3	146	107	3	31	肥前磁器染付蓋物蓋	3
71	030	4	旧耕作土層	肥前磁器染付碗	3	147	167	3	04	肥前磁器染付蓋物蓋	3
72	131	3	31	肥前磁器染付碗	3	148	054	3	04	肥前磁器染付碗蓋	3
73	016	2	05	肥前磁器染付碗	3	149	049	2	旧耕作土層	肥前磁器染付端反碗蓋	3
74	040	4	74	肥前磁器染付碗	3	150	170	3	04	肥前磁器染付端反碗蓋	3
75	162	3	04	肥前磁器染付碗	3	151	002	3	31	肥前磁器染付碗蓋	3
76	041	3	機械掘削	肥前磁器染付碗	3	152	047	2	機械掘削	肥前磁器端反碗蓋	3

表3 出土遺物対照表(2)

図番号	実測番号	地区	遺構・層	器種	残存率	図番号	実測番号	地区	遺構・層	器種	残存率
153	166	3	04	瀬戸美濃焼磁器染付端反碗蓋	3	229	263	3	04	丹波焼播鉢	3
154	048	2	旧耕作土層	瀬戸美濃焼磁器染付端反碗蓋	2	230	264	2	旧耕作土層	丹波焼播鉢	3
155	101	3	31	肥前磁器染付広東碗蓋	2	231	308	3	31	丹波焼播鉢	3
156	057	2	旧耕作土層	肥前陶器灰釉碗	3	232	080	3	31	丹波焼播鉢	3
157	015	3	攪乱	肥前陶器灰釉碗	3	233	255	2	旧耕作土層	丹波焼播鉢	3
158	320	4	旧耕作土層	肥前陶器灰釉碗	3	234	243	1	旧耕作土層	堺焼壺	3
159	014	3	58	肥前陶器鉛釉碗	3	235	348	3	31	丹波焼德利	3
160	060	3	31	肥前陶器呉器手碗	3	236	347	3	31	丹波焼德利	3
161	056	3	31	肥前陶器呉器手碗	3	237	245	2	旧耕作土層	丹波焼德利	3
162	058	3	31	肥前陶器呉器手碗	3	238	249	2	旧耕作土層	肥前陶器灰釉火入	3
163	253	4	68	肥前陶器鉛釉碗	2	239	298	3	旧耕作土層	信楽焼壺	3
164	062	3	31	肥前陶器灰釉碗	3	240	344	3	31	信楽焼壺	3
165	061	3	31	肥前陶器銅緑釉碗	2	241	240	3	04	大谷焼壺	3
166	258	3	31	肥前陶器銅緑釉碗	2	242	241	3	31	丹波焼壺	2
167	345	3	31	肥前陶器京焼風碗	3	243	346	3	31	丹波焼壺	3
168	311	3	31	肥前陶器京焼風碗	3	244	239	3	04	丹波焼壺	3
169	084	2	旧耕作土層	肥前陶器刷毛目文碗	3	245	364	3	04	硯	2
170	038	4	112	肥前陶胎染付碗	3	246	365	4	113	硯	3
171	123	3	旧耕作土層	萩焼ピラ掛け碗	3	247	363	3	04	硯	3
172	246	2	旧耕作土層	萩焼壺灰釉碗	3	248	358	3	旧耕作土層	火打石	1
173	247	2	旧耕作土層	瀬戸美濃焼天目碗	3	249	362	3	攪乱	砥石	1
174	303	2	29	瀬戸美濃焼天目碗	3	250	361	2	旧耕作土層	砥石	1
175	083	2	05	肥前陶器京焼風平碗	3	251	368	2	旧耕作土層	石臼	3
176	279	3	04	京焼錆絵平碗	3	252	367	3	31	石臼	3
177	082	2	旧耕作土層	京焼系色絵平碗	3	253	369	3	機械掘削	石臼	3
178	069	3	31	京焼系色絵平碗	3	254	370	4	機械掘削	石臼	3
179	318	4	69	肥前陶器灰釉皿	3	255	359	4	旧耕作土層	宝珠	3
180	013	4	旧耕作土層	肥前陶器灰釉皿	3	256	360	2	旧耕作土層	空輪	3
181	321	4	旧耕作土層	肥前陶器灰釉碗	2	257	366	3	31	反花座	1
182	322	4	69	肥前陶器灰釉皿	3	258	289	1	旧耕作土層	土鍾	1
183	278	3	04	肥前陶器灰釉溝縁皿	2	259	290	4	旧耕作土層	土鍾	1
184	269	4	69	肥前陶器鉄絵皿	2	260	288	1	旧耕作土層	土鍾	1
185	066	3	31	瀬戸焼折縁皿	2	261	280	2	旧耕作土層	土鍾	1
186	146	2	旧耕作土層	瀬戸美濃焼太白手皿	2	262	287	2	旧耕作土層	土鍾	1
187	236	3	04	肥前陶器刷毛目文鉢	3	263	285	2	旧耕作土層	土鍾	1
188	336	3	31	肥前陶器青磁釉鉢	3	264	281	2	旧耕作土層	土鍾	1
189	129	3	31	肥前陶器染付鉢	3	265	282	2	旧耕作土層	土鍾	1
190	270	3	機械掘削	肥前陶器灰釉鉢	3	266	283	2	旧耕作土層	土鍾	1
191	063	3	31	肥前陶器三鳥手鉢	3	267	238	3	31	陶器土鍾	3
192	098	3	31	肥前陶器碗刷毛目文鉢	2	268	286	3	旧耕作土層	土鍾	3
193	276	3	04	京焼系灰釉片口鉢	3	269	267	3	04	蛸壺	3
194	277	3	04	京焼系灰釉片口鉢	3	270	268	3	04	蛸壺	3
195	115	3	機械掘削	瀬戸美濃焼灰釉片口鉢	3	271	331	3	機械掘削	蛸壺	3
196	144	2	旧耕作土層	京焼系染付鉢	3	272	215	3	34	軒丸瓦	3
197	293	3	04	瀬戸美濃焼灰釉片口鉢	3	273	207	2	機械掘削	軒丸瓦	3
198	065	3	31	瀬戸美濃焼灰釉鉢	3	274	205	3	旧耕作土層	軒丸瓦	3
199	335	4	112	肥前陶器三鳥手鉢	3	275	202	3	04	軒丸瓦	3
200	274	3	04	京焼系鉄釉土瓶蓋	3	276	203	2	旧耕作土層	軒丸瓦	3
201	275	3	04	京焼系灰釉土瓶蓋	3	277	206	4	旧耕作土層	軒丸瓦	3
202	087	2	旧耕作土層	京焼系土瓶蓋	3	278	211	3	31	軒丸瓦	3
203	272	3	04	京焼系行平蓋	3	279	218	3	旧耕作土層	軒丸瓦	3
204	068	3	31	京焼系灰釉蓋	3	280	216	3	31	軒丸瓦	2
205	085	2	機械掘削	京焼系土瓶蓋	3	281	201	4	旧耕作土層	軒丸瓦	2
206	271	3	04	京焼系行平蓋	3	282	212	2	機械掘削	軒丸瓦	3
207	235	3	04	肥前陶器刷毛目文片口鉢	3	283	213	2	旧耕作土層	軒丸瓦	3
208	244	2	旧耕作土層	京焼系陶器灰釉土鍋蓋	2	284	209	3	04	軒丸瓦	3
209	314	3	31	京焼錆絵土瓶	3	285	217	3	04	軒丸瓦	3
210	259	4	69	備前焼播鉢	3	286	214	2	旧耕作土層	軒丸瓦	3
211	076	3	31	備前焼播鉢	3	287	204	3	31	軒丸瓦	2
212	034	3	58	備前焼播鉢	3	288	210	2	旧耕作土	軒丸瓦	2
213	078	3	31	備前焼播鉢	3	289	229	3	機械掘削	軒丸瓦	3
214	262	2	05	備前焼播鉢	3	290	228	1	旧耕作土層	軒丸瓦	3
215	300	4	69	備前焼播鉢	3	291	221	3	34	丸瓦	3
216	357	4	113	備前焼播鉢	3	292	220	2	旧耕作土層	丸瓦	2
217	260	3	04	堺焼播鉢	3	293	219	2	旧耕作土層	丸瓦	2
218	356	3	機械掘削	堺焼播鉢	3	294	222	3	31	軒平瓦	3
219	257	2	機械掘削	堺焼播鉢	3	295	224	2	旧耕作土層	軒平瓦	3
220	254	2	旧耕作土層	堺焼播鉢	3	296	225	3	機械掘削	軒平瓦	3
221	252	2	旧耕作土層	堺焼鉢	3	297	223	2	旧耕作土層	軒平瓦	3
222	261	3	04	堺焼播鉢	3	298	226	3	31	軒平瓦	3
223	124	3	機械掘削	堺焼鉢	3	299	227	5	88	軒平瓦	3
224	251	2	旧耕作土層	堺焼鉢	3	300	119	3	機械掘削	肥前磁器染付八角皿	2
225	256	2	旧耕作土層	丹波焼播鉢	3						
226	079	3	31	肥前陶器播鉢	3						
227	081	3	31	丹波焼播鉢	3						
228	077	3	31	丹波焼播鉢	3						

<残存率>  
1-完形・ほぼ完形 2-1/2以上残存 3-1/2以下

# 遺物実測図版



肥前磁器宝文八角皿 300





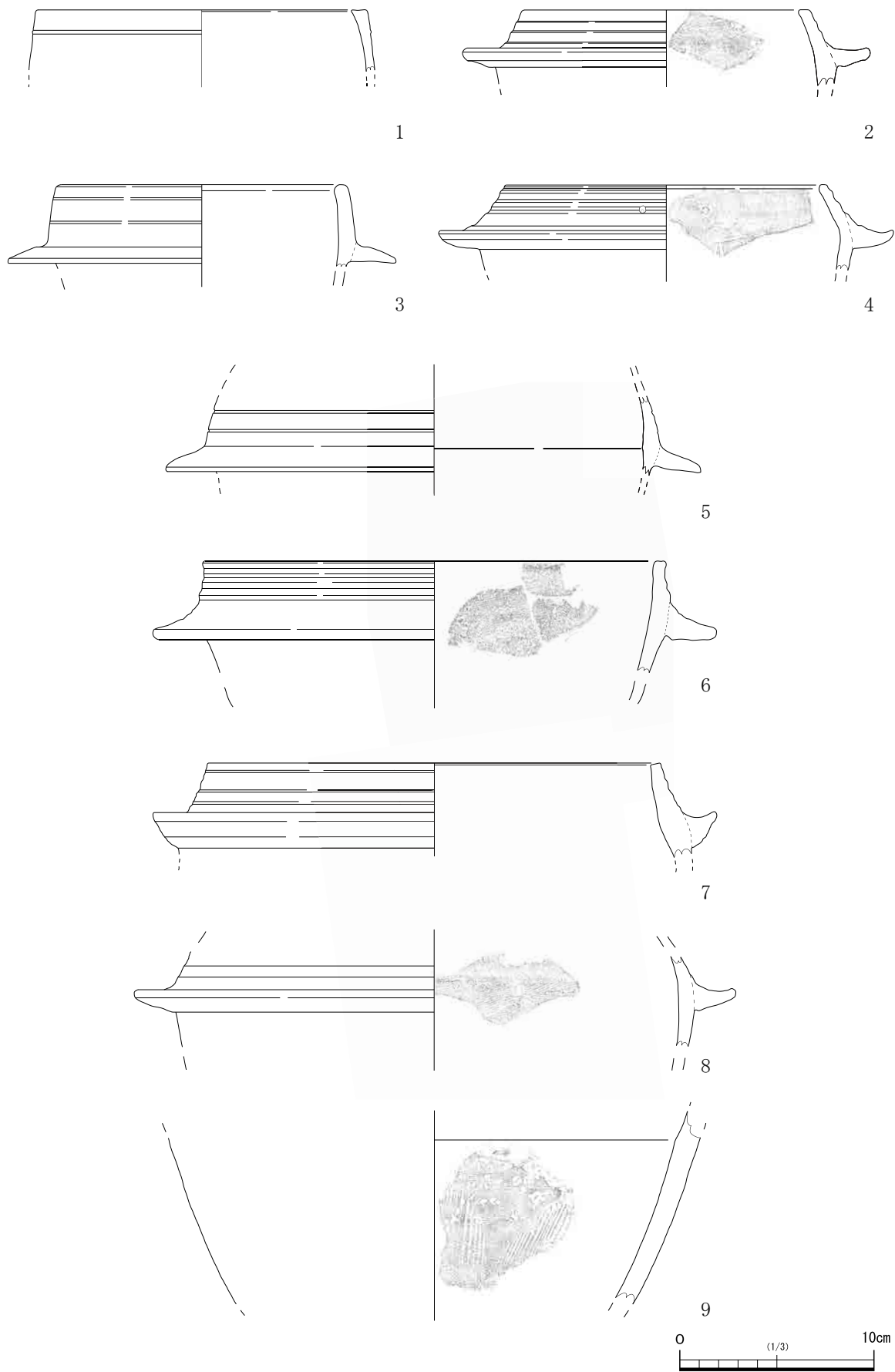


图1 土師質土器・瓦質土器 (1)

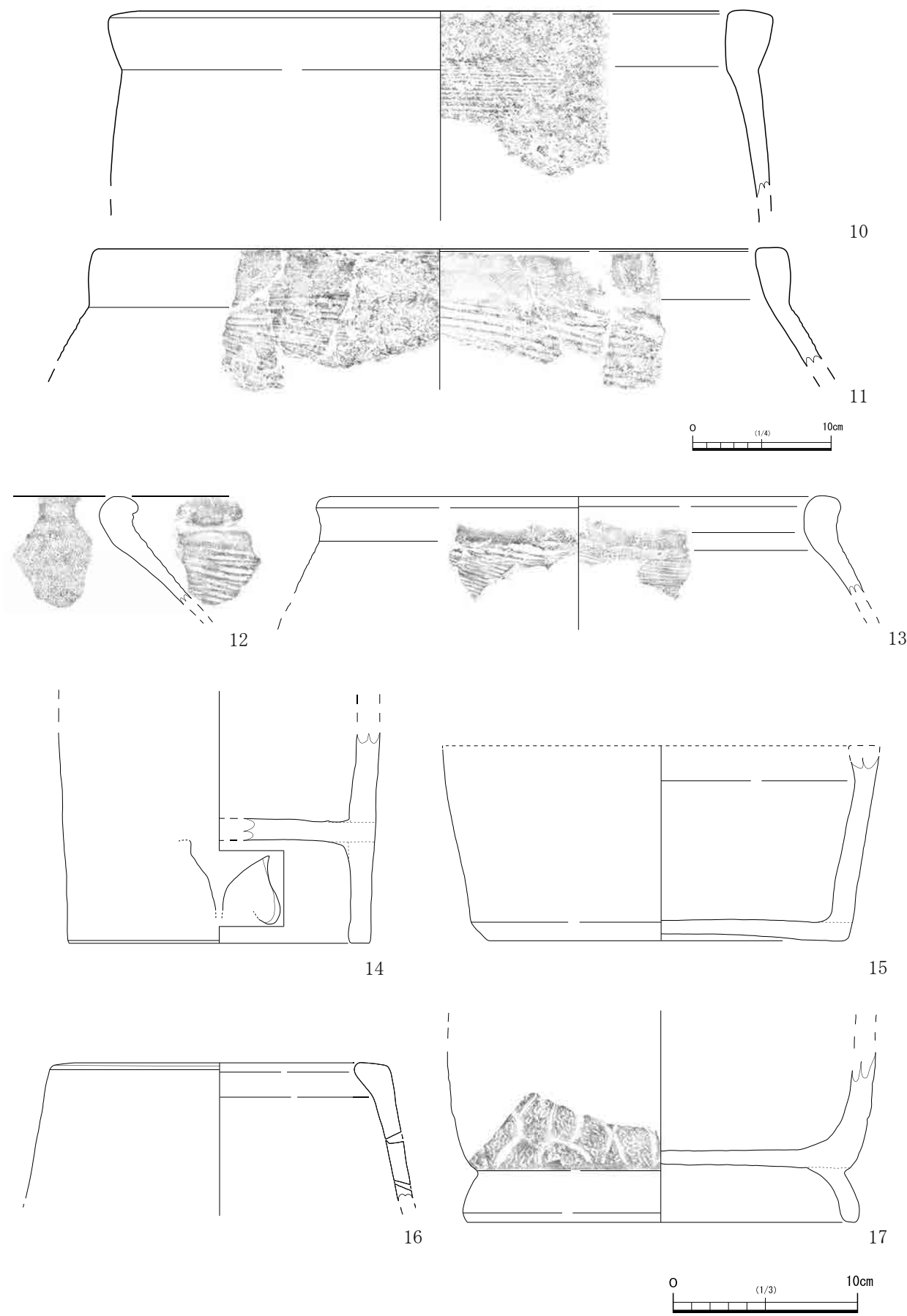


图2 土師質土器・瓦質土器 (2)

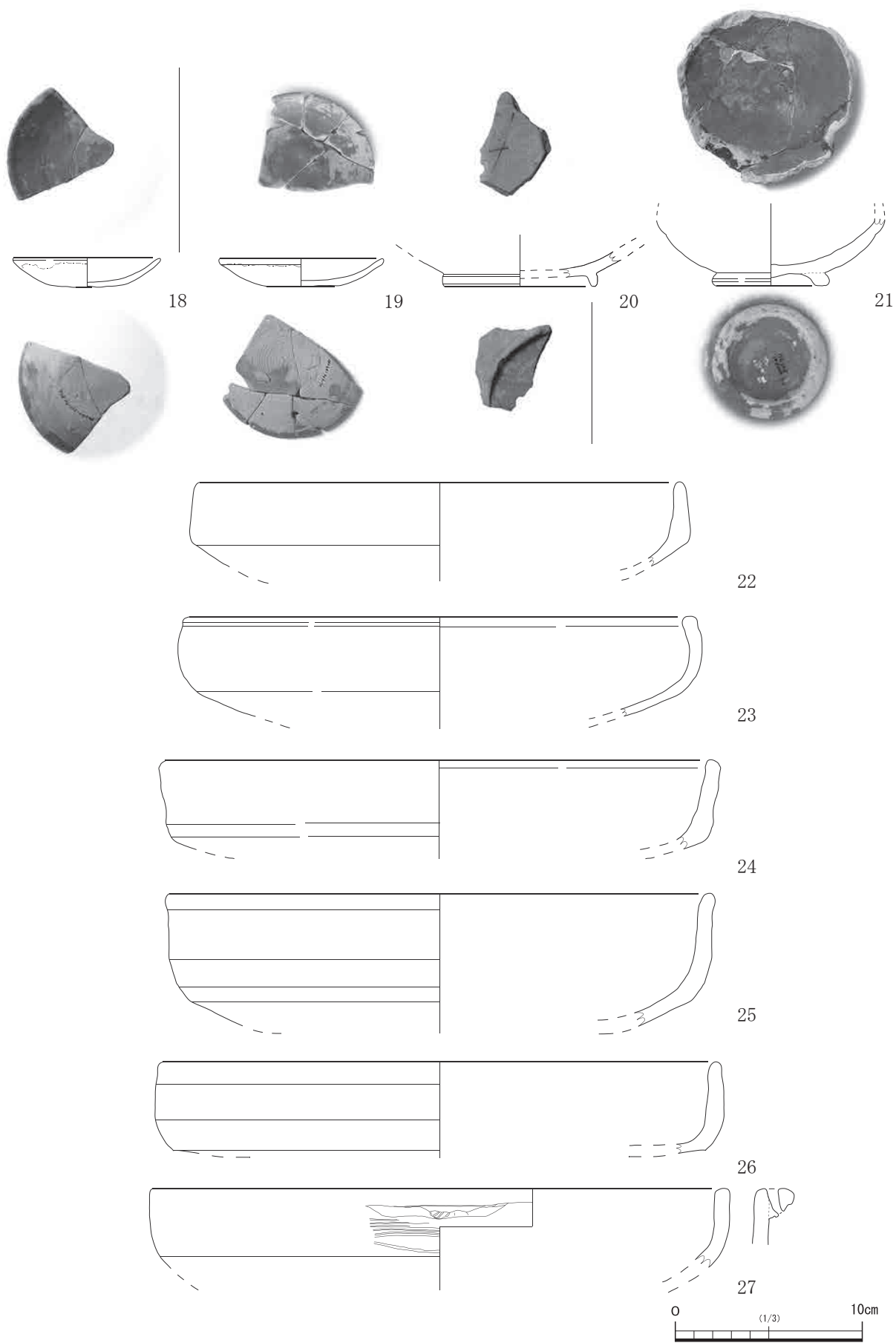


図3 土師質土器 (3)・軟質施釉陶器

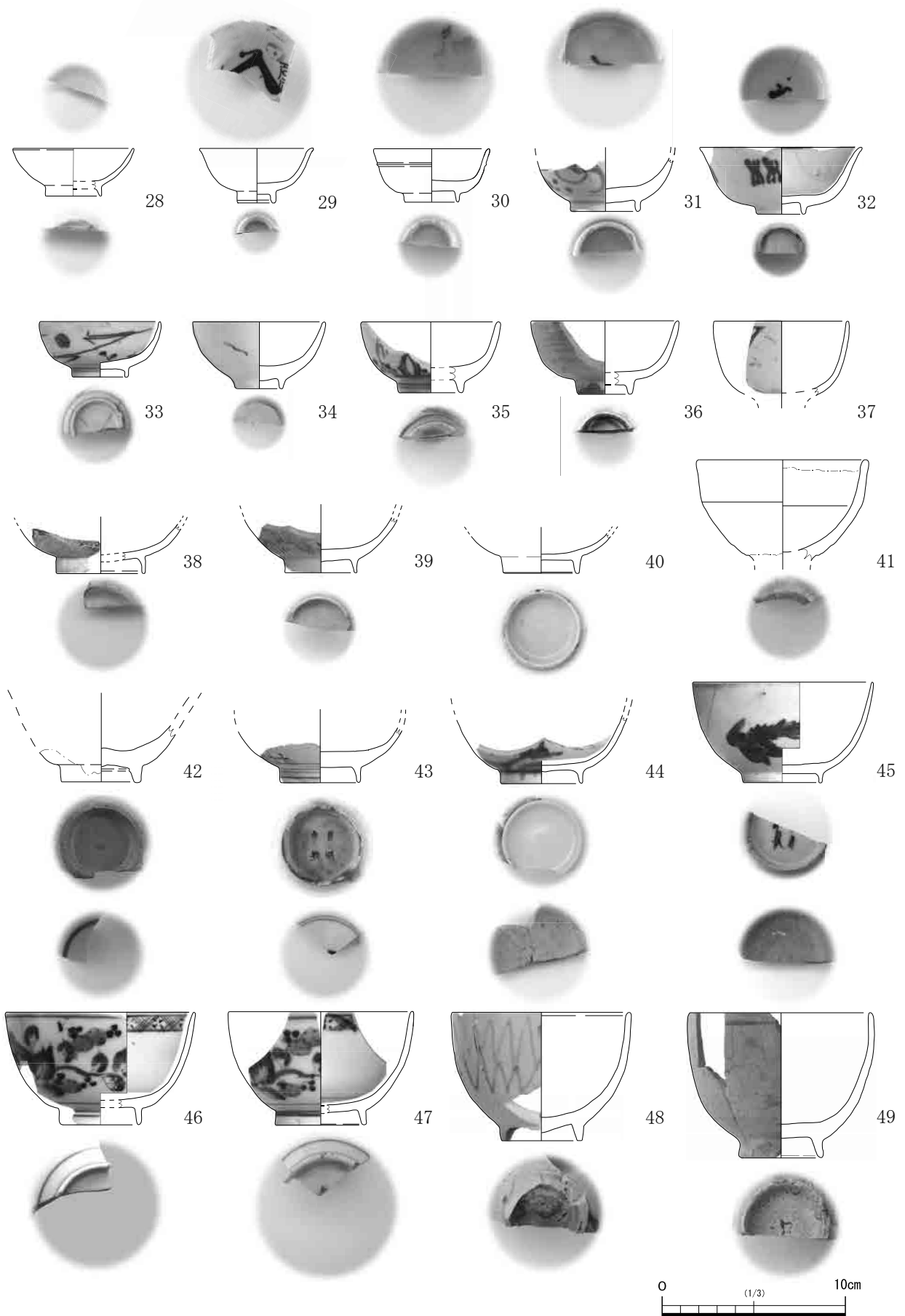


图4 磁器 (1)

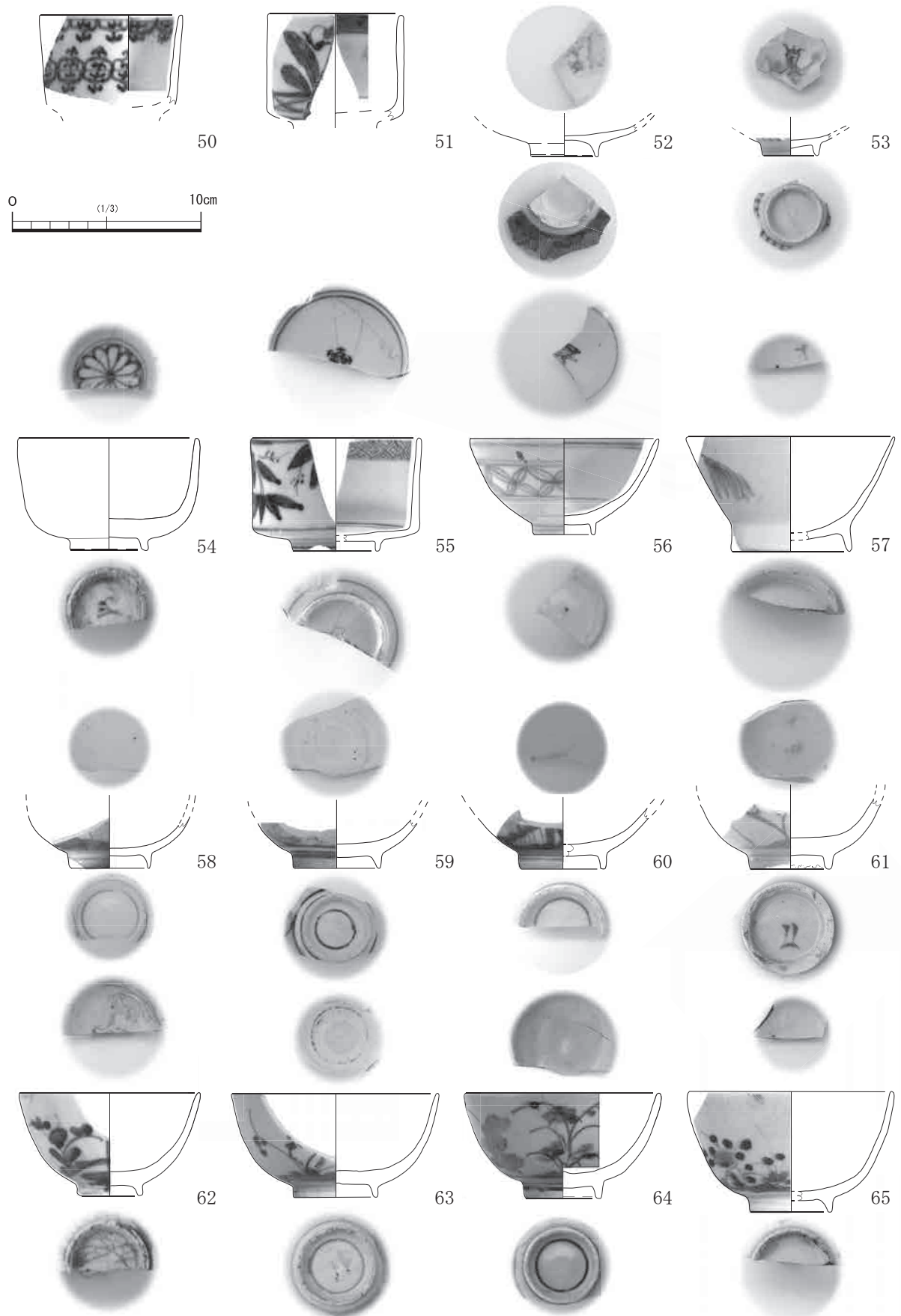


图5 磁器 (2)

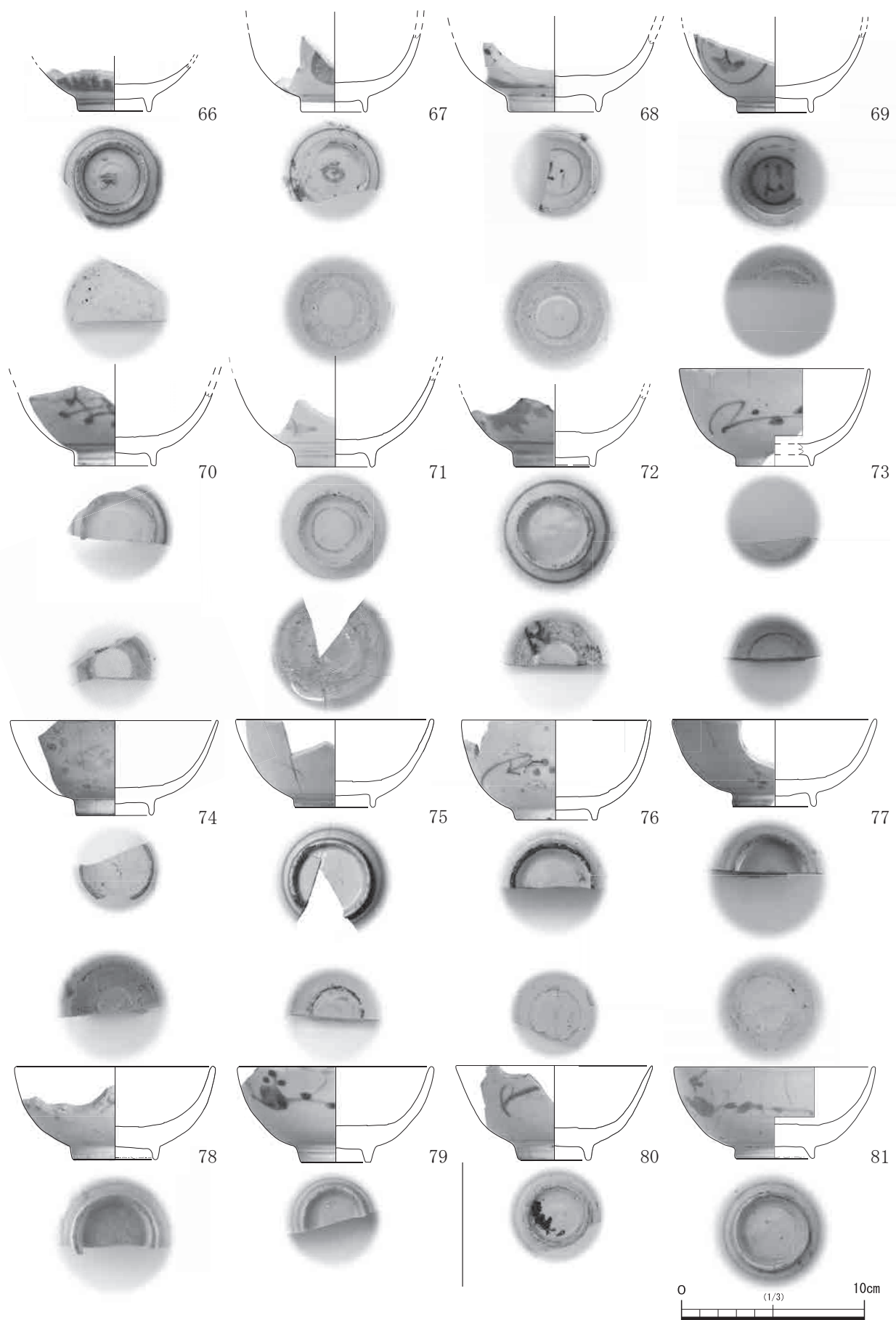


图6 磁器 (3)

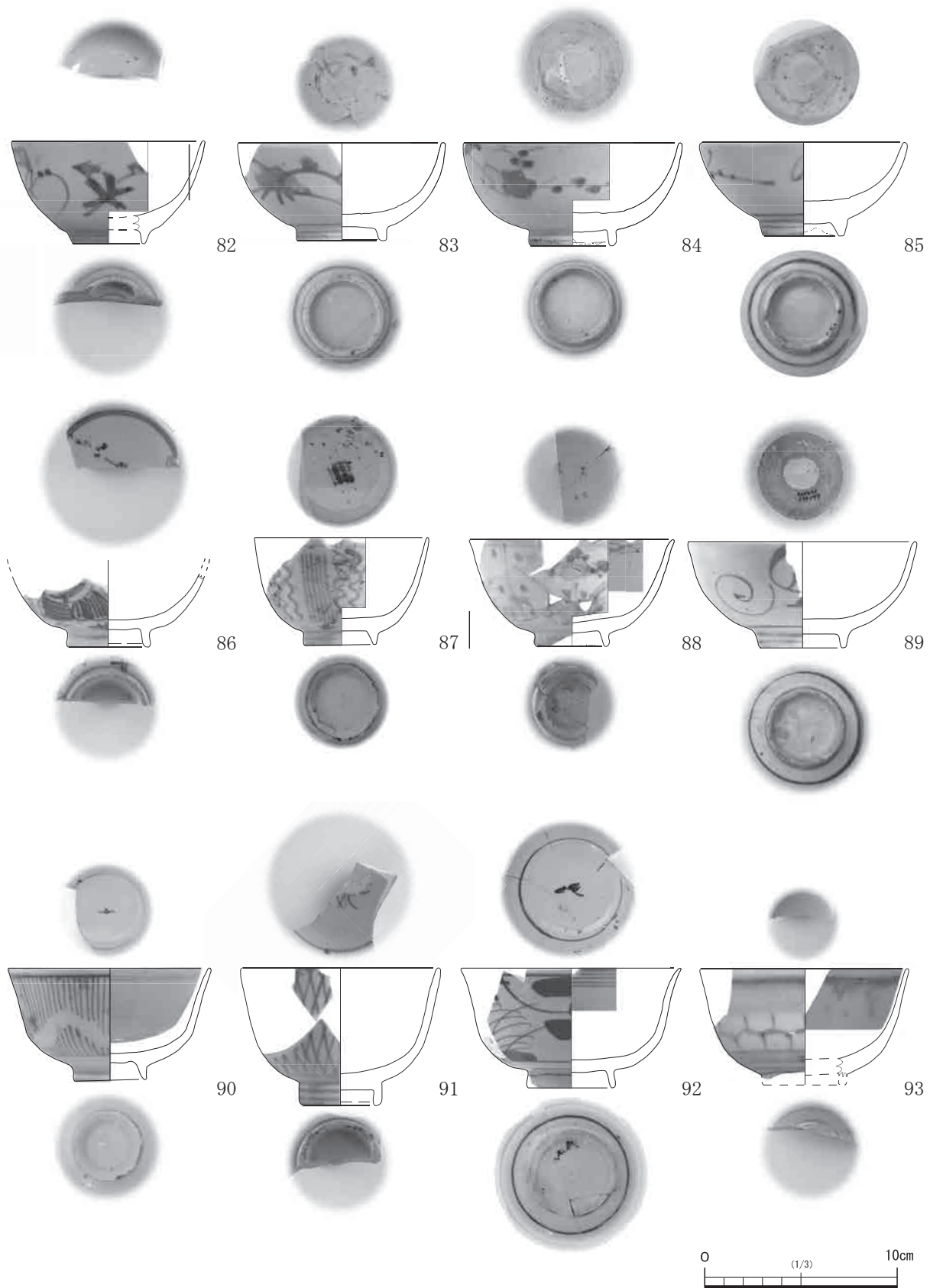


图7 磁器 (4)



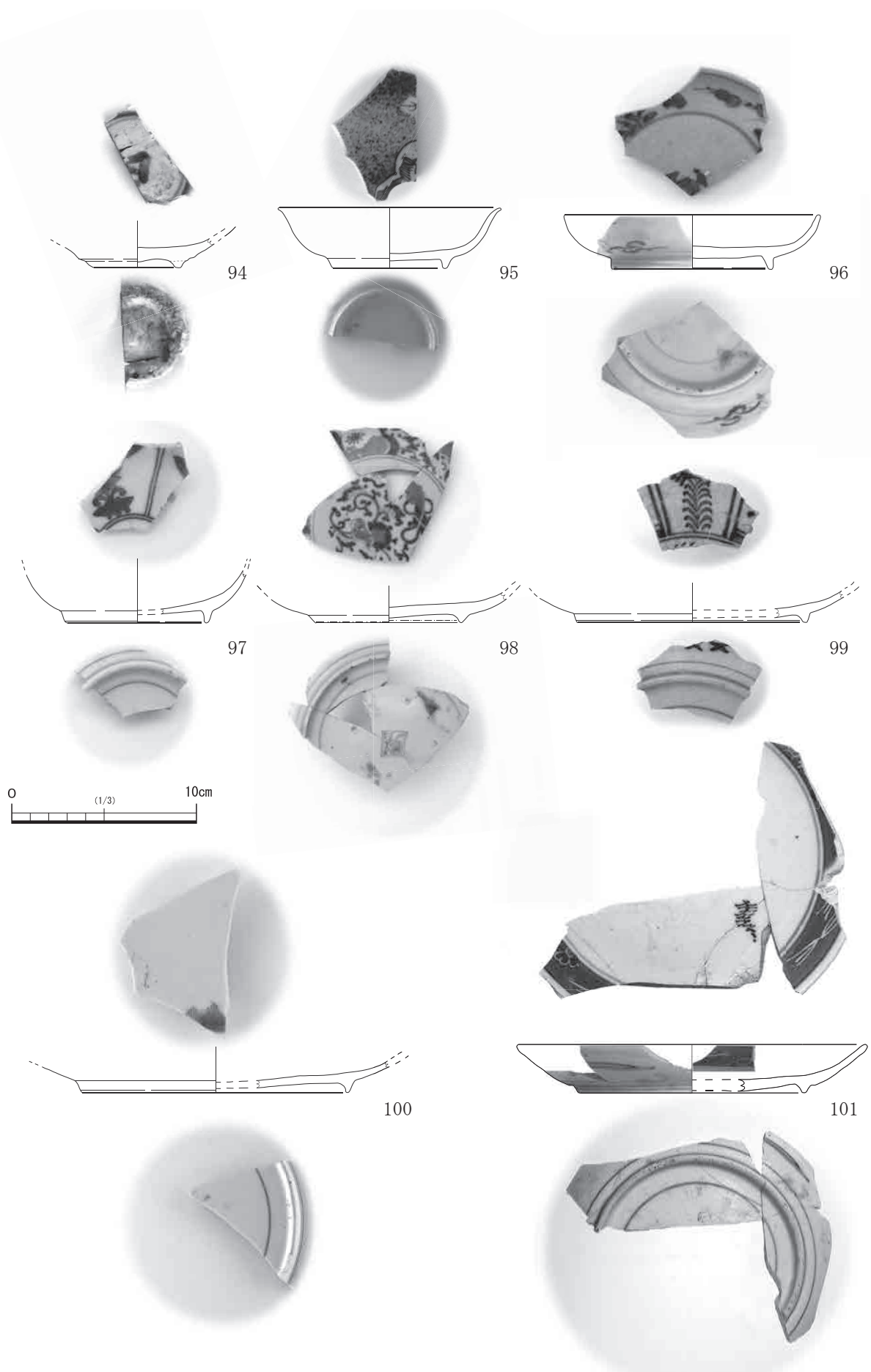


图8 磁器 (5)

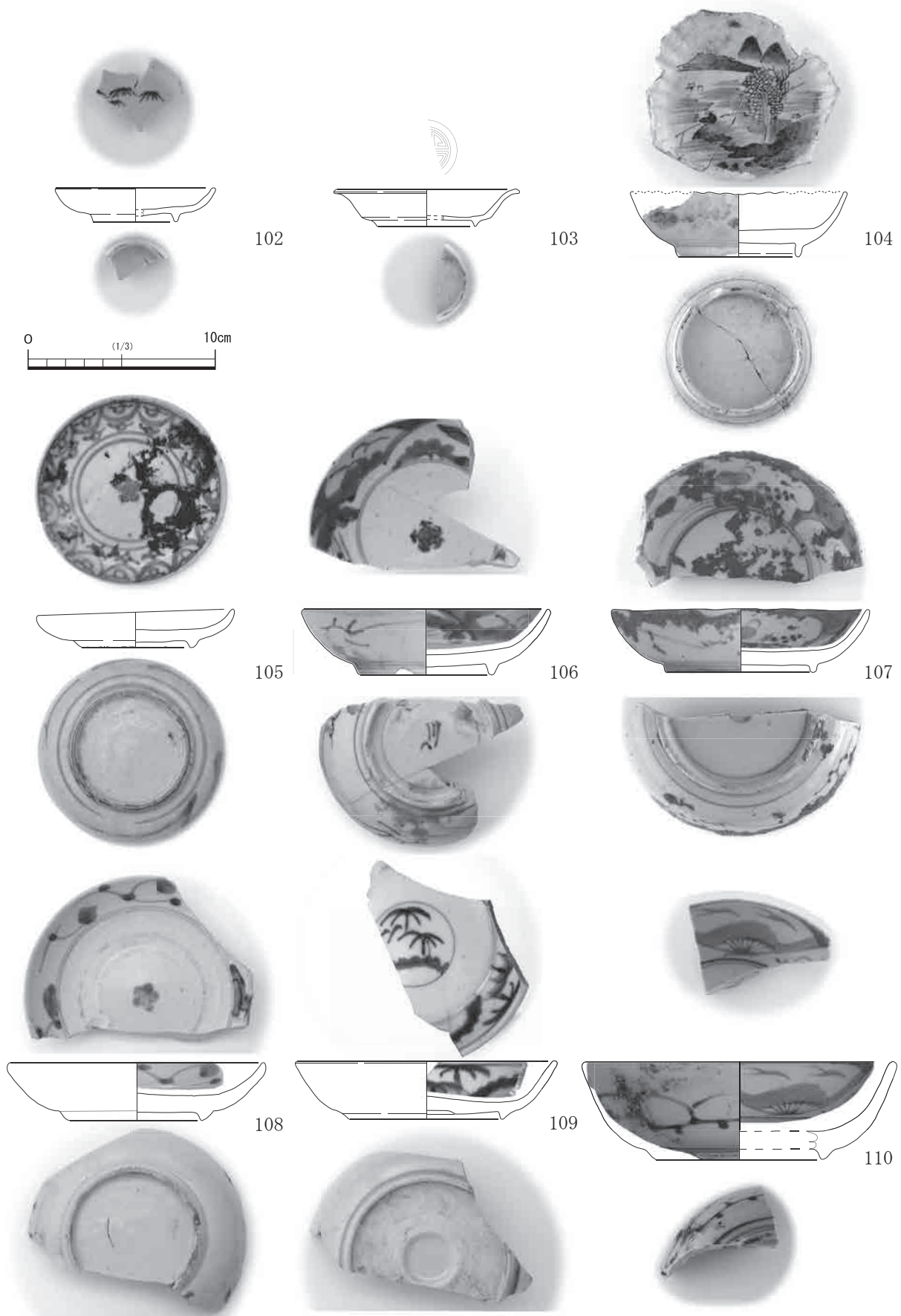


图9 磁器 (6)

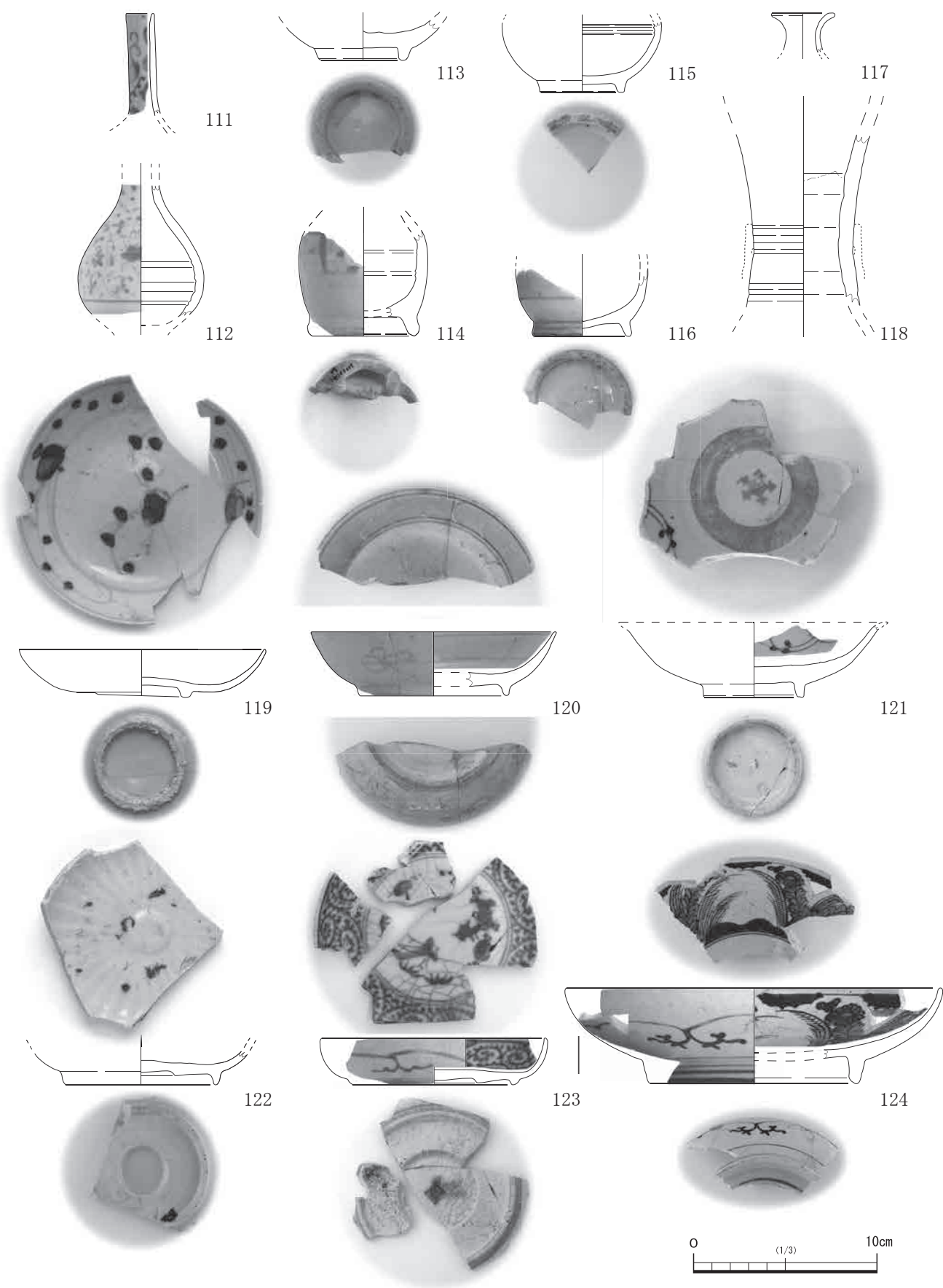


图 10 磁器 (7)

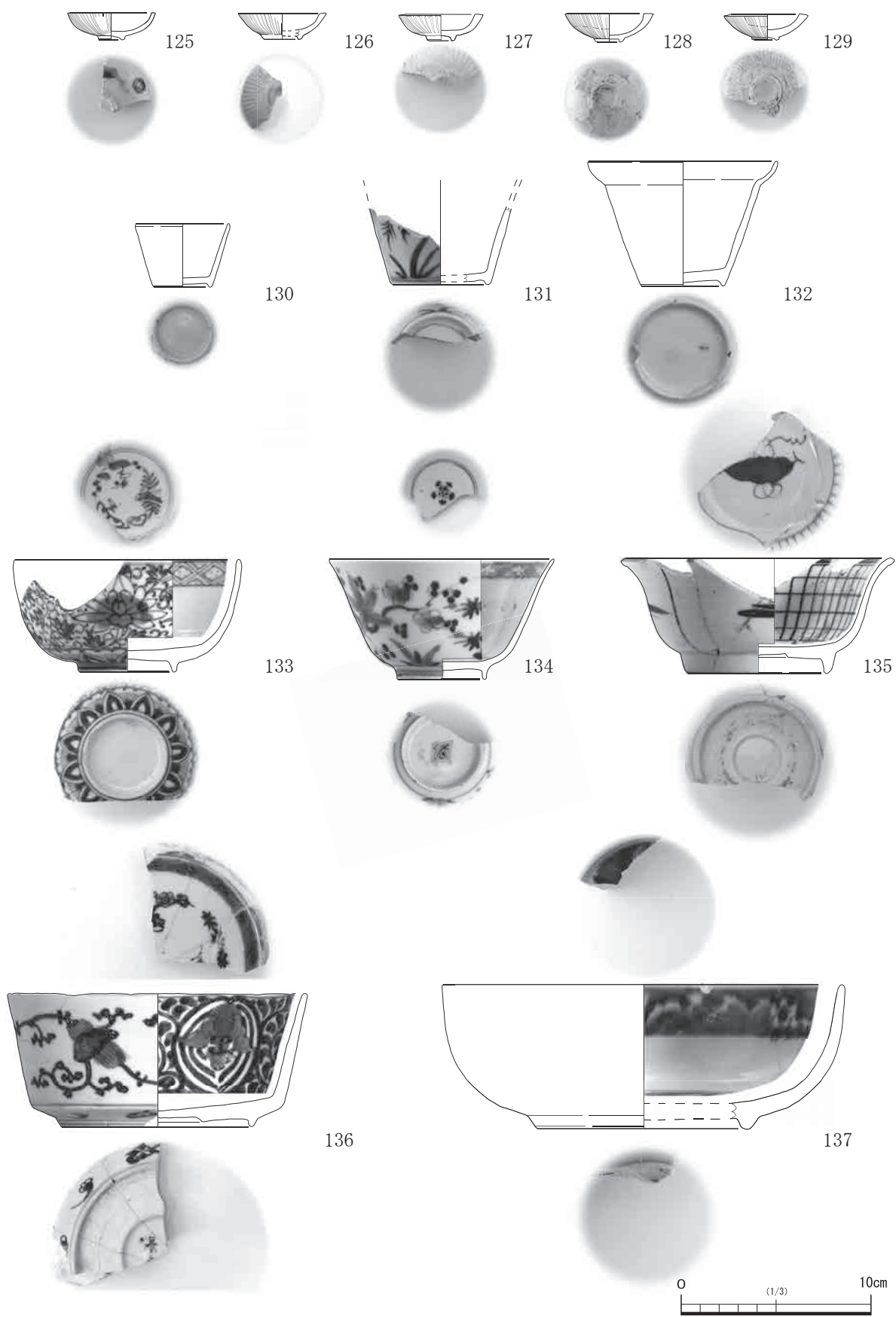


图 11 磁器 (8)

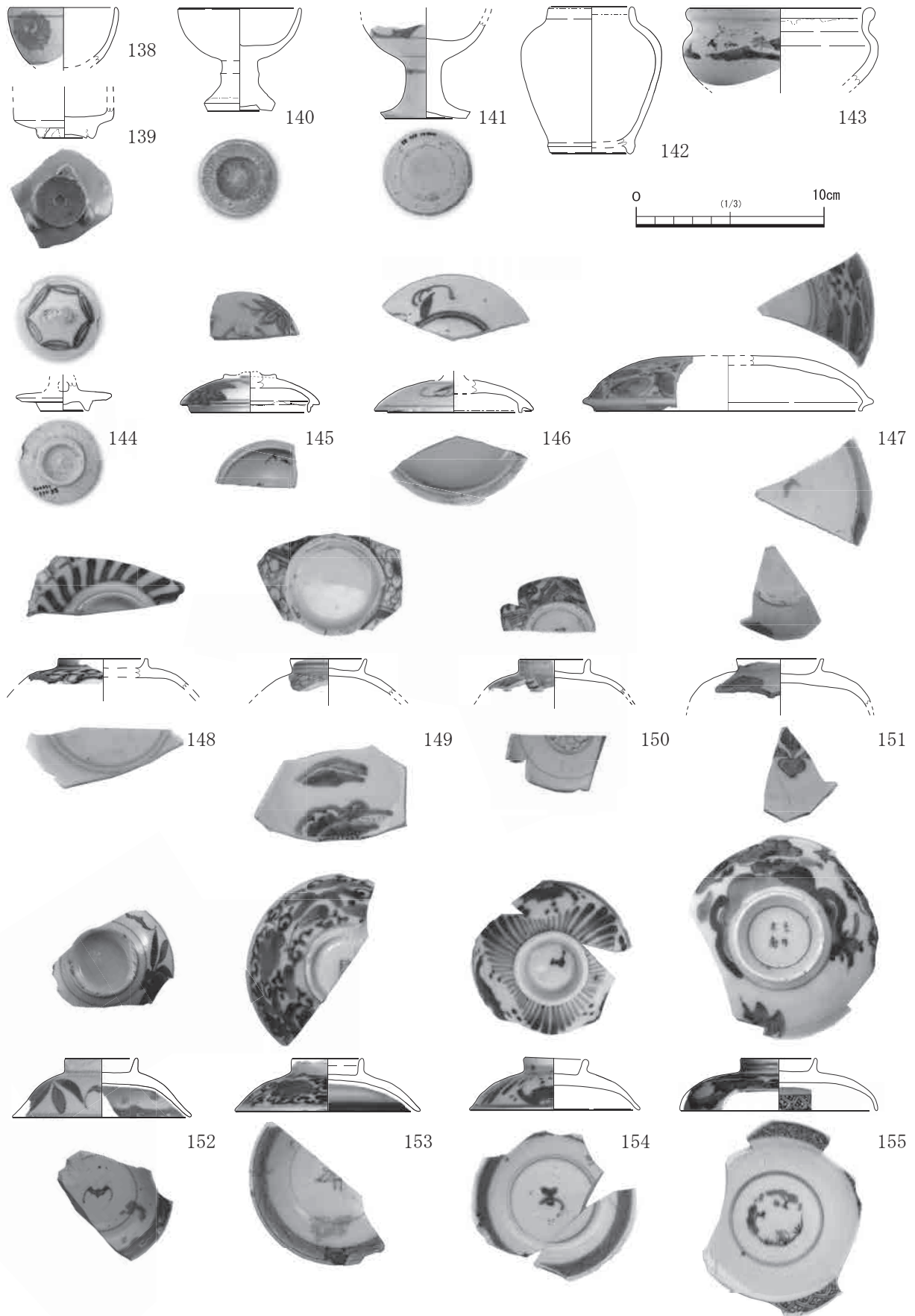


图 12 磁器 (9)

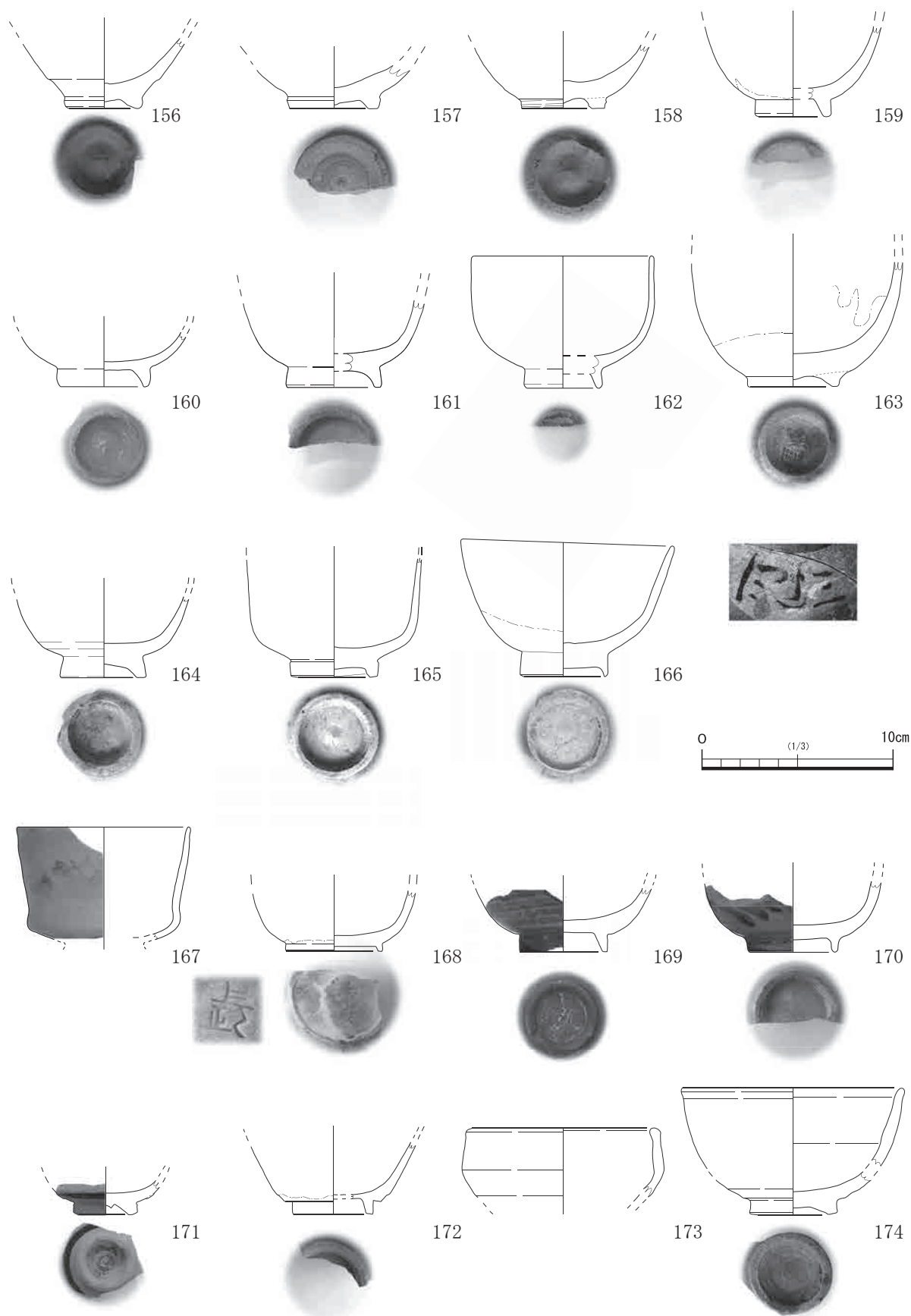


图 13 陶器 (1)

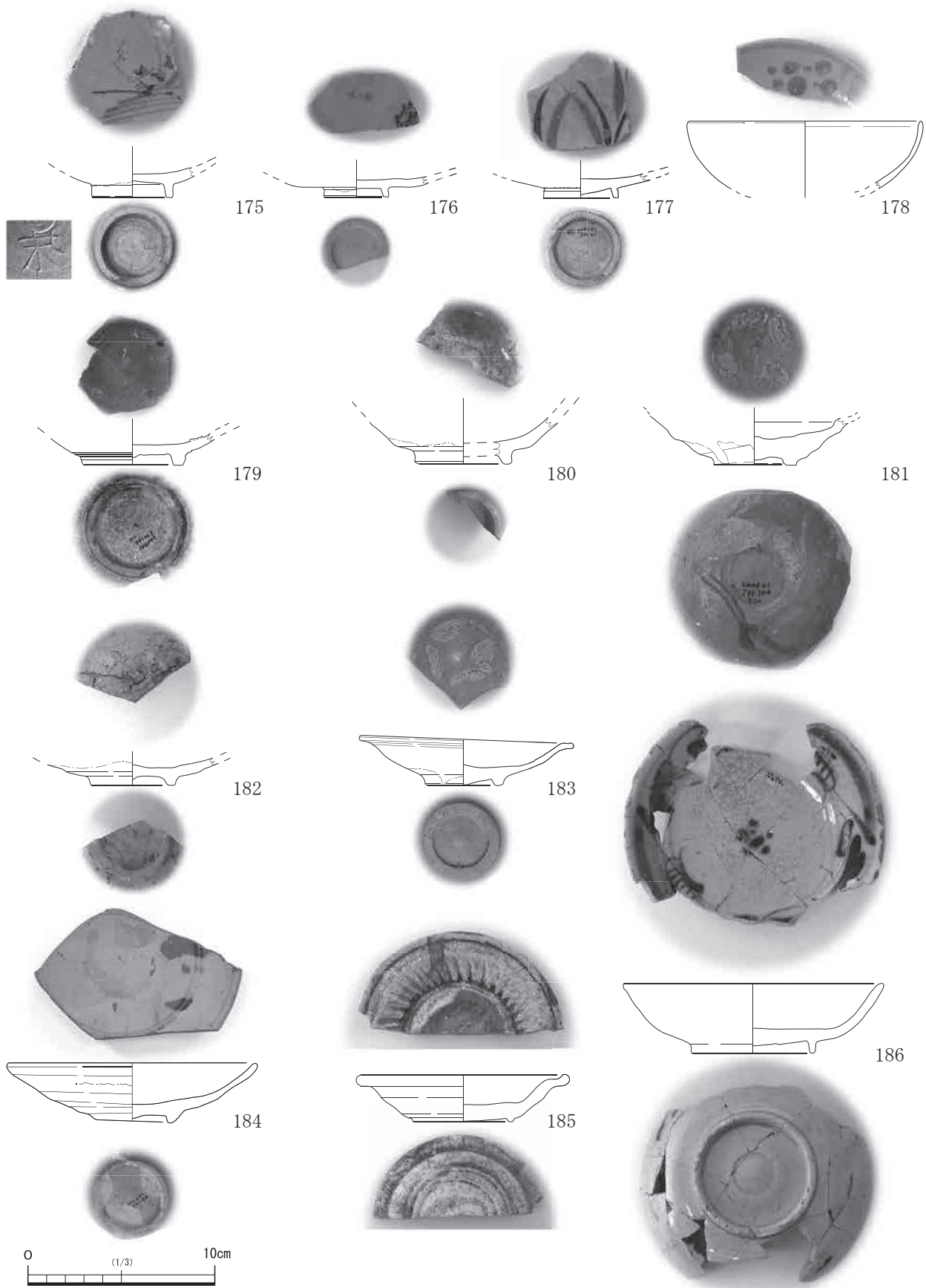


图 14 陶器 (2)

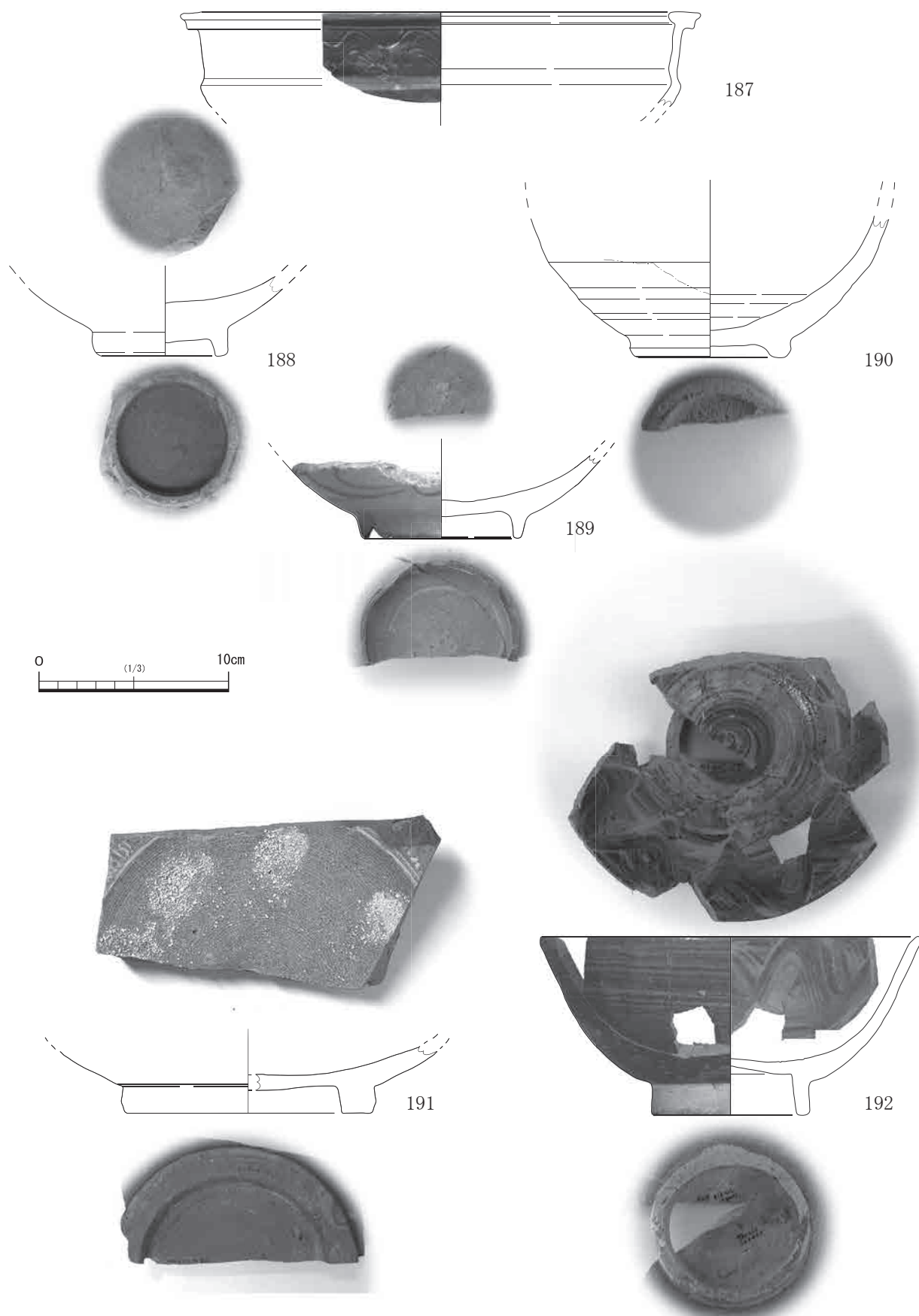


图 15 陶器 (3)



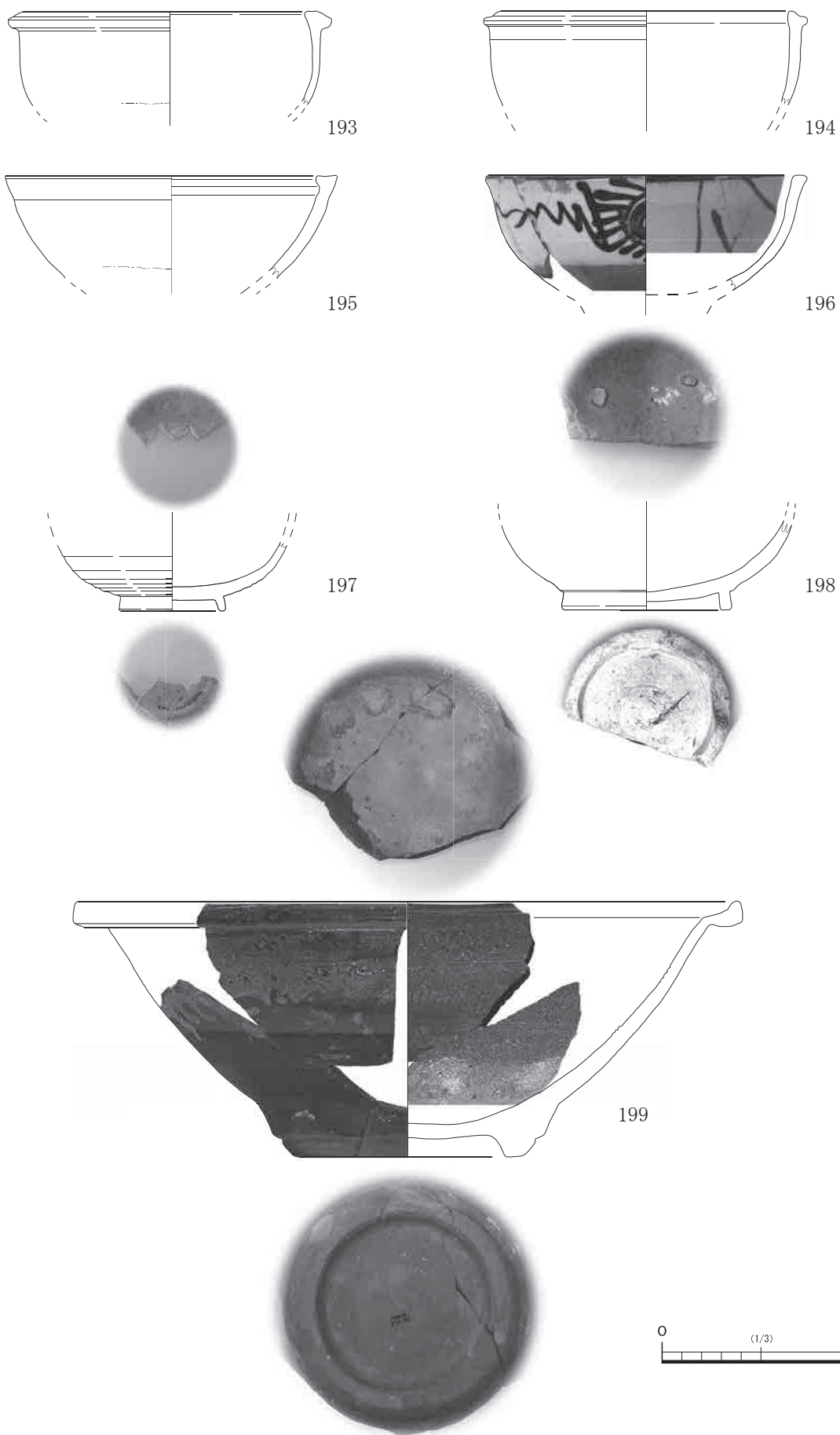


图 16 陶器 (4)

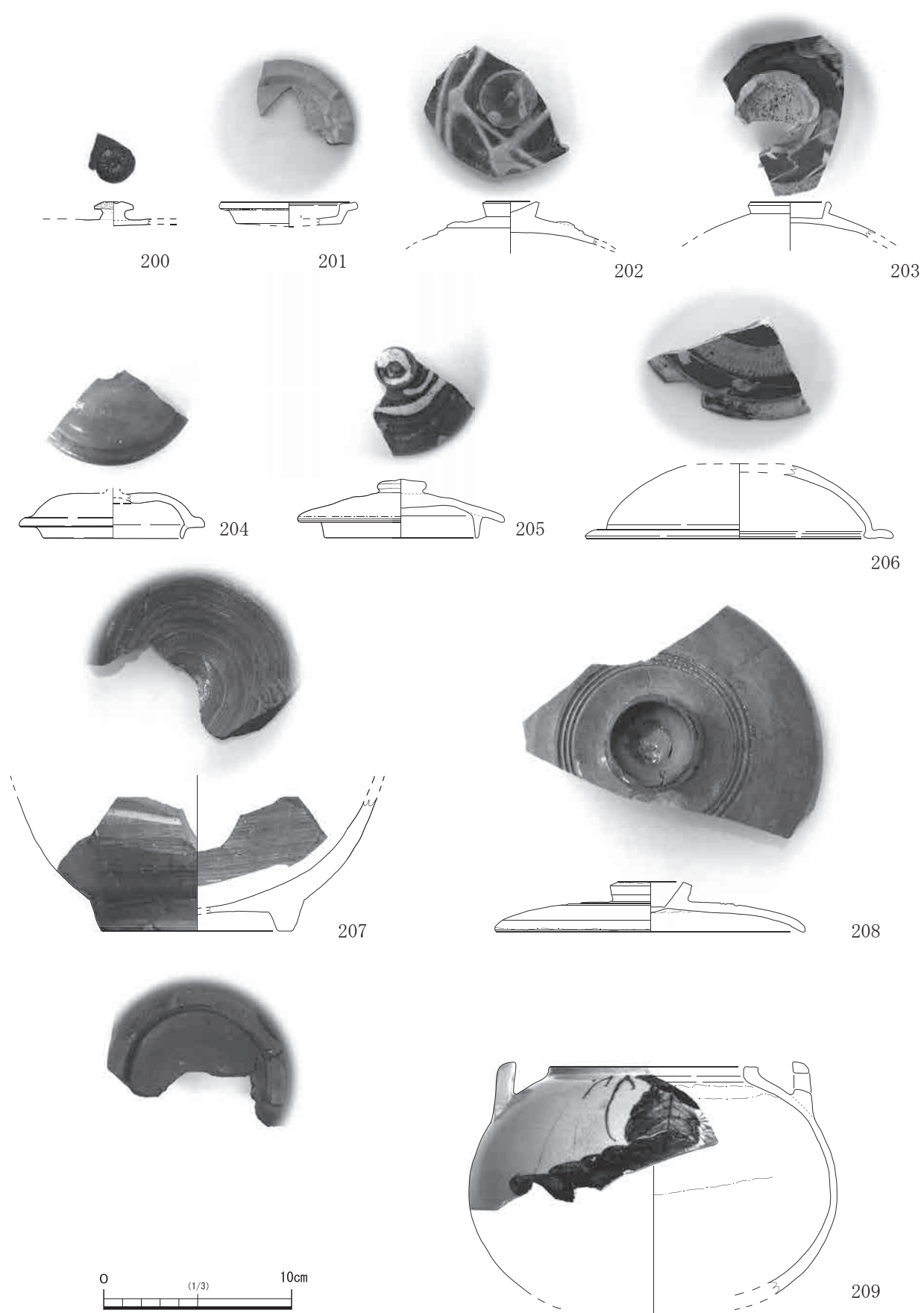


图 17 陶器 (5)

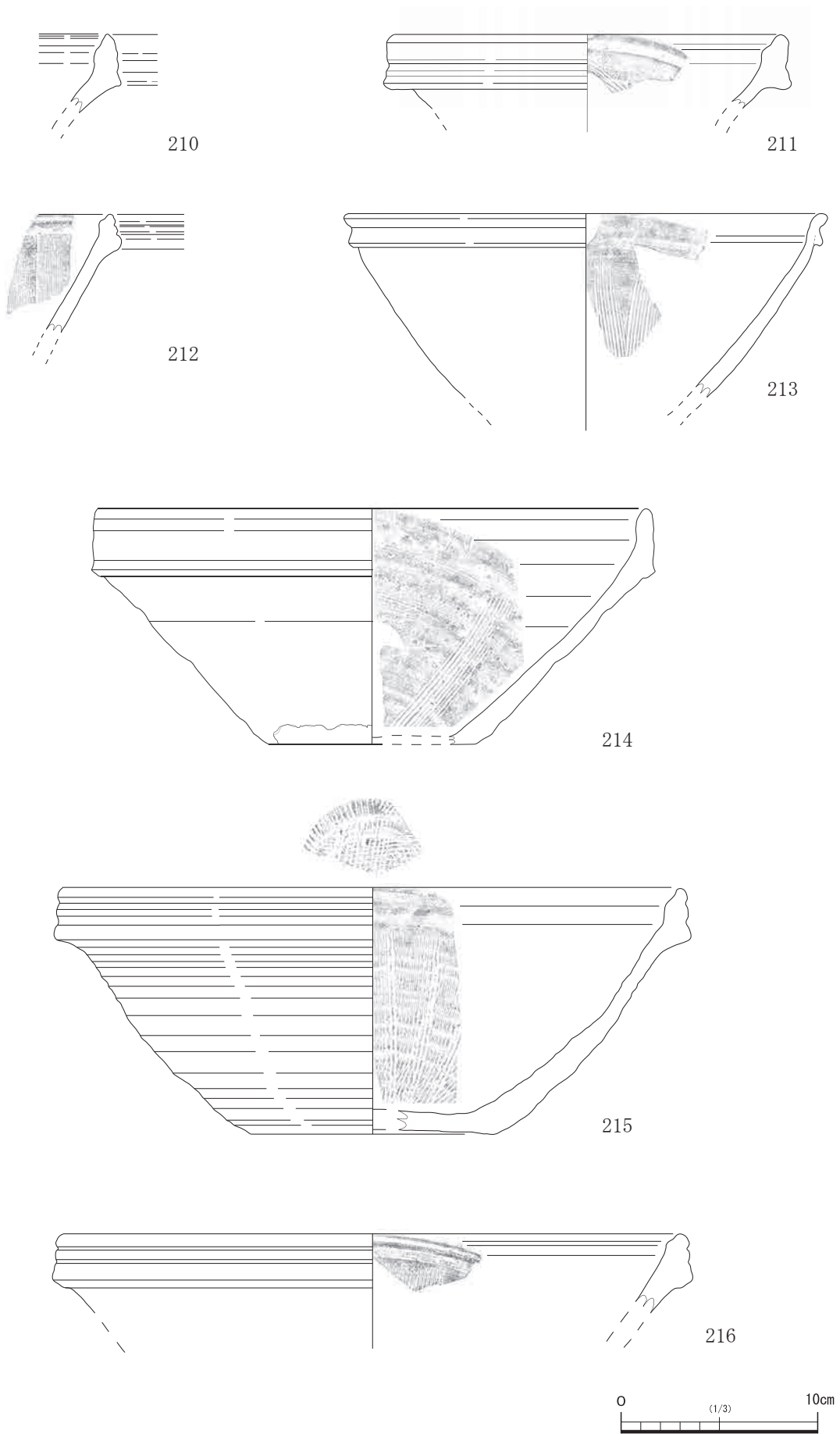


图 18 陶器 (6)

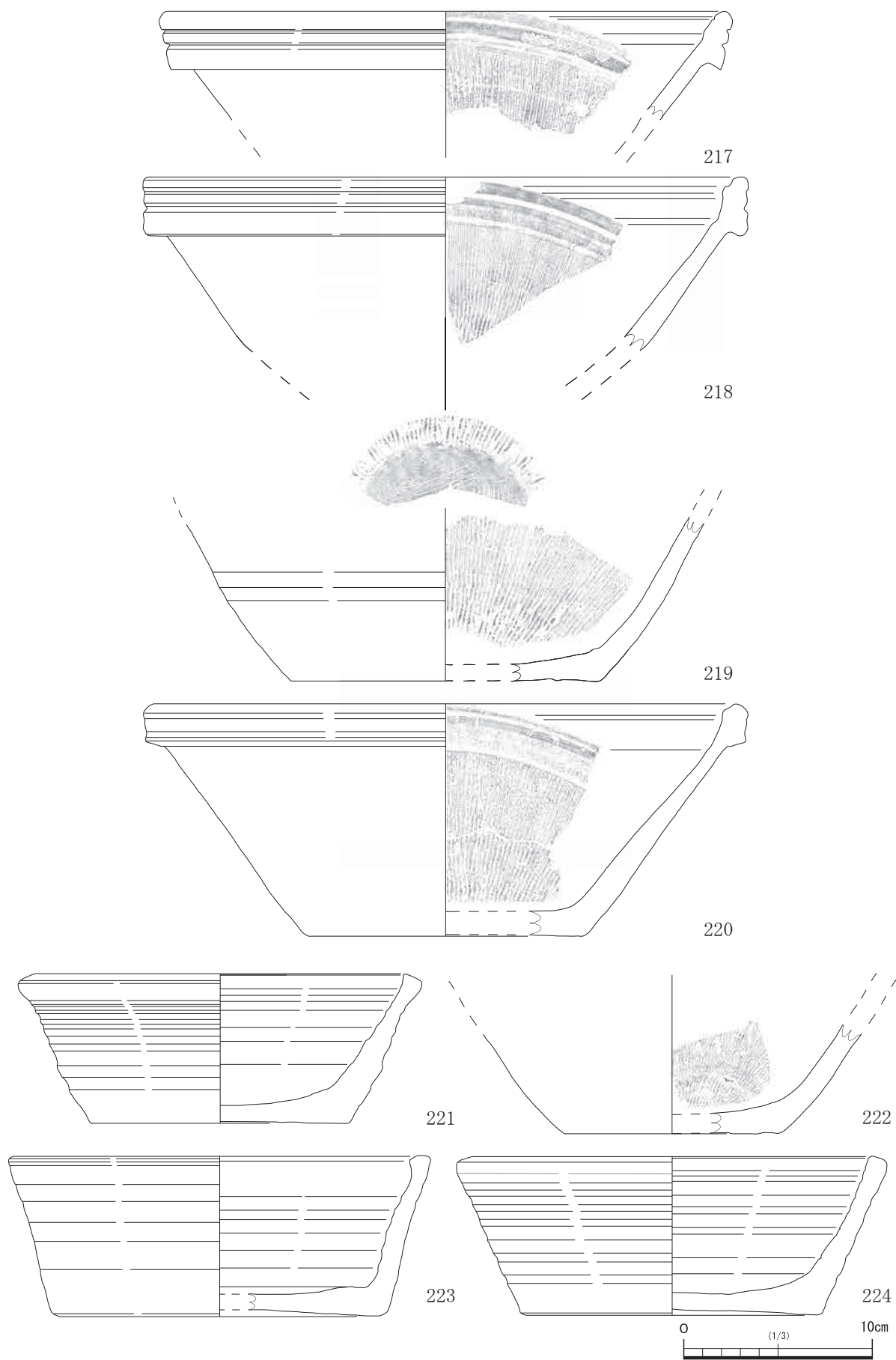
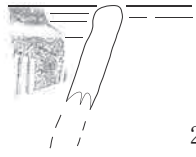


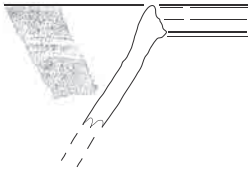
图 19 陶器 (7)



225



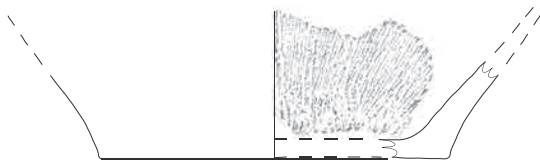
226



227



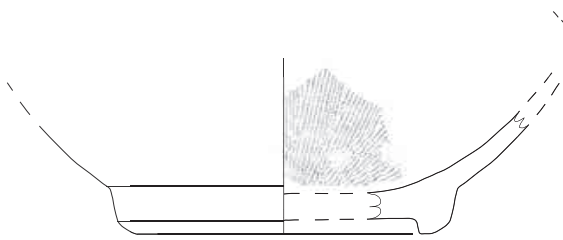
228



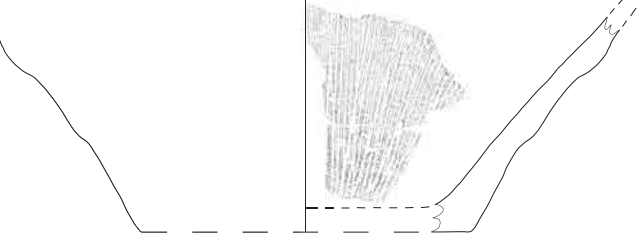
229



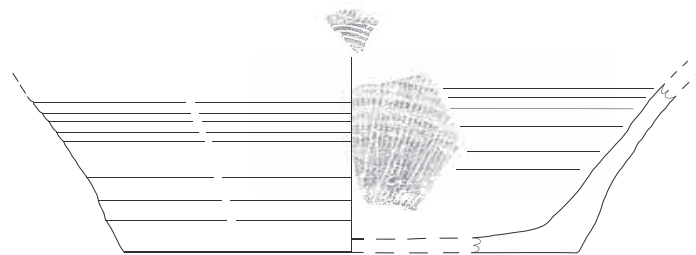
230



231



232



233



图 20 陶器 (8)

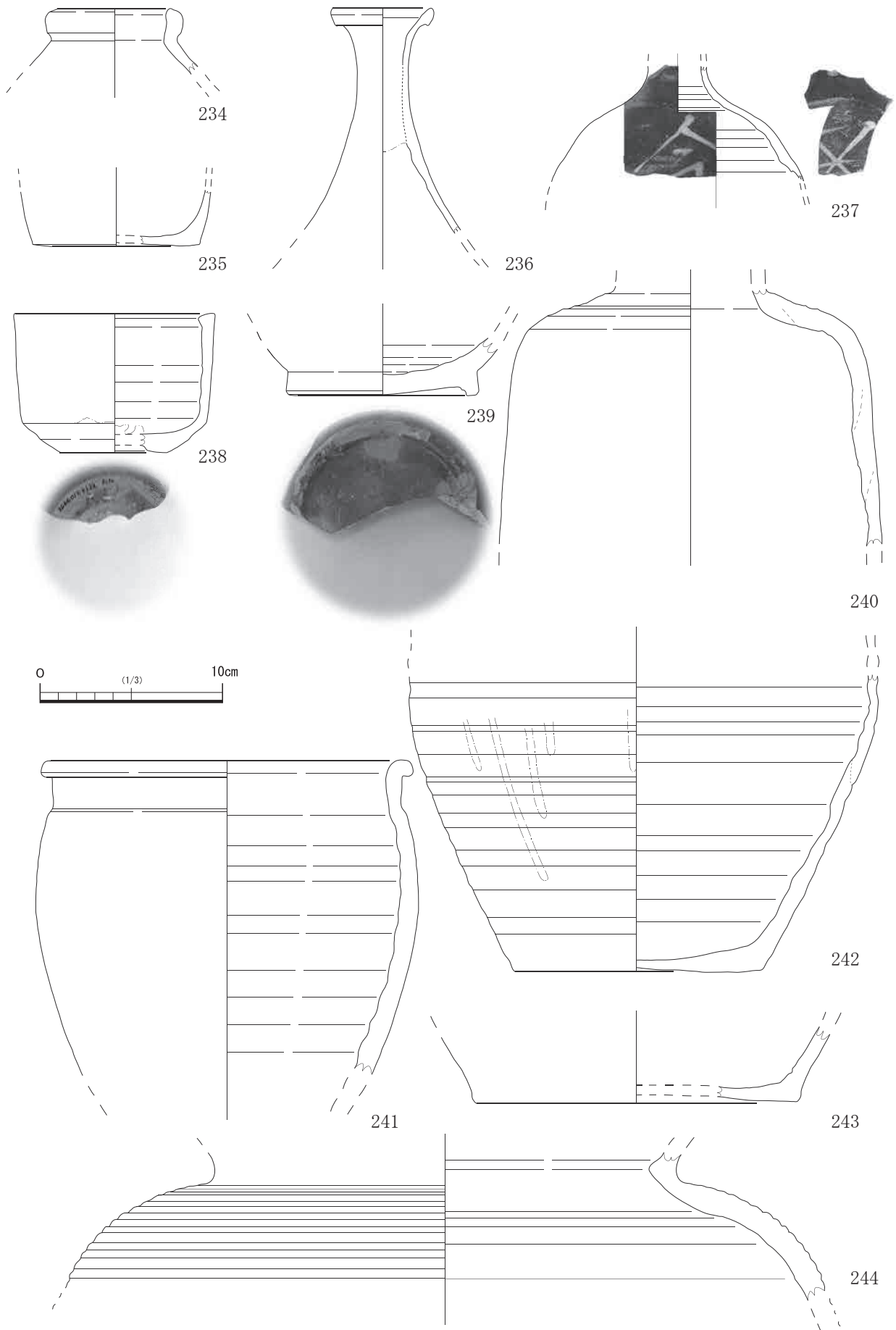


图 21 陶器 (9)

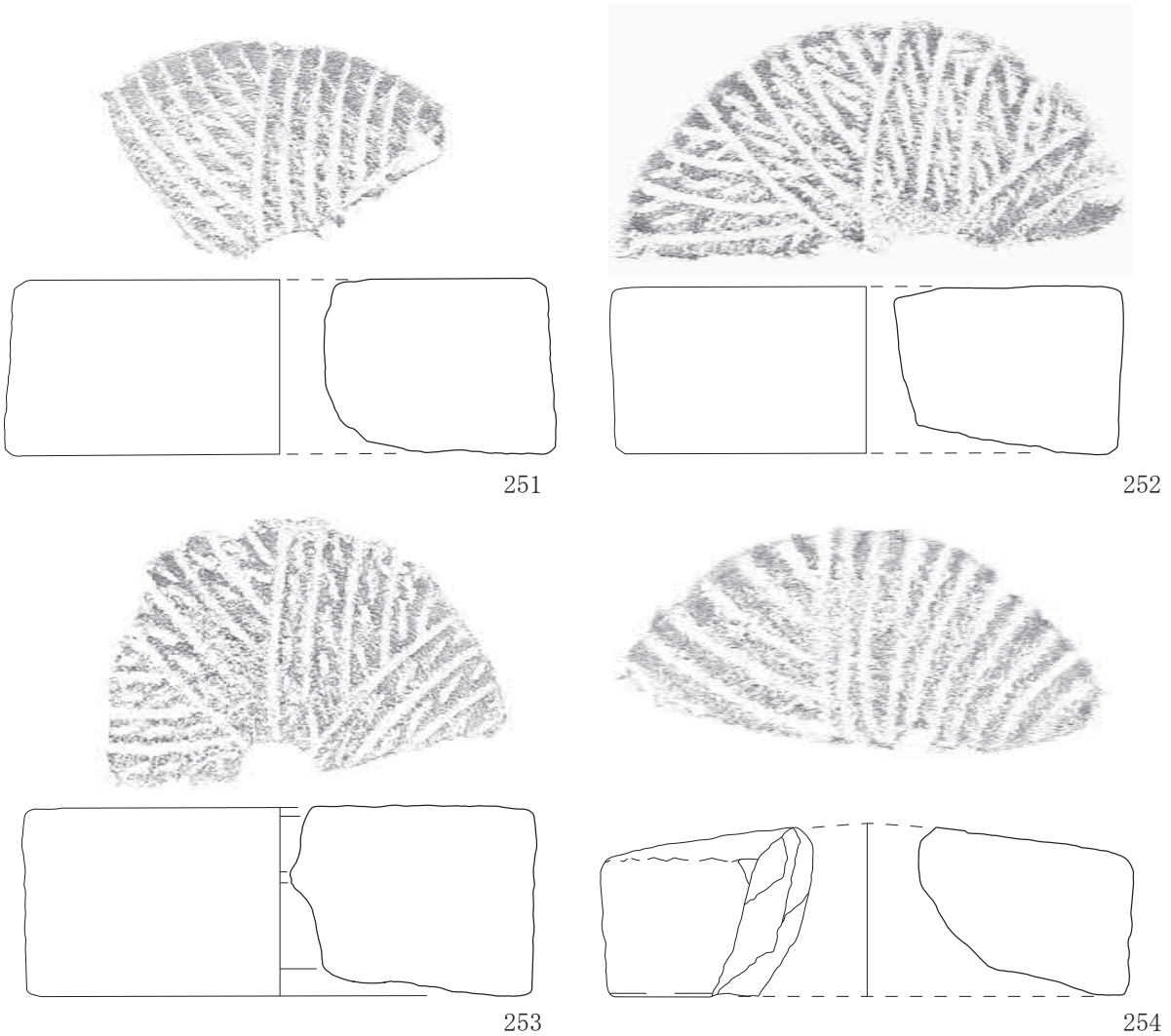
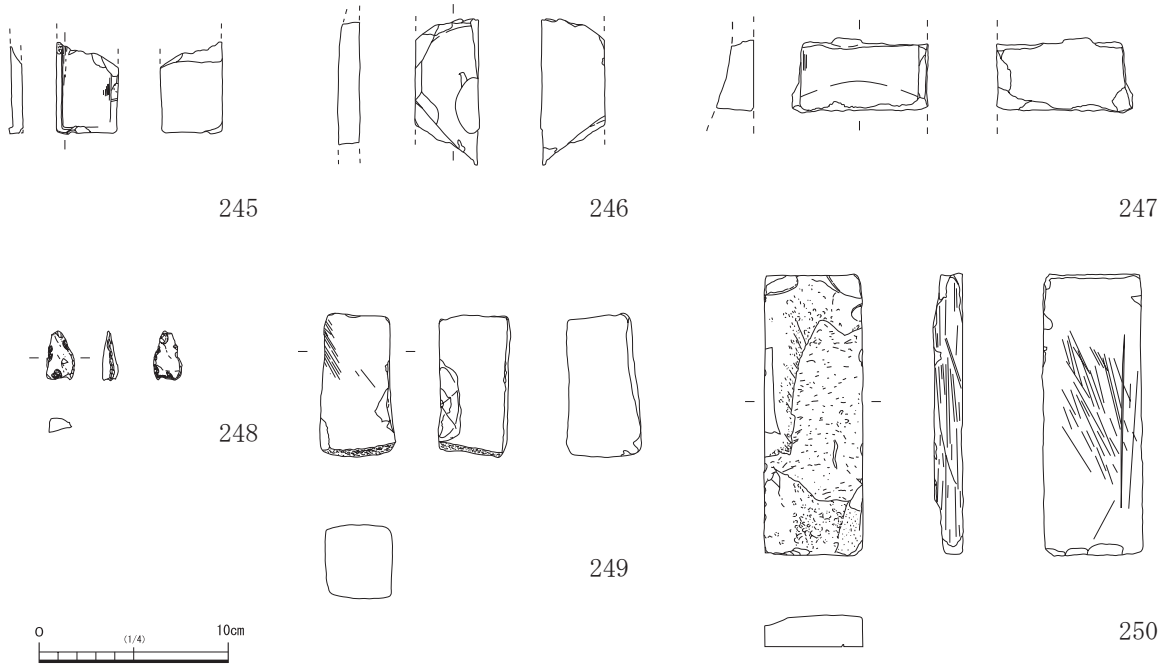


图 22 石製品 (1)

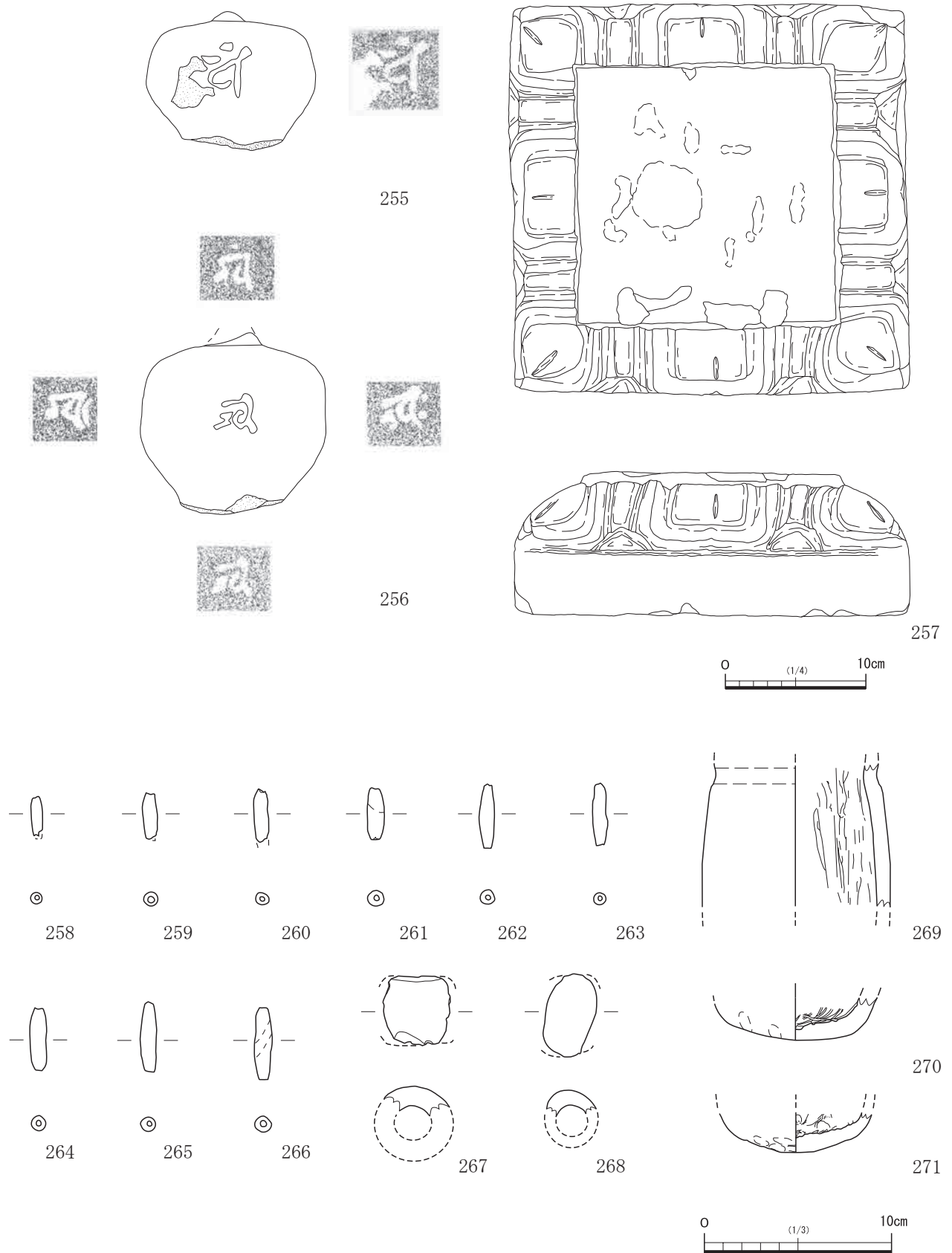


图 23 石製品 (2)・漁具



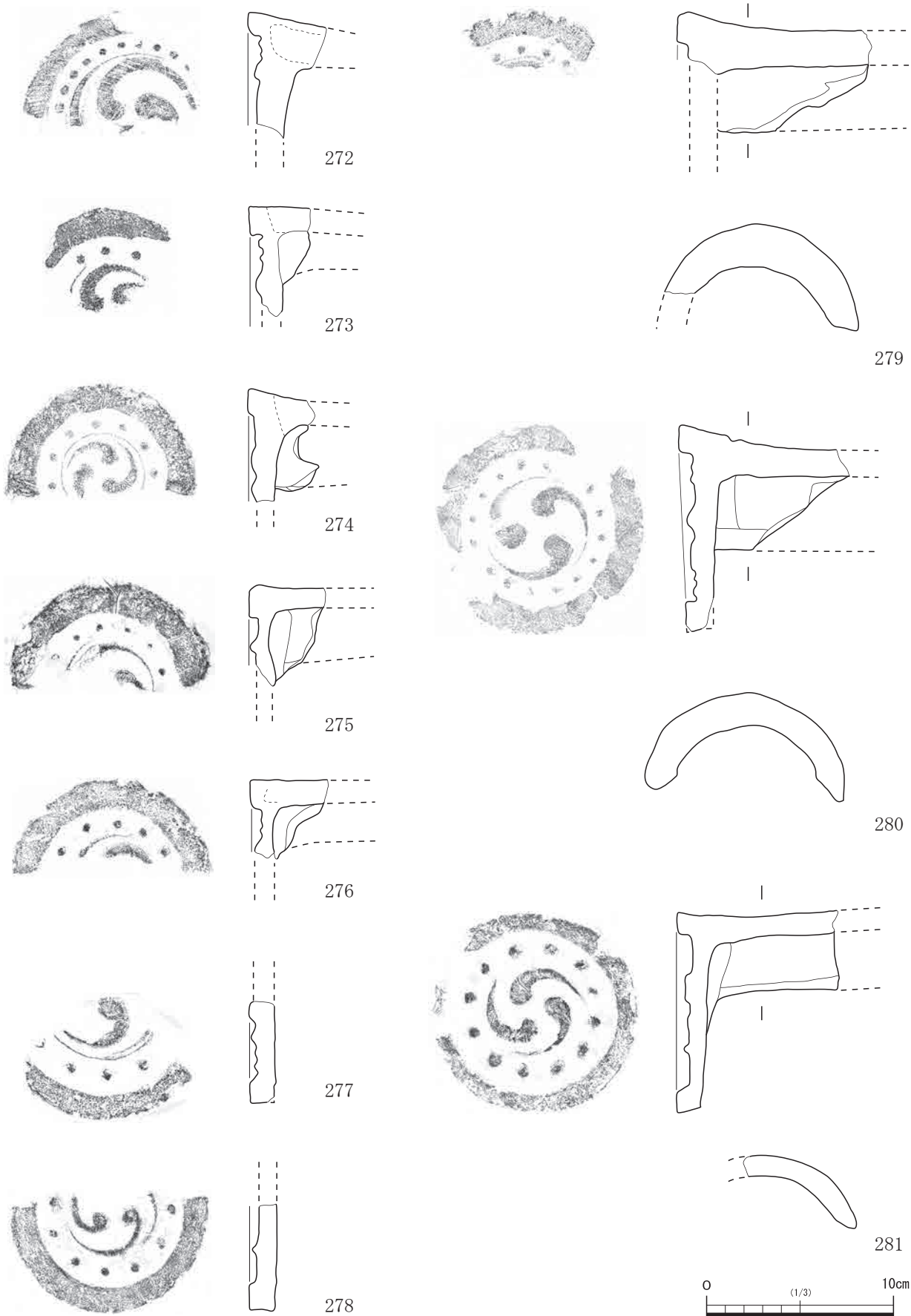
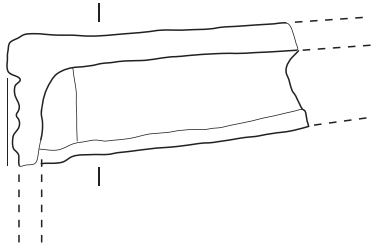


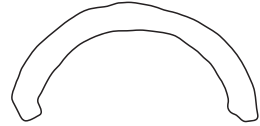
图24 瓦(1)



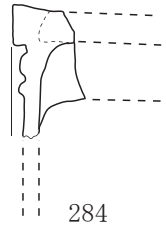
282



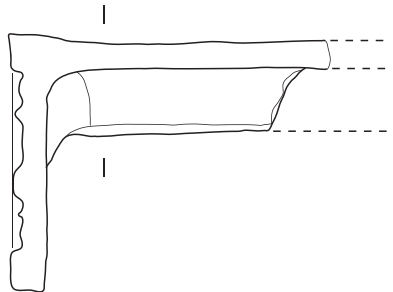
283



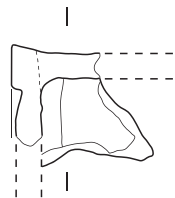
286



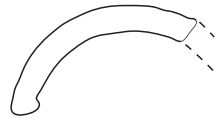
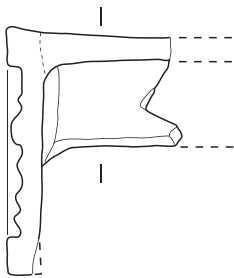
284



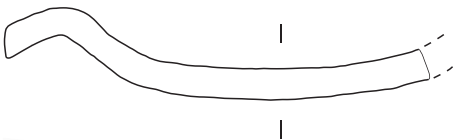
287



285



288



289



290



图 25 瓦 (2)

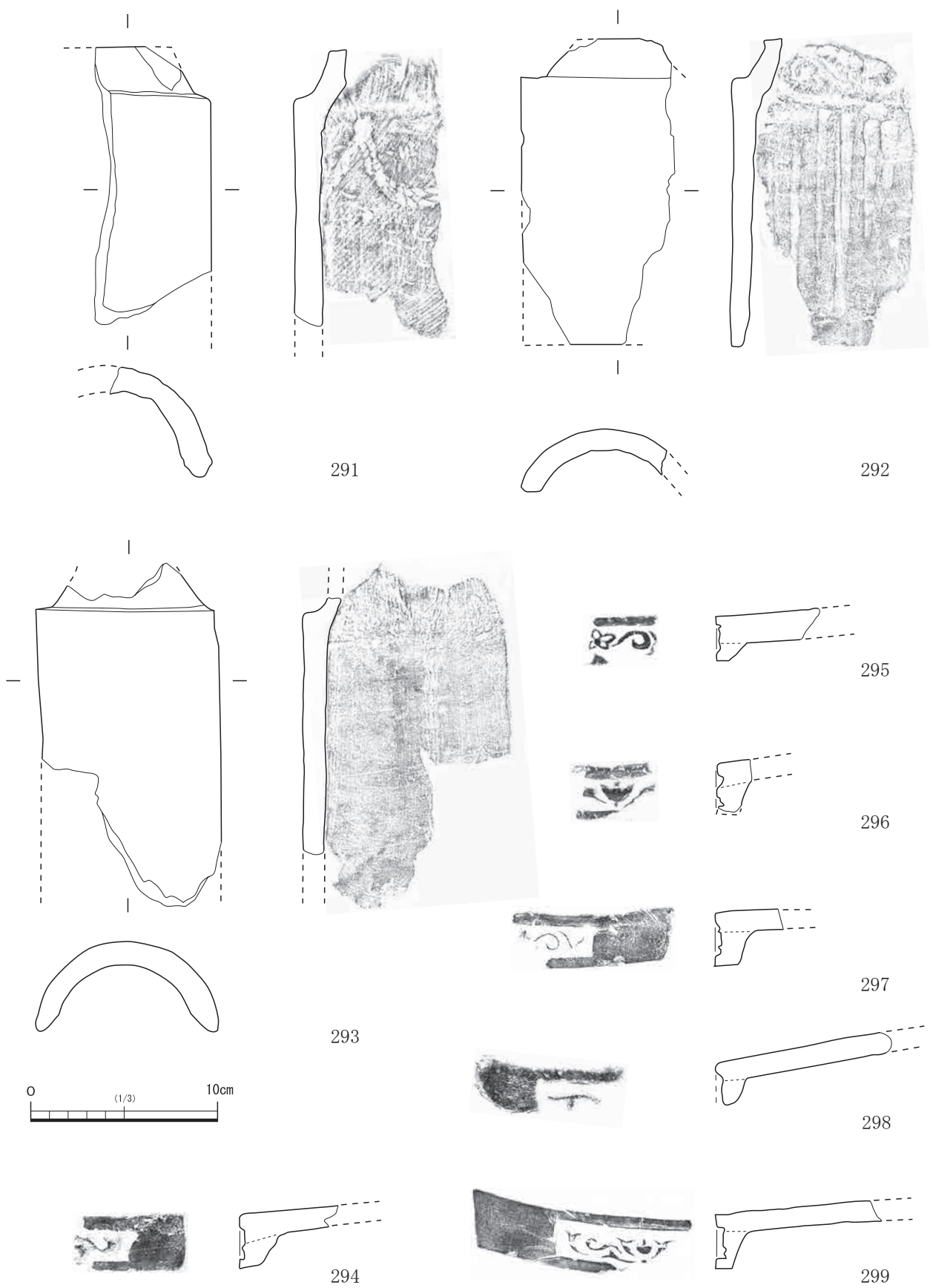


图 26 瓦 (3)

# 写真図版



泉佐野駅ホームと調査区





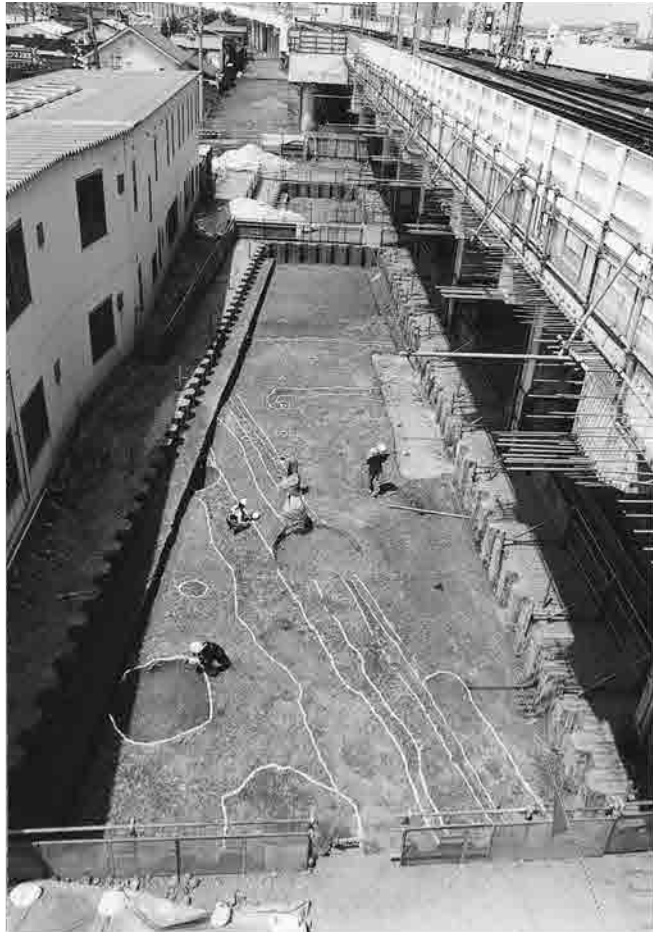
a 調査区とりんくうゲートタワービル



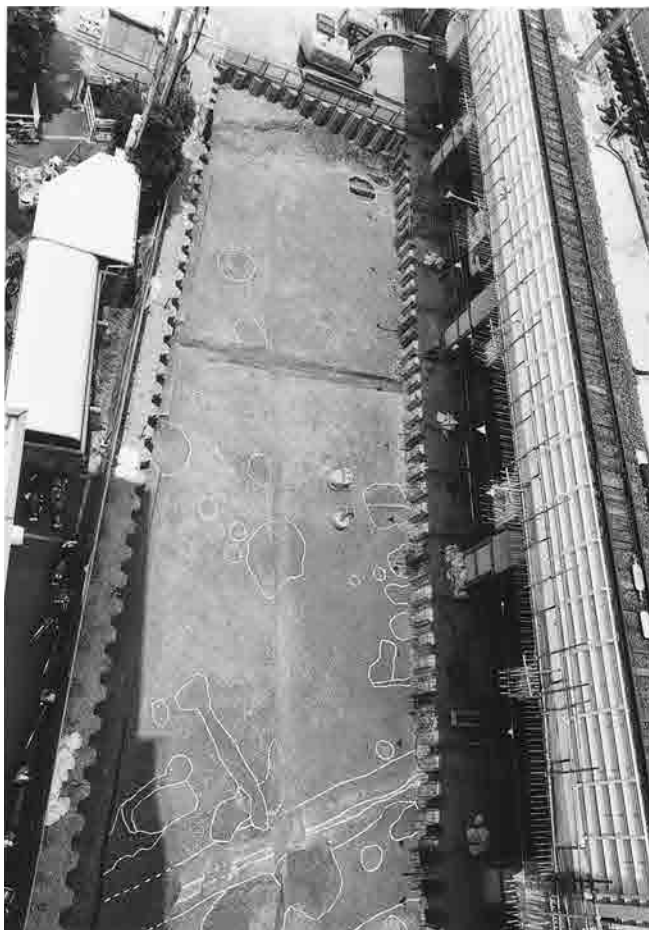
b 1区全景東から



c 1区・2区全景西から



d 2区・1区全景東から



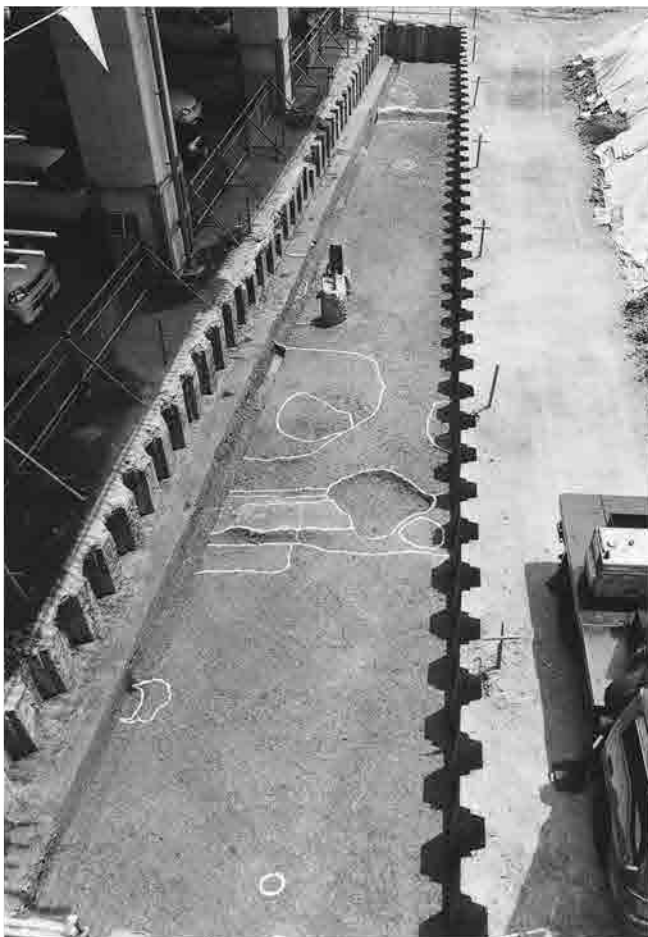
a 3区全景



b 3区全景東から



c 4区全景東から



d 4区全景西から

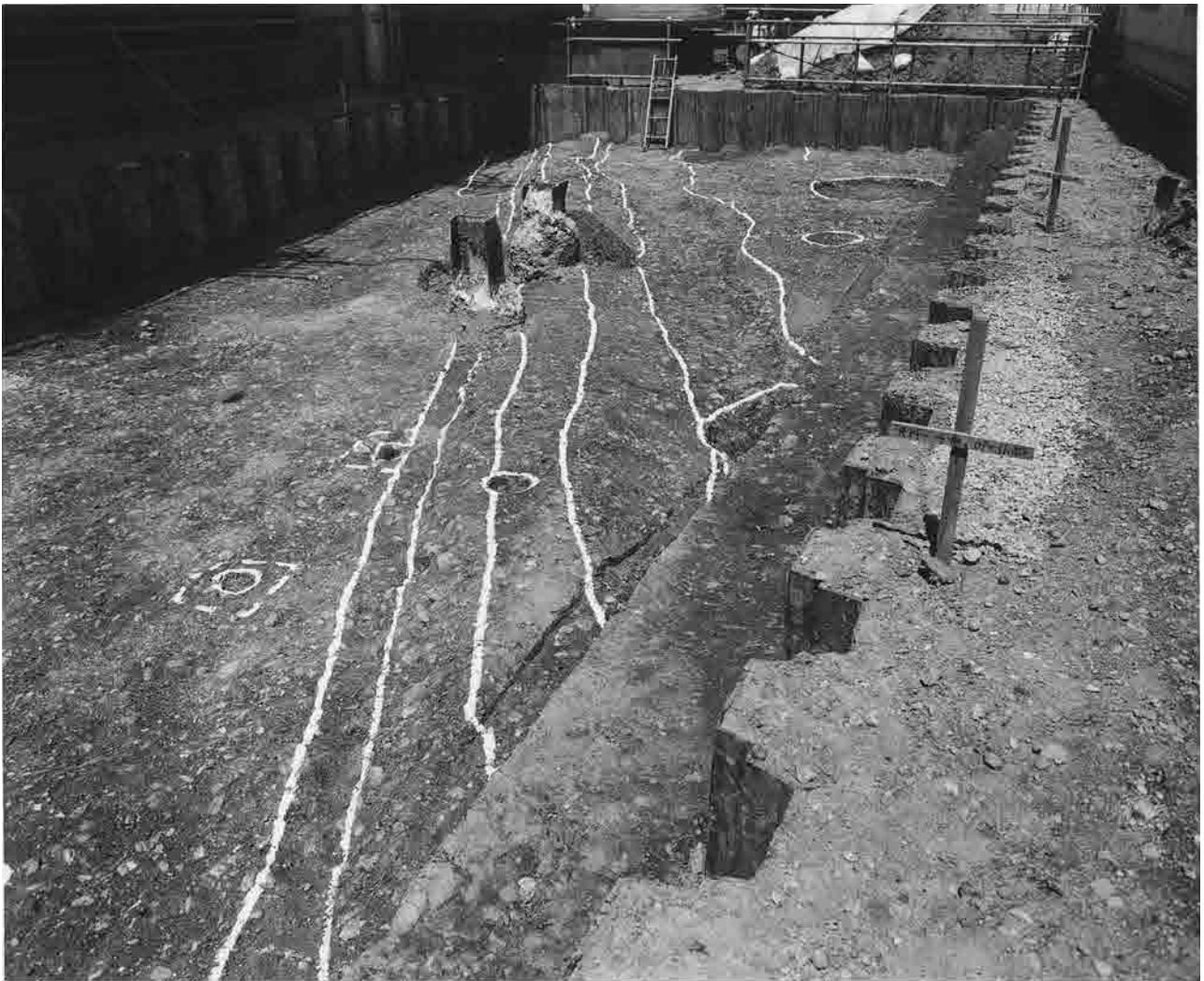


a 5区・6区全景東から



b 3区57井戸・56井戸検出状況

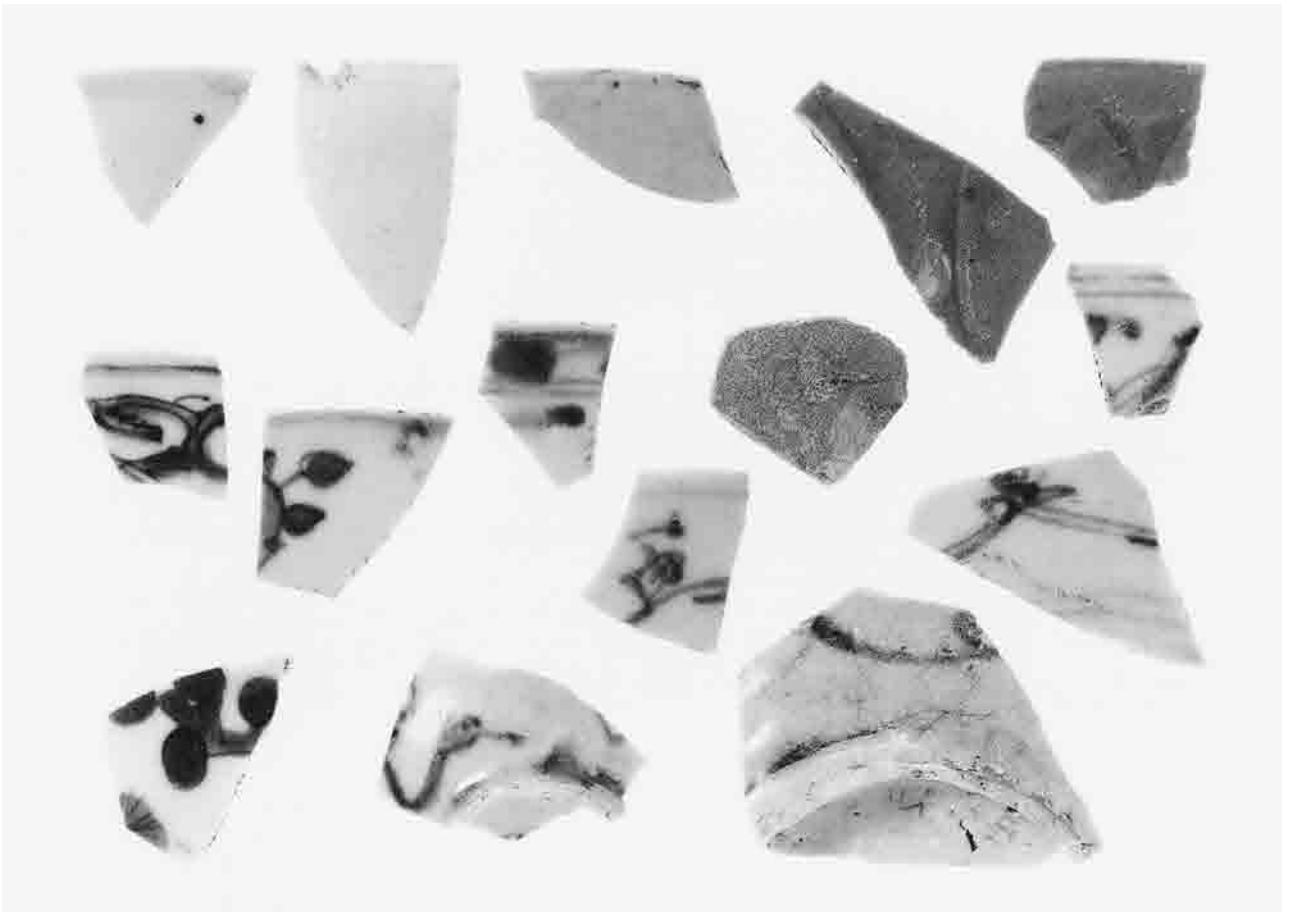




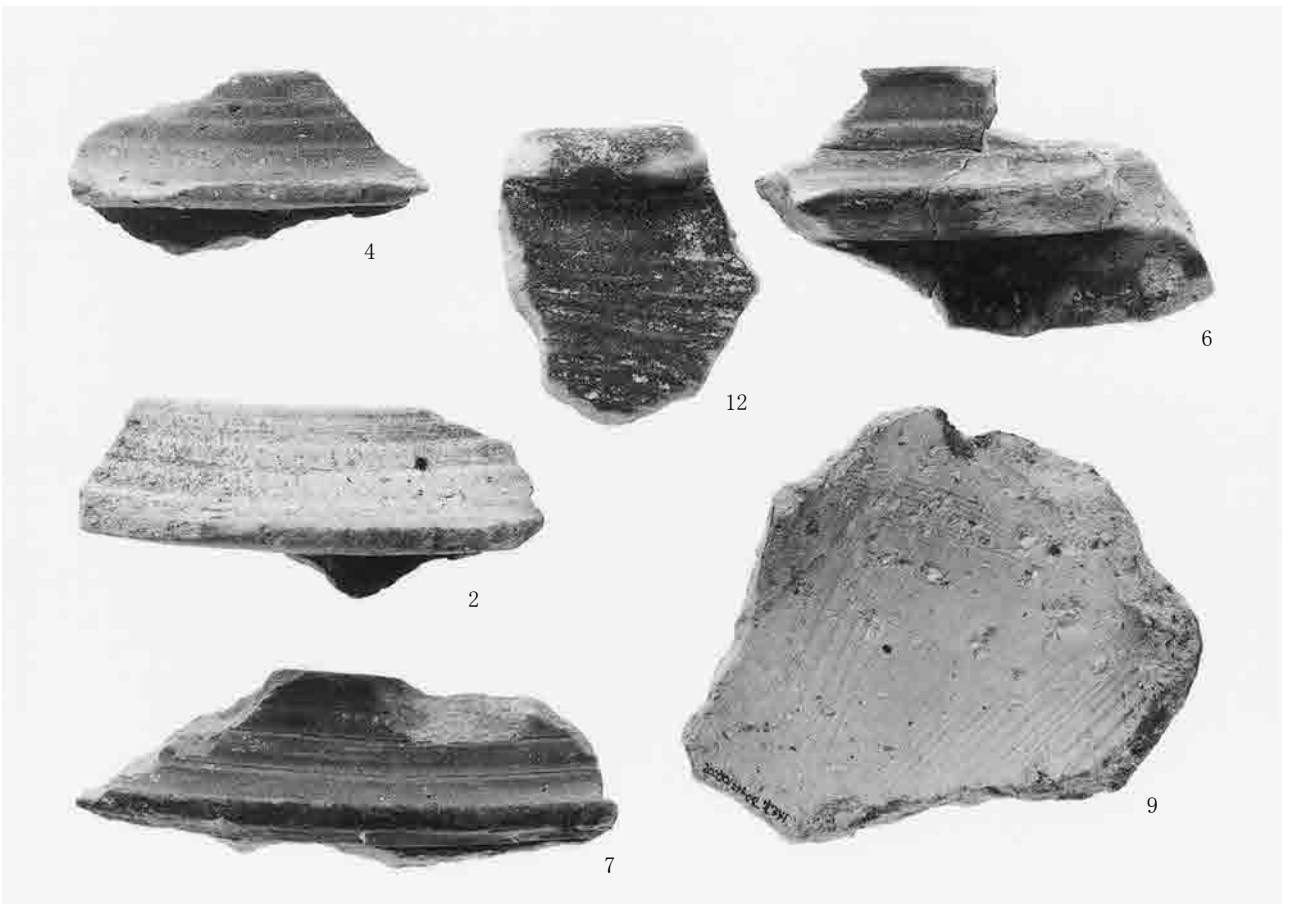
a 2区06畦畔と02溝 西から



b 同上 東から

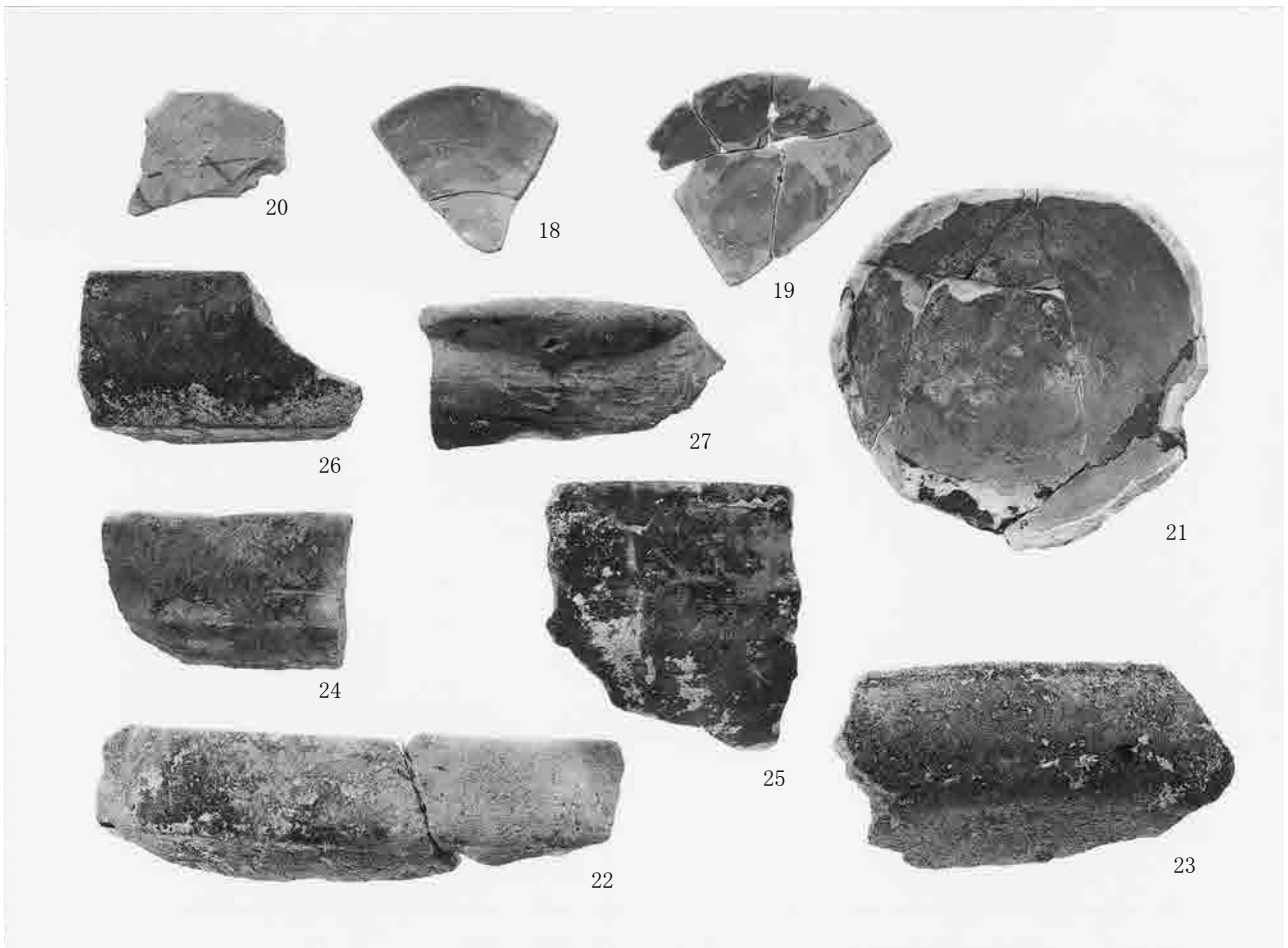


a 中国製磁器



b 中世国産土器

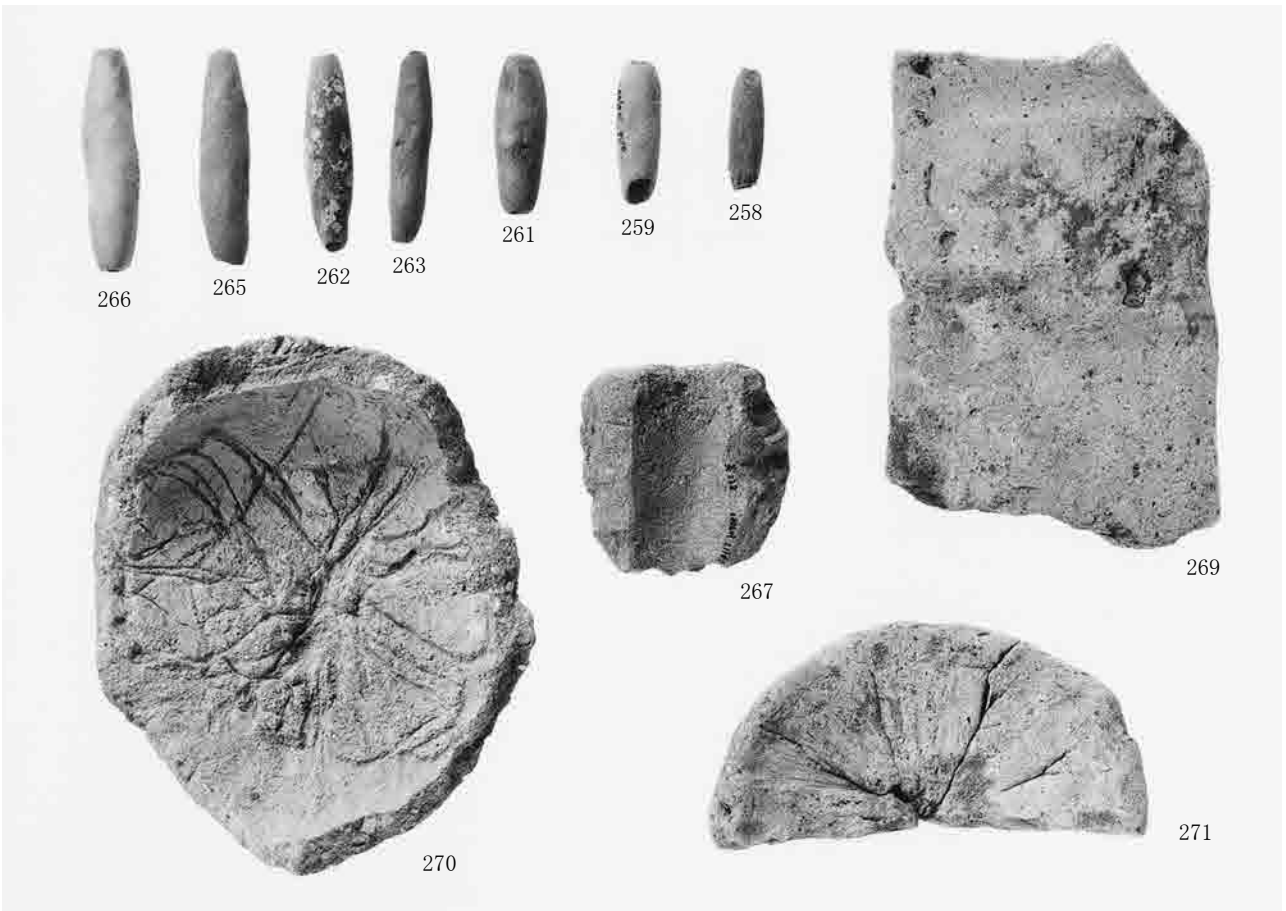
图版6 土師質土器・瓦質土器



a 土師質土器



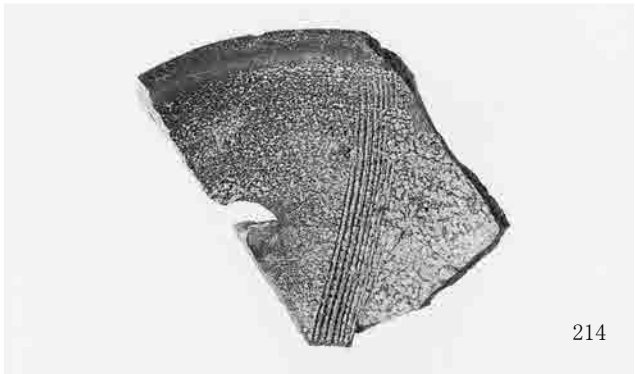
b 瓦質土器火鉢



a 漁具



b 石製品



## 報 告 書 抄 録

ふりがな	わかみやいせき
書 名	若宮遺跡
副書名	南海本線（泉佐野市）連続立体化事業（その5）に伴う発掘調査報告書
巻 次	
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第157集
編著者名	西川寿勝 奈良拓弥 渡辺晴香 佐藤友翔
編集機関	（財）大阪府文化財センター
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 Tel 072-299-8791 FAX 072-299-8905
発行年月日	2007年3月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′		(㎡)	
わかみやいせき 若宮遺跡	おおさかふ 大阪府 いずみきのし 泉佐野市 うえまち3ちょうめちない 上町3丁目地内	27213	83	35° 25′ 30″	137° 21′ 20″	20060501 ～ 20060731	835	南海本線連続立体化事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若宮遺跡	集落	中世 近世	溝・土坑 溝・土坑・井戸	瓦質土器・石製品 陶磁器・瓦・漁具	中国製磁器 墨書土器

要 約	<p>若宮遺跡の発掘調査は継続的に行われ、これまでに12,000㎡以上に及ぶ。今回の調査の結果、15～19世紀にいたる町屋の遺跡が確認された。発見された主な遺構は溝・土坑・井戸などである。</p> <p>15～16世紀は遺構・遺物が少なく、遺構は屋敷を区画する溝・土坑などが発見された。遺物は羽釜や搦鉢の調理具と瓦・石製品がある。その他、中国製青磁・白磁・青花などがある。</p> <p>16世紀末～17世紀初頭も遺構・遺物が少なく、茶道具と思われる天目茶碗が井戸からみつかった。その他、唐津焼・備前焼・瀬戸美濃焼などの国産陶器がある。</p> <p>17世紀前半から19世紀初頭頃までの遺構・遺物は大量に発見された。遺物は国産の磁器・陶器・瓦質土器・土師質土器である。国産陶器は伊万里焼・波佐見焼が多く、少量の瀬戸美濃焼がある。国産陶器は唐津焼・萩焼・備前焼・丹波焼・堺焼・京焼・信楽焼・大谷焼・瀬戸美濃焼などがある。遺構から建物配置や町屋の範囲は確認できなかったが数多くの井戸・ゴミ穴、瓦が発見された。以上より、近世の佐野町屋の繁栄がうかがえる。その後、調査地は幕末頃に水田化され、明治30年頃に鉄道が敷設、現在は南海本線泉佐野駅が設置されている。</p>
--------	--

# SUMMARY

Osaka Center for Cultural Heritage carried out the excavation of the Wakamiya site which is situated on Uemachi, Izumisano City, Osaka prefecture, Japan from May to July 2006.

The continuous excavation had been carried out so far, the excavated area was over 12,000 square meters.

The excavation unearthed the remains of an old town (machiya) from the 15th to the 19th century.

Discovered features were moats, earthen pits, wells, and the like. There were only a few belong to the period from the 15th to the 16th century. The excavated features were the moats to mark the boundary of each residence, the baulks for rice field cultivation, the rubbish pits, and the like. The excavated objects were the cooking implements such as flanged kettles and earthenware bowls, the roof-tiles, the stone-made objects which were pieces of burial stones, and the like. Also, the celadons, the white porcelains, and the porcelains (blue and white) made in China were excavated.

There were also quite a few belong to the period from the end of the 16th century to the beginning of the 17th century. A Temmoku tea bowl was discovered from one of the wells. Also the table wares and the cooking implements which were ceramics made in Japan were found. Those were Karatsu wares, Bizen wares, and Seto-Mino wares.

A great number of features from the first half of the 17th century to the beginning of the 19th century were discovered. The excavated objects were table wares, cooking implements, and the like which were ceramics, porcelains, unglazed wares made in Japan. Most of the porcelains were Imari wares and Hazami wares, some of those were Seto-mino wares. Ceramics were Karatsu wares, Hagi wares, Bizen wares, Tamba wares, Sakai wares, Kyoto wares, Shigaraki wares, Otani wares, Seto-mino wares, and the like. Even though the layout of structures at that time and the limit of the town could not be cleared through those features, a large number of wells, rubbish pits, roof-tiles, and the like were discovered.

With the above evidences, the prosperity of the old town during the Edo period was illustrated.

The research area had been cultivated for rice field after the first half of the 19th century, and then, at the end of 19th century, the railroad was build.

Now, the train station of the Nankai line stands there.

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第157集

## 若宮遺跡

南海本線（泉佐野市）連続立体化事業（その5）に伴う発掘調査報告書

発行年月日／2007年3月30日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所  
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号